

## 世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群公開講座

### 第4回「沖ノ島祭祀以前」

沖ノ島は、なぜ「神宿る島」となったのでしょうか？

この問題を理解するためには、まずは大規模な祭祀が開始される古墳時代以前の沖ノ島と宗像地域を理解することが欠かせません。

沖ノ島から出土したとされる弥生時代の銅矛の意義や、田熊石畑遺跡の青銅器副葬墓など本土側の遺跡とのかかわりなど、玄界灘をとりまく状況を広く踏まえつつ、当時の宗像を考えます。

日 時：令和元年 9 月 21 日（土） 13:30-16:30

場 所：海の道むなかた館 講義室

スケジュール：

13:30 開会あいさつ

13:40 講演 1「沖ノ島祭祀の成立前史」武末 純一

15:00 休憩(15分)

15:15 講演 2「沖ノ島出土銅矛と青銅器祭祀」柳田 康雄

16:30 閉会

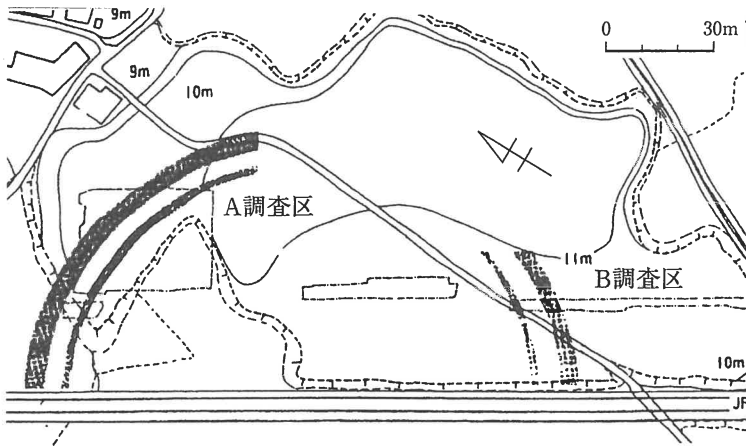


図1 福岡市那珂遺跡の二重環溝

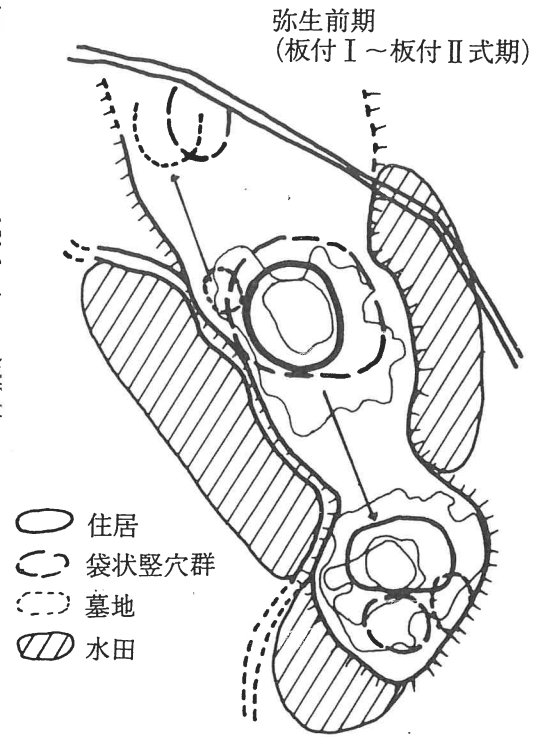


図2 板付遺跡の集落変遷図

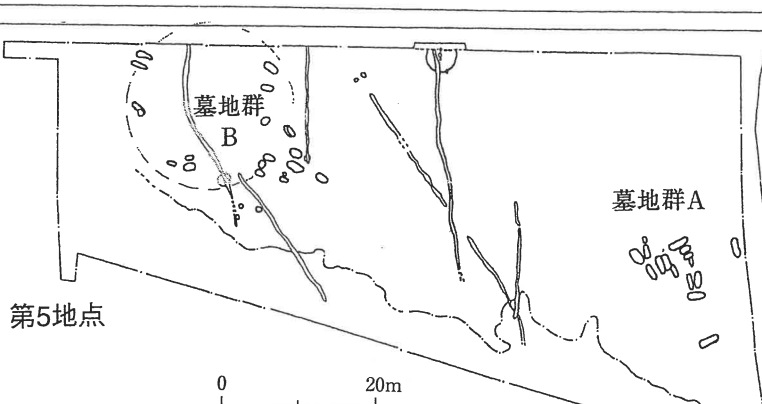
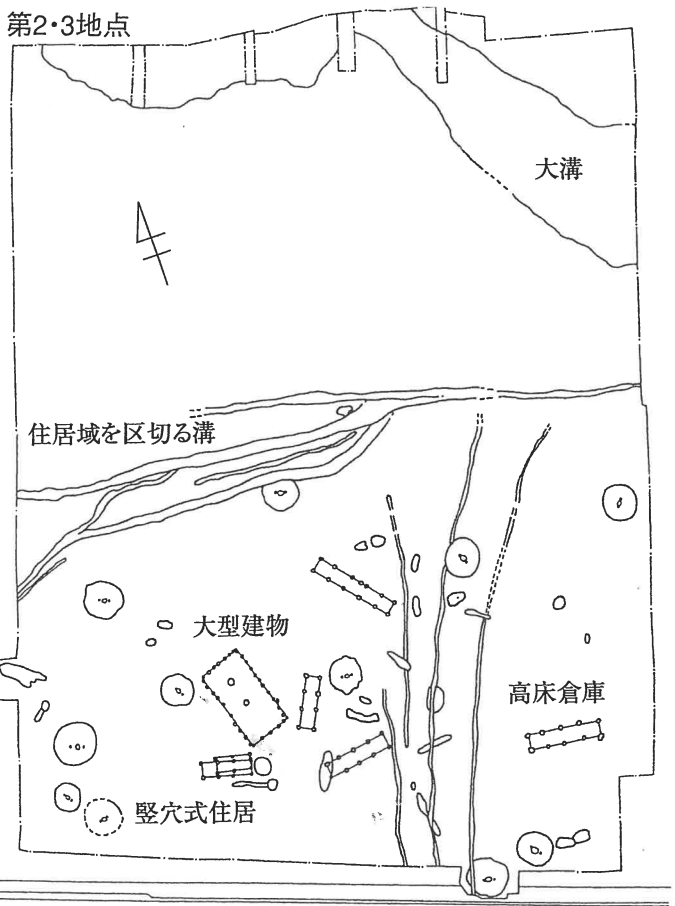
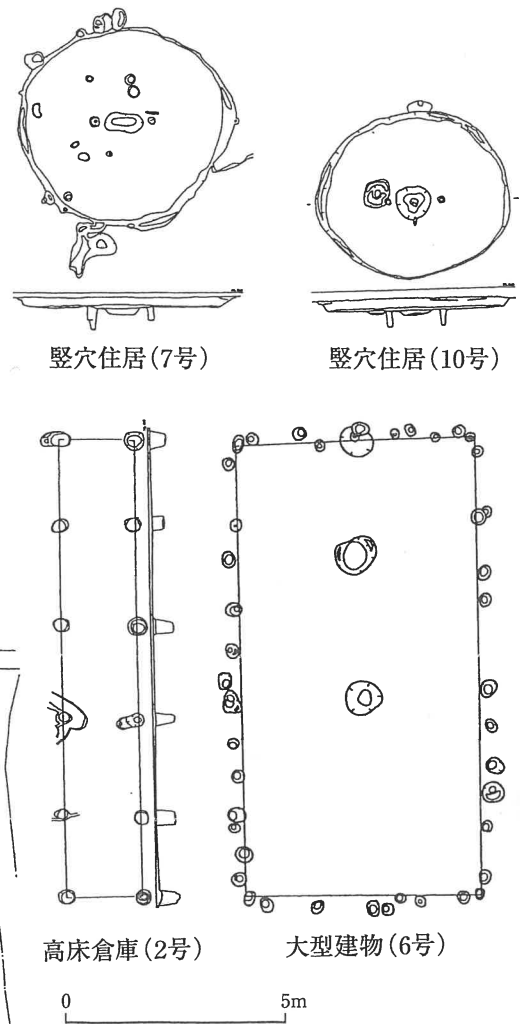


図3 江辻遺跡全体図



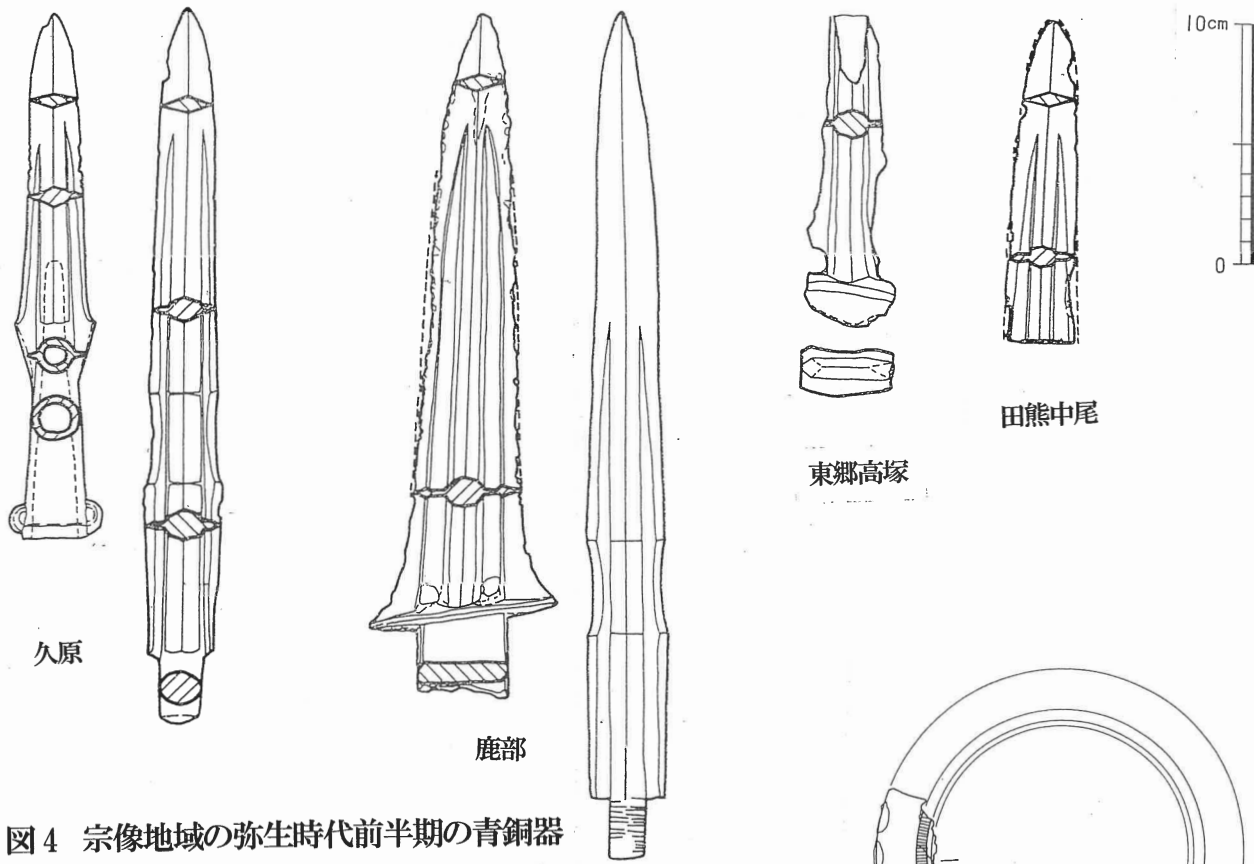


図4 宗像地域の弥生時代前半期の青銅器

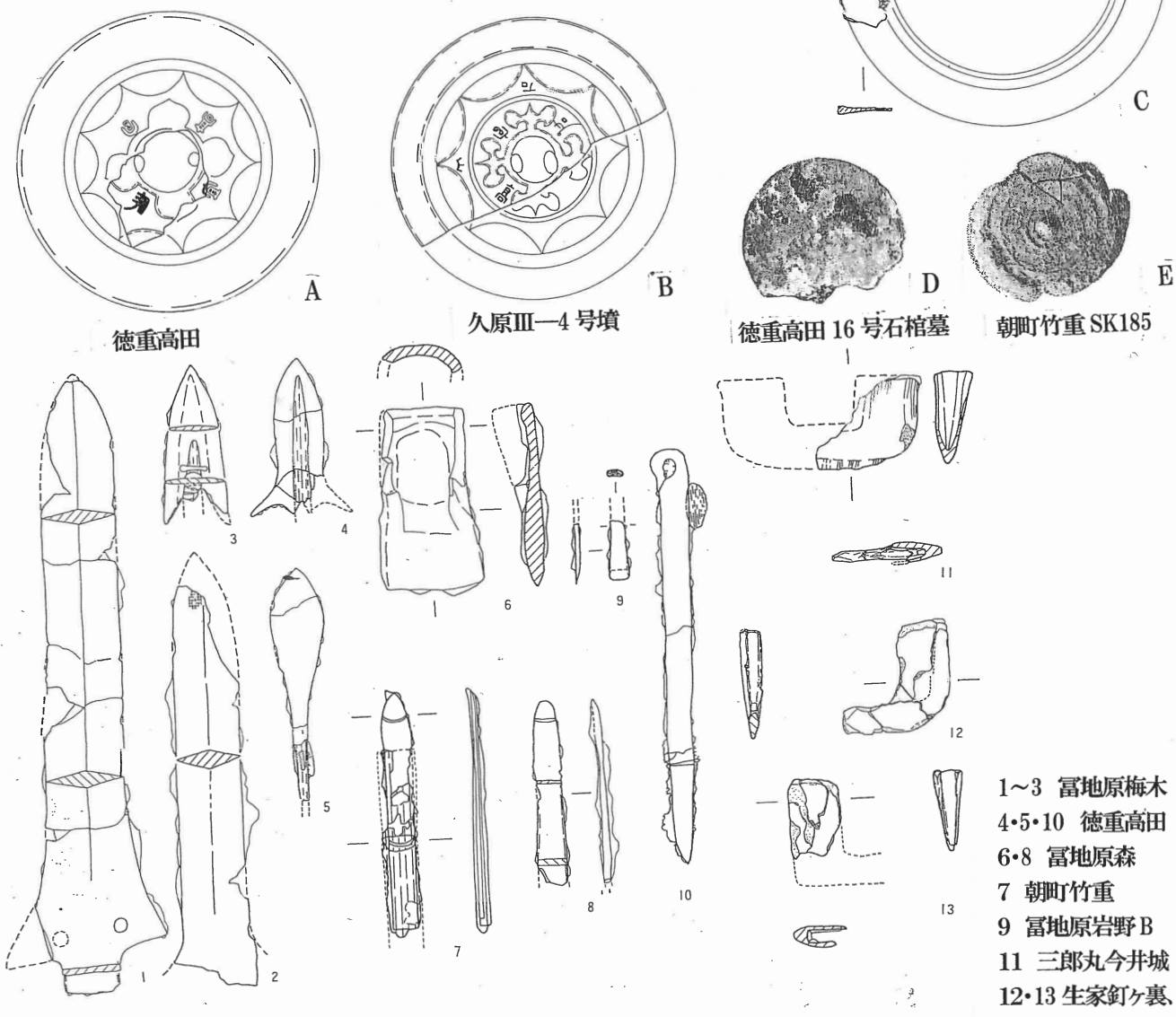
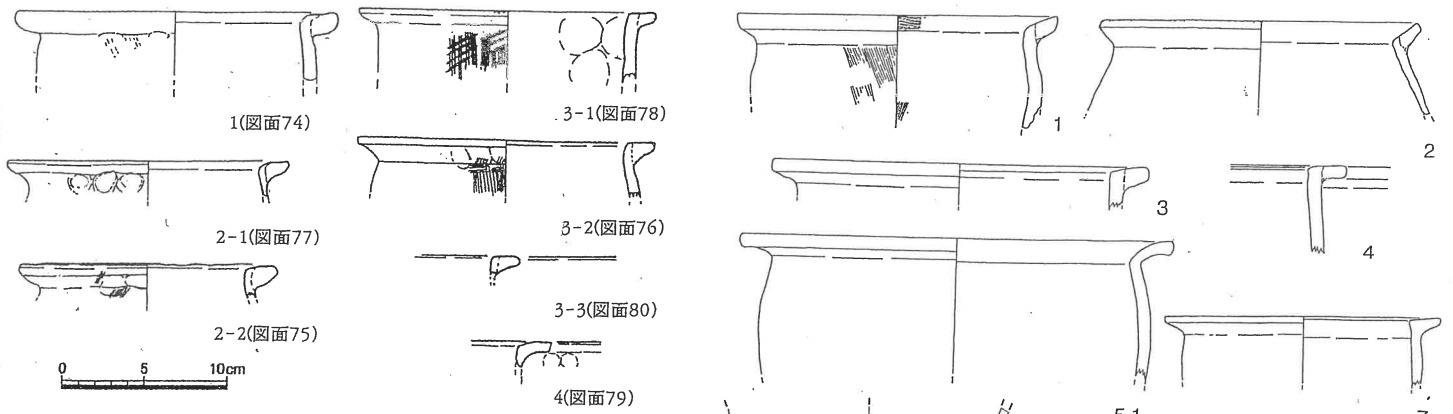
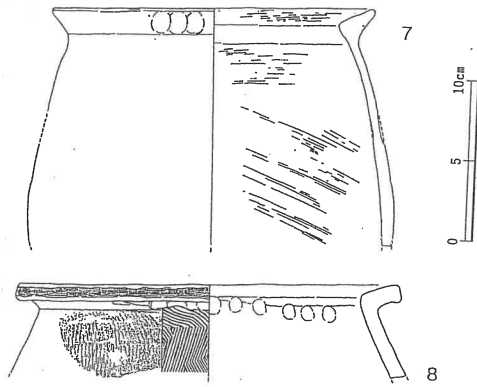


図5 宗像地域の弥生時代後半期の銅鏡と銅鋤先および鉄器

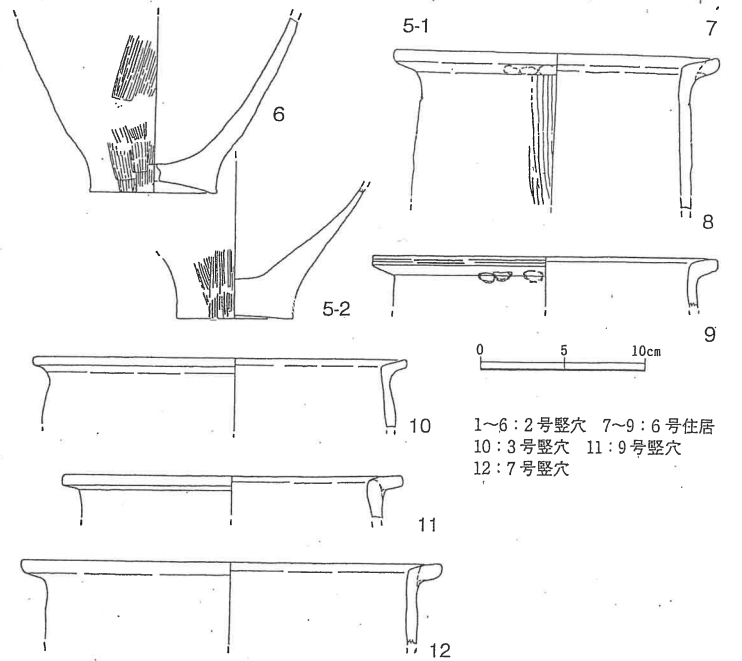
- 1~3 富地原梅木
- 4・5・10 徳重高田
- 6・8 富地原森
- 7 朝町竹重
- 9 富地原岩野B
- 11 三郎丸今井城
- 12・13 生家釘ヶ裏、勝浦坂口



1 陽南下西里遺跡5号竪穴の弥生系土器(再実測分)

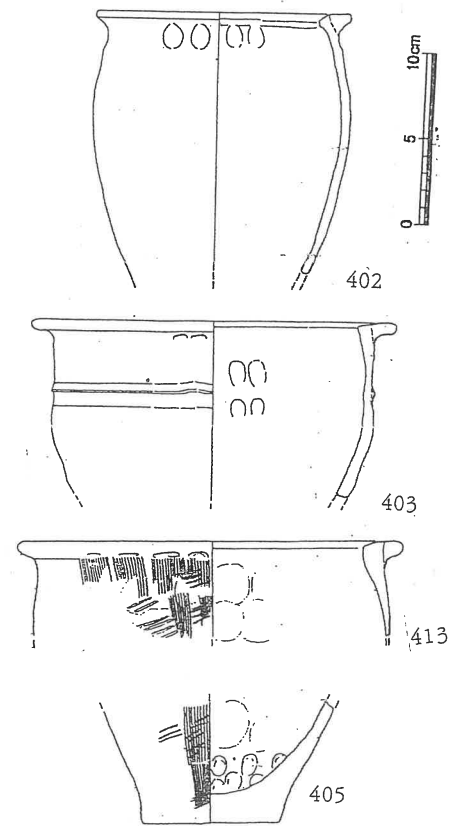


2 梅谷洞遺跡Ⅱ地区(7~9)の弥生系土器

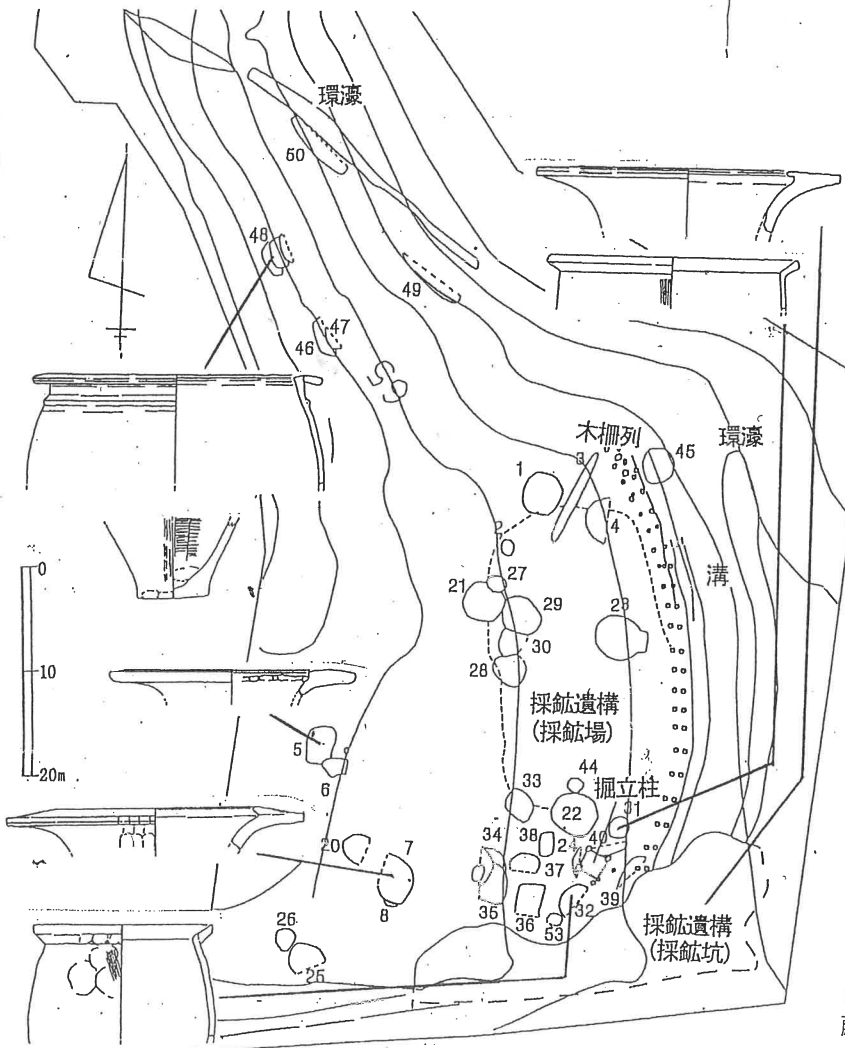


1~6: 2号竪穴 7~9: 6号住居  
10: 3号竪穴 11: 9号竪穴  
12: 7号竪穴

3 中山洞薬水Ⅱ遺跡の弥生系土器



4 蔚州新華里遺跡A4-5地区 三韓4号竪穴の弥生系土器



5 達川遺跡の弥生系土器

3 図6 蔚山地域の弥生系土器



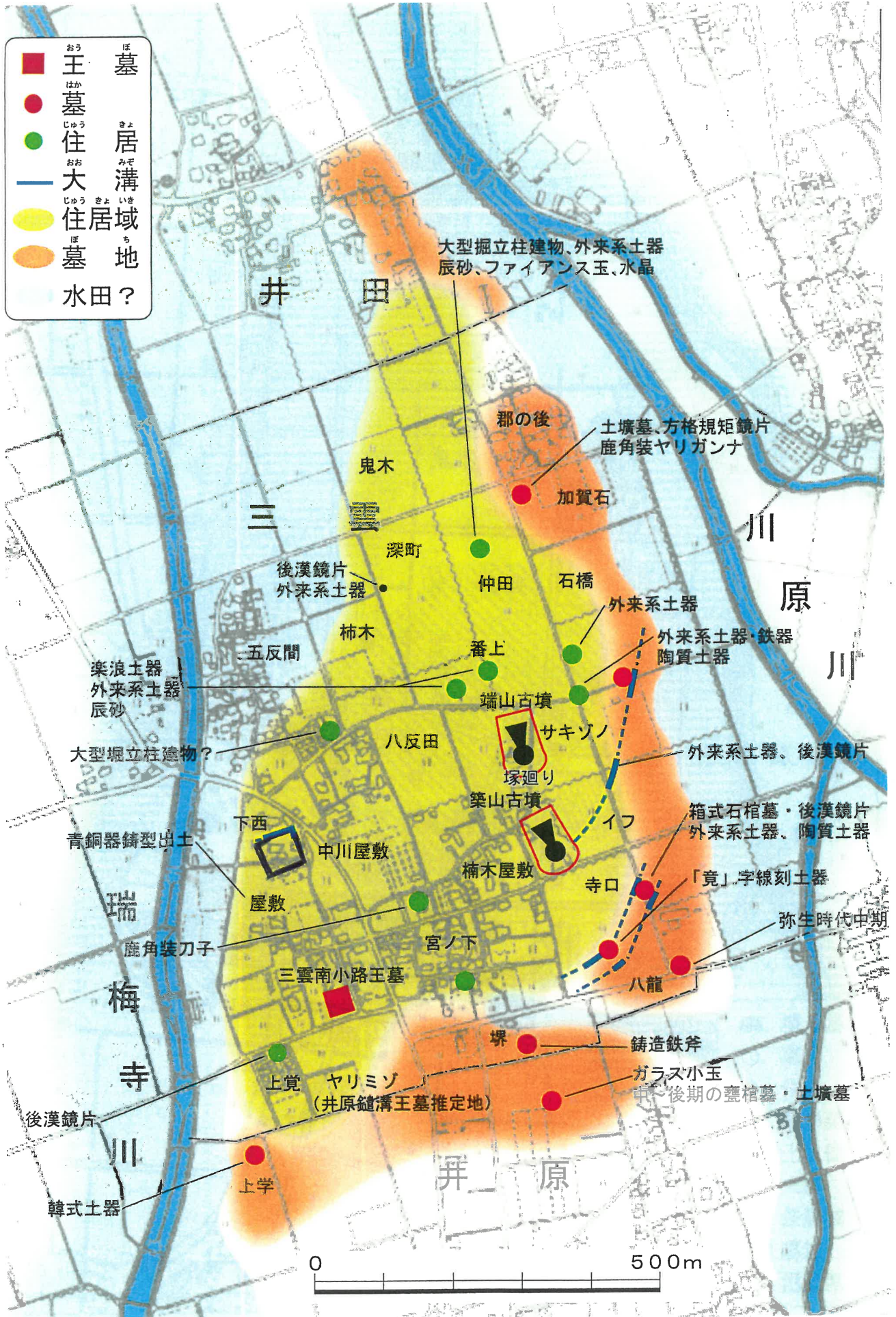
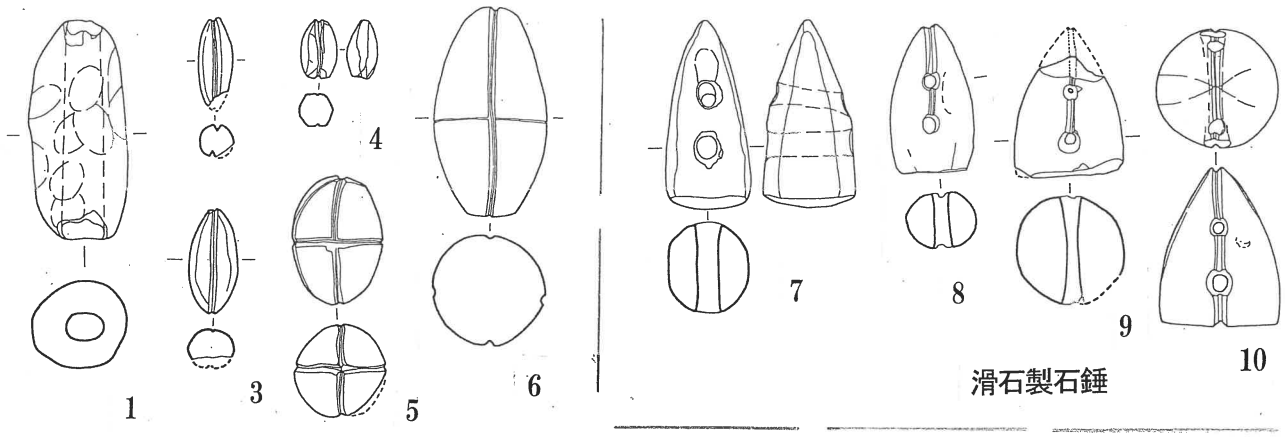
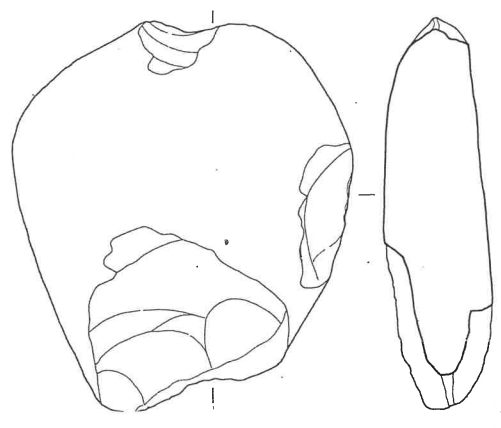


図7 三雲・井原遺跡

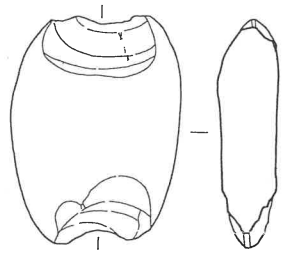


土錘

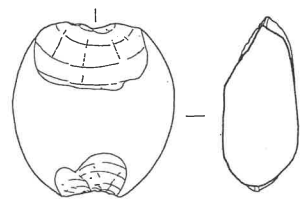
滑石製石錘



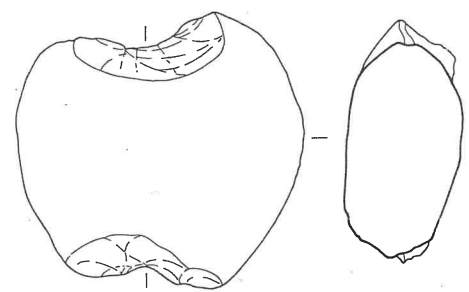
11



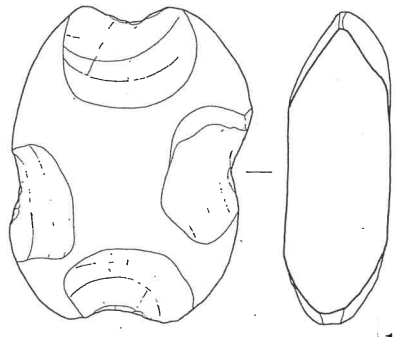
12



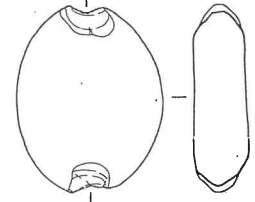
14



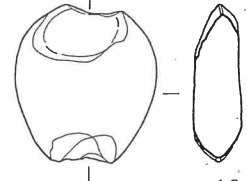
17



13

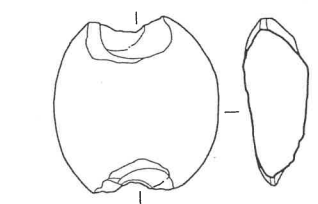


15

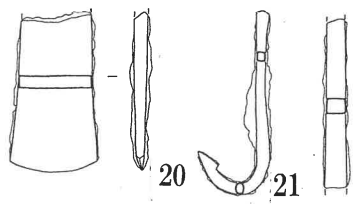


16

礫石錘



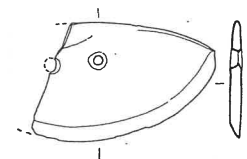
18



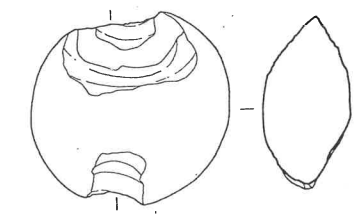
20

21

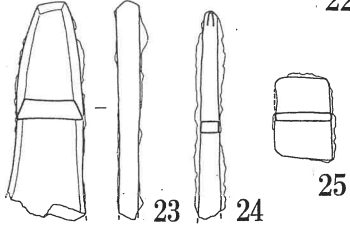
22



26



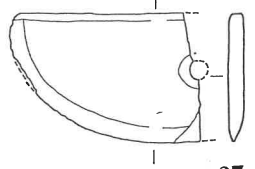
19



23

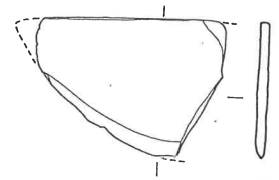
24

25



27

鉄器



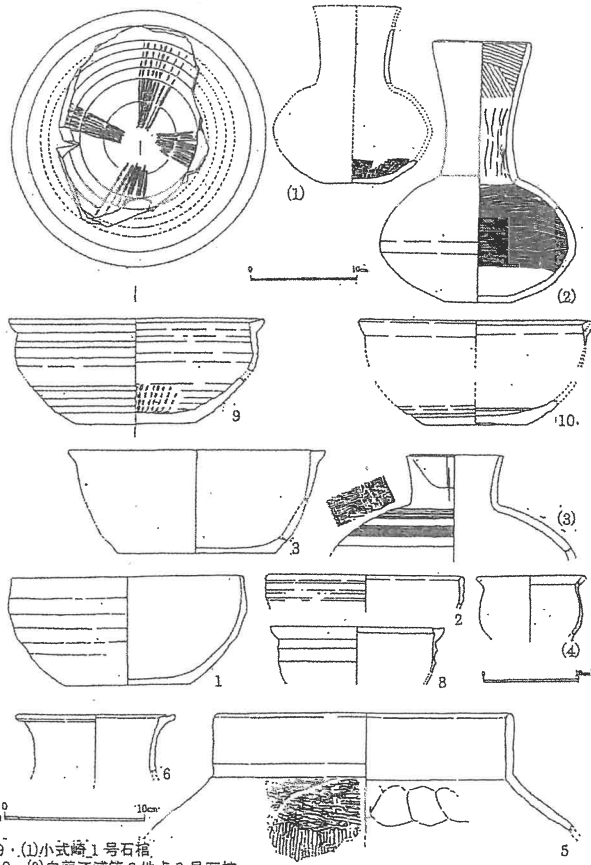
28

石庖丁

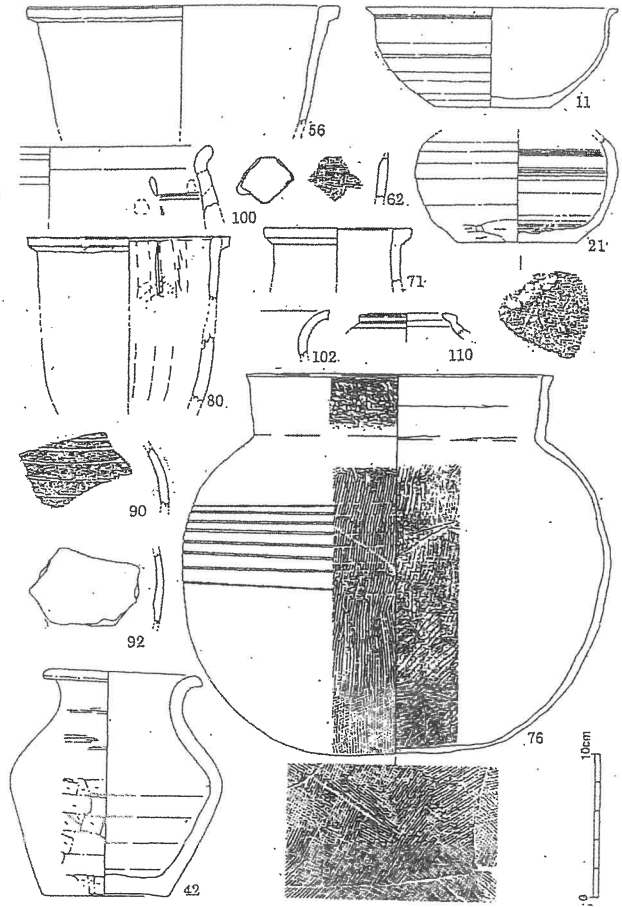


図8 御床松原遺跡出土遺物



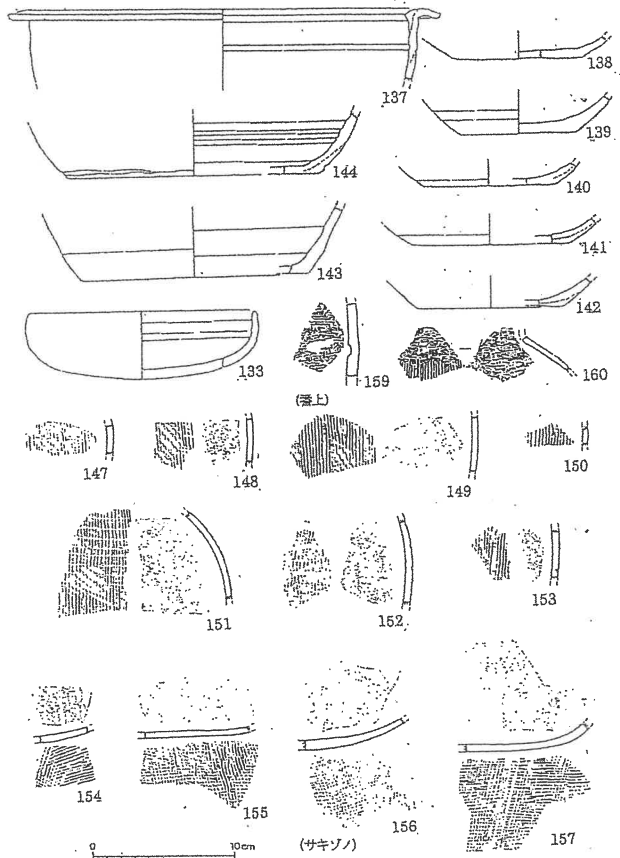
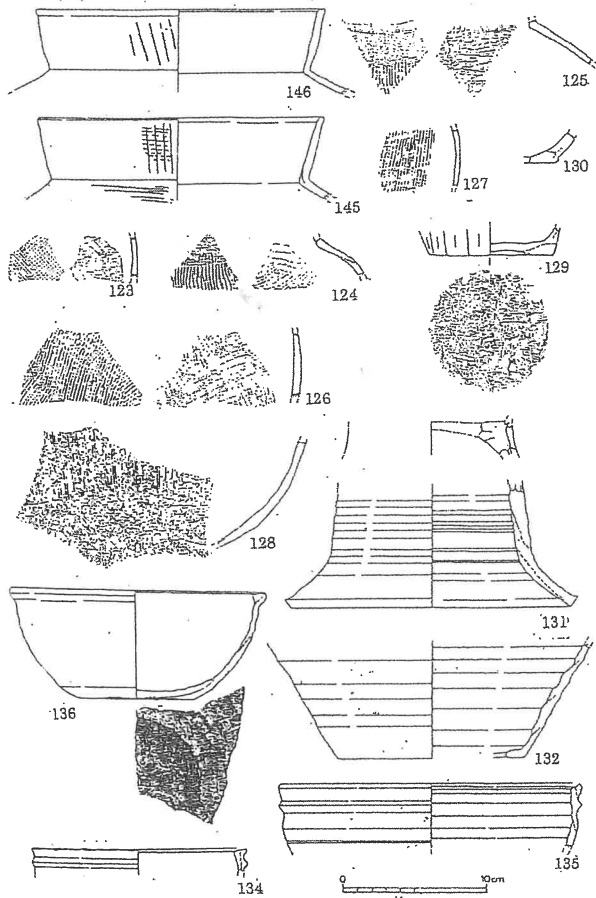


9・(1)小式崎1号石椁  
 10・(2)白蓮江浦第2地点2号石椁  
 3・(3)木坂2号石椁 2・(4)木坂1号石椁  
 1 経限1号 5・6 大田原ヤマト



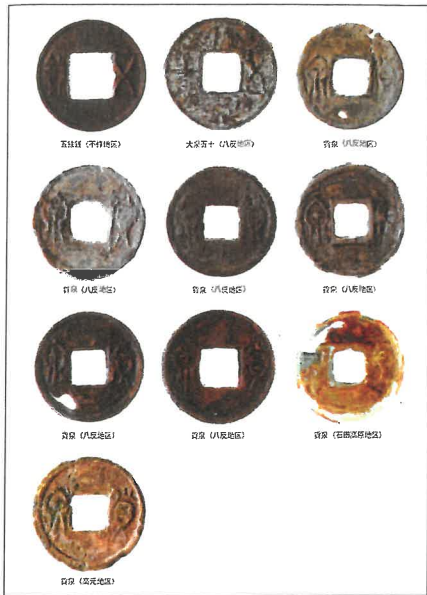
(1)対馬の楽浪土器

(2)原の辻遺跡の楽浪土器



(3)三雲・井原遺跡番上II-5 土器溜とその付近の楽浪土器

図9 北部九州の楽浪土器



原の辻



雲北里



伏龍洞

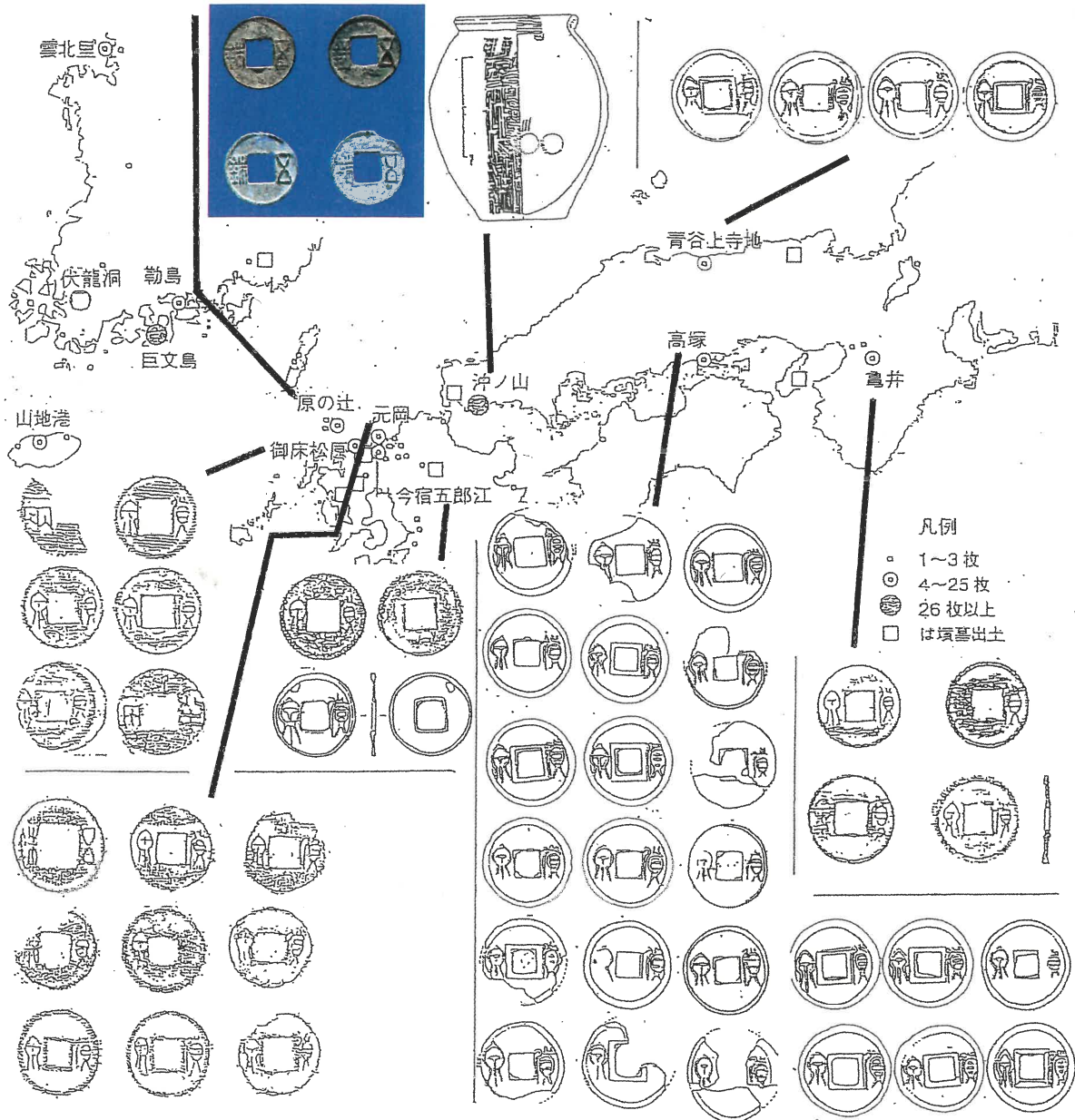


図10 日韓の中国銭貨(弥生時代中期～古墳時代前期)



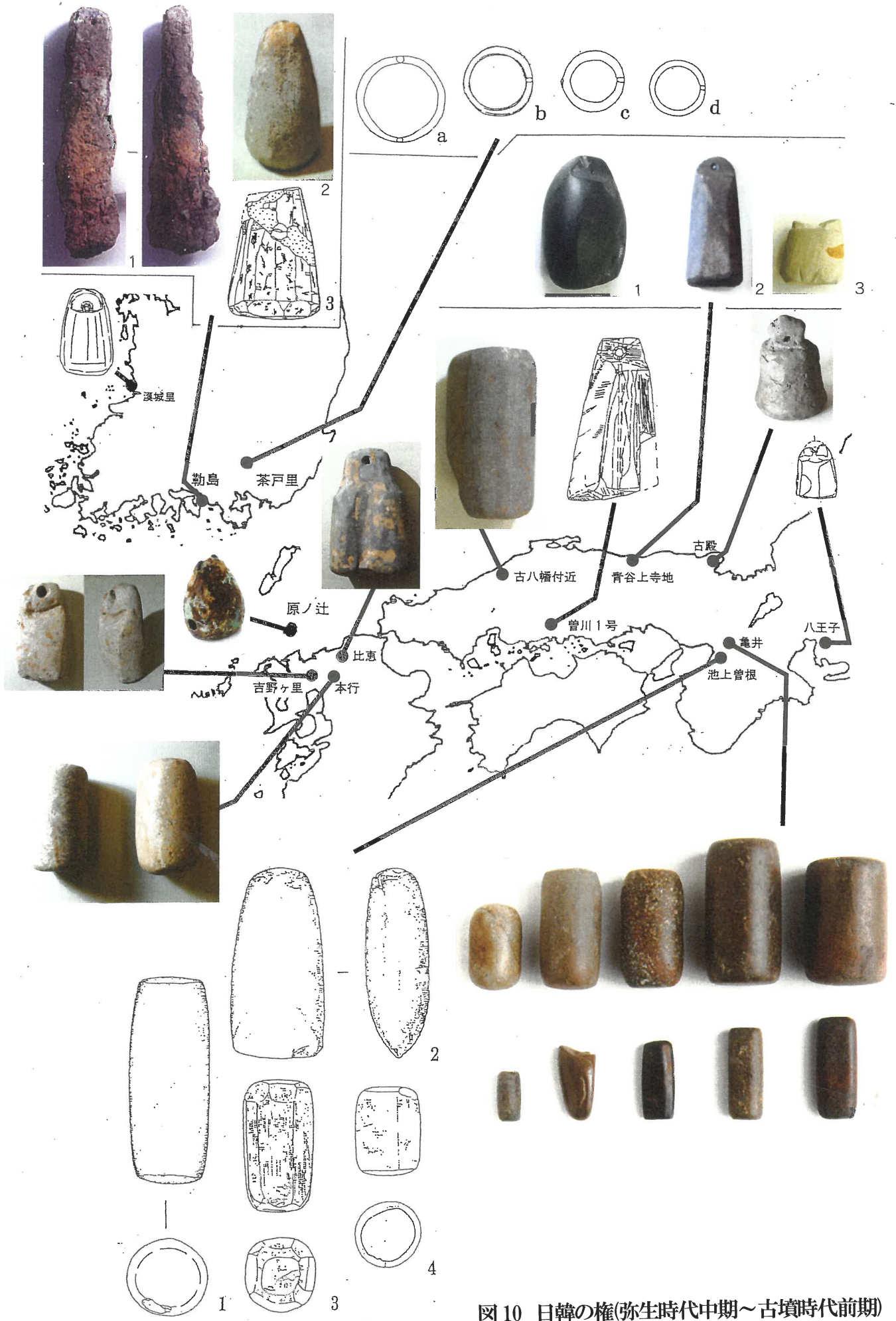
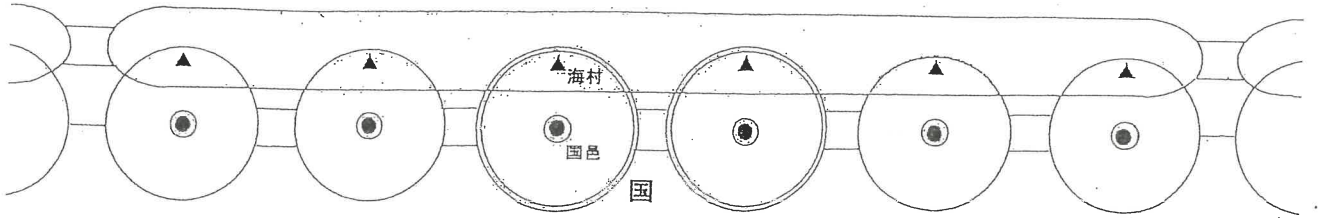


図10 日韓の櫛(弥生時代中期～古墳時代前期)



国々の連合体(地域政権)

図11 海村と国邑の関係模式図

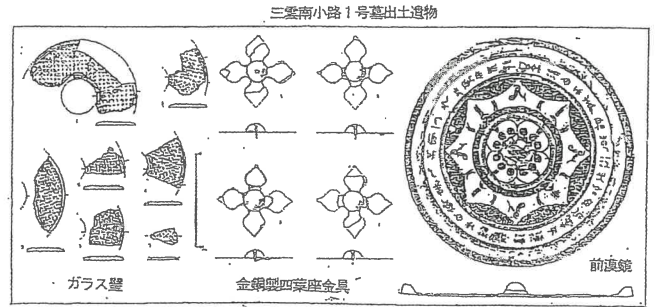
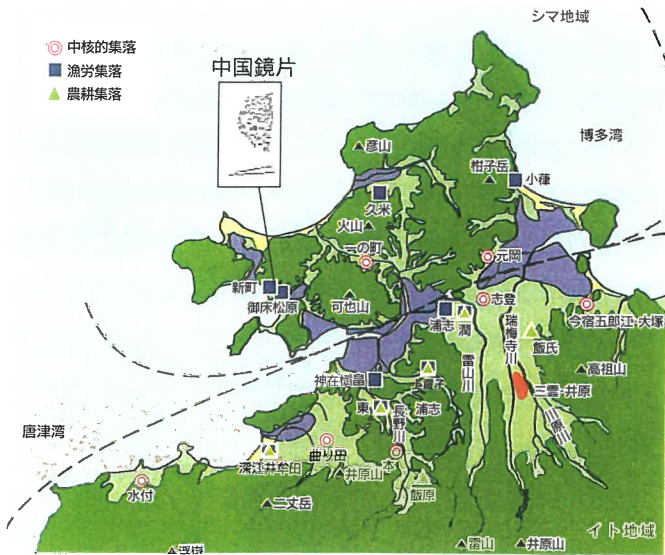
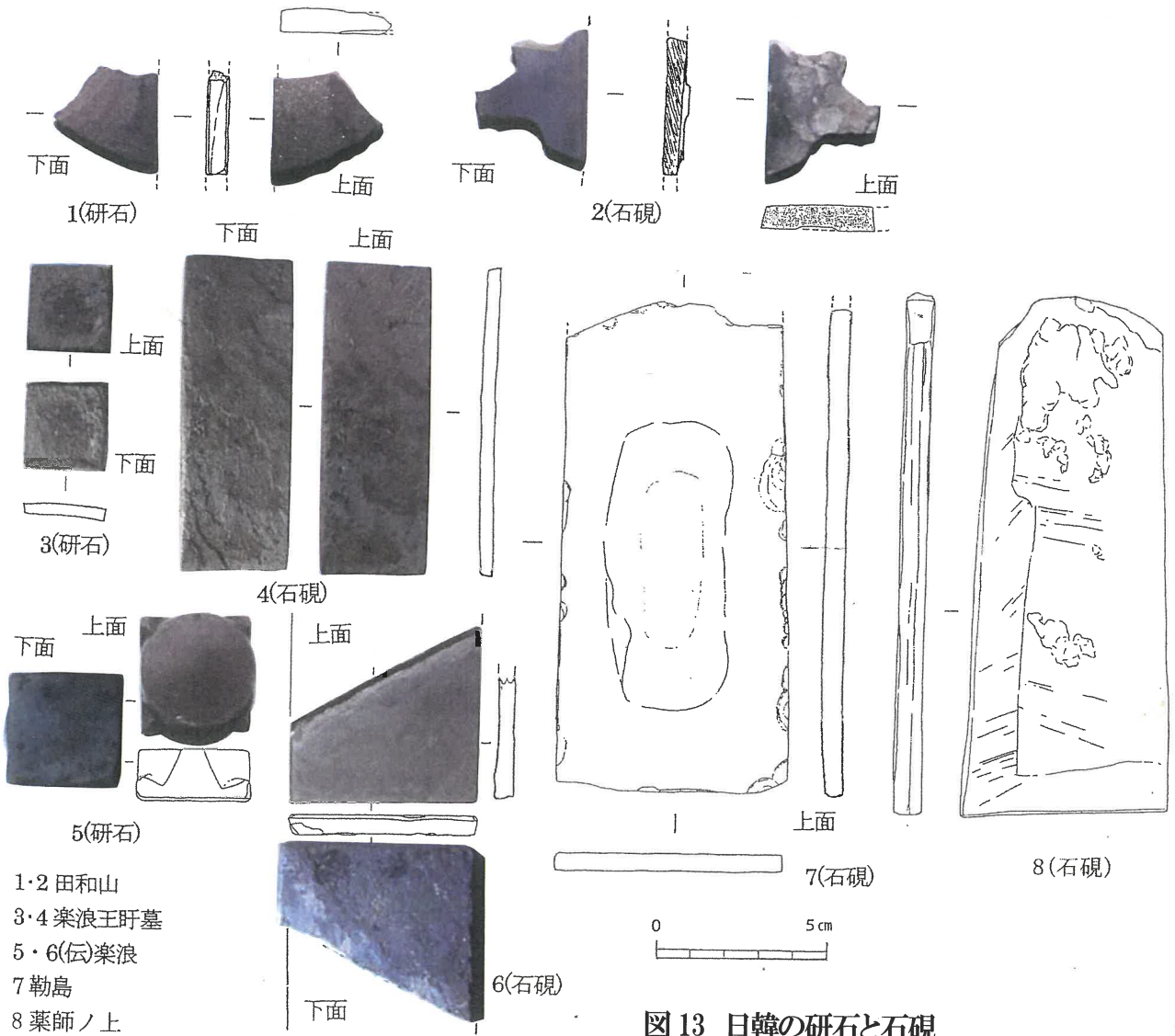


図12 伊都国の国邑と海村



- 1・2 田和山
- 3・4 楽浪王盃墓
- 5・6(伝)楽浪
- 7 靱島
- 8 薬師ノ上

図13 日韓の研石と石硯

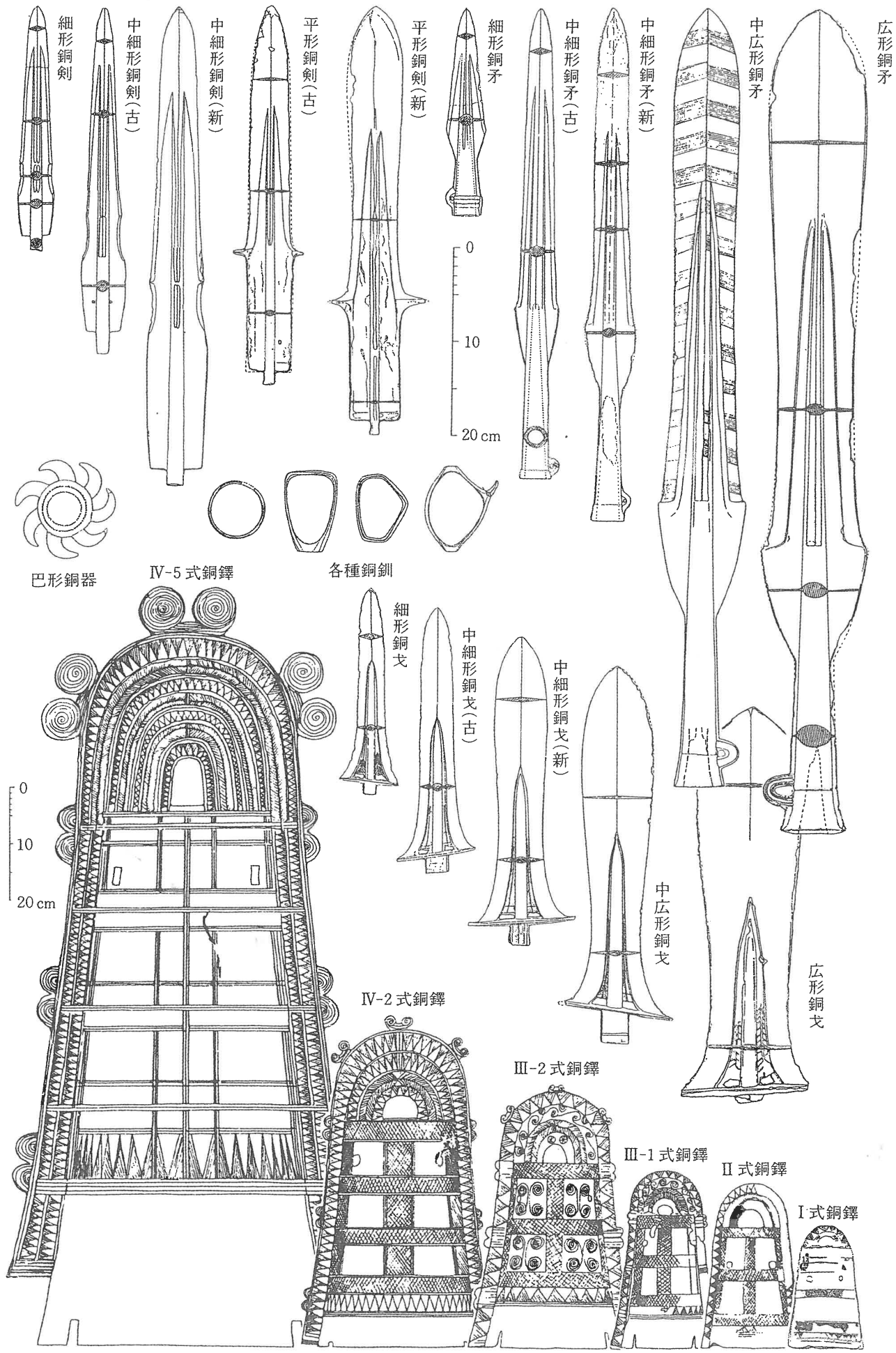
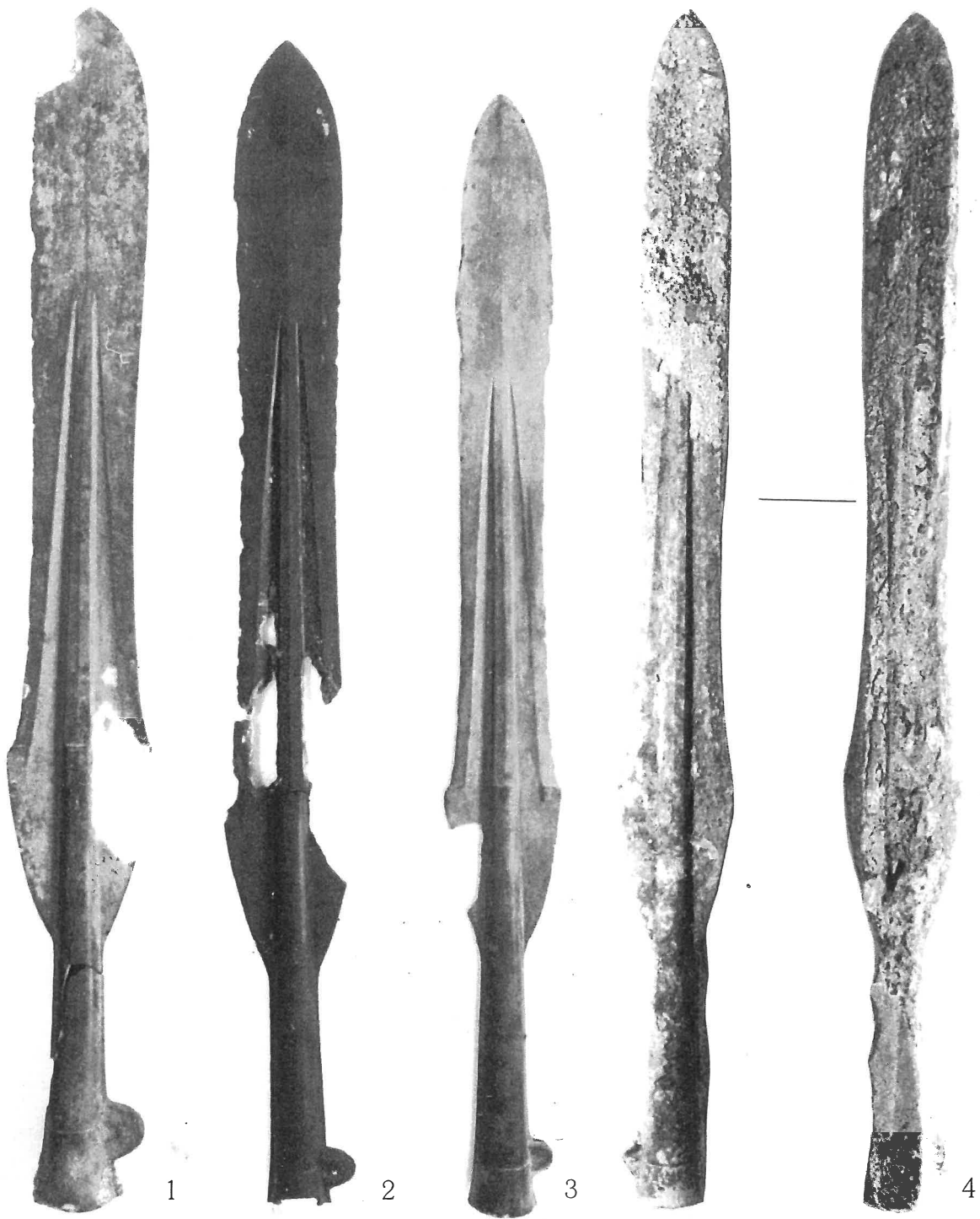


図14 弥生時代青銅器の種類

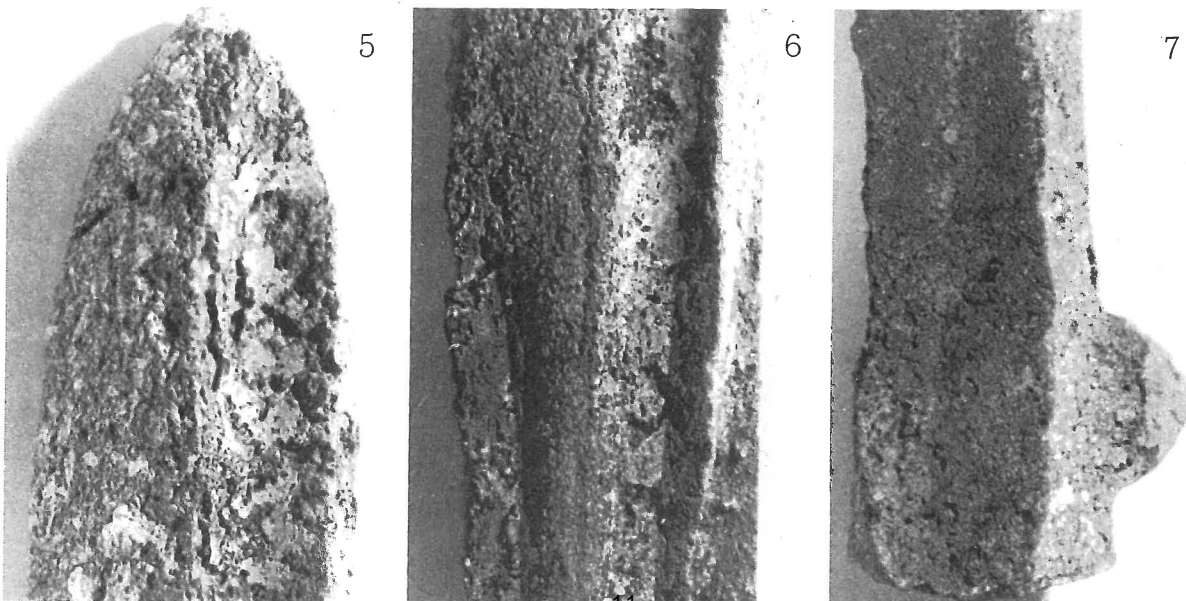


図15. 埋納銅矛



1～3 長崎県老岐天ヶ原出土銅矛

4. 大分県鳥越出土銅矛

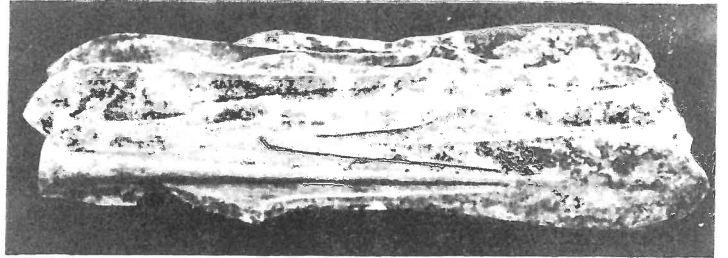


5、7 鳥越出土銅矛圧痕部分

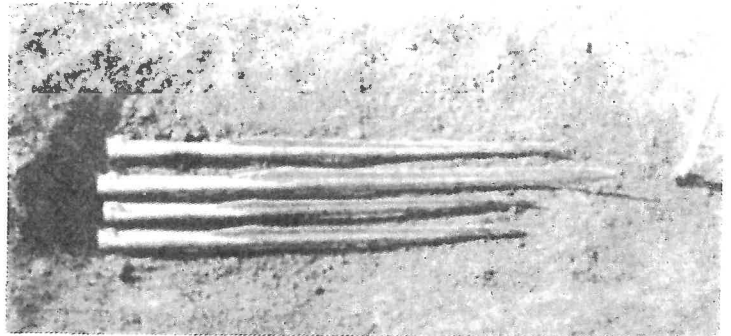




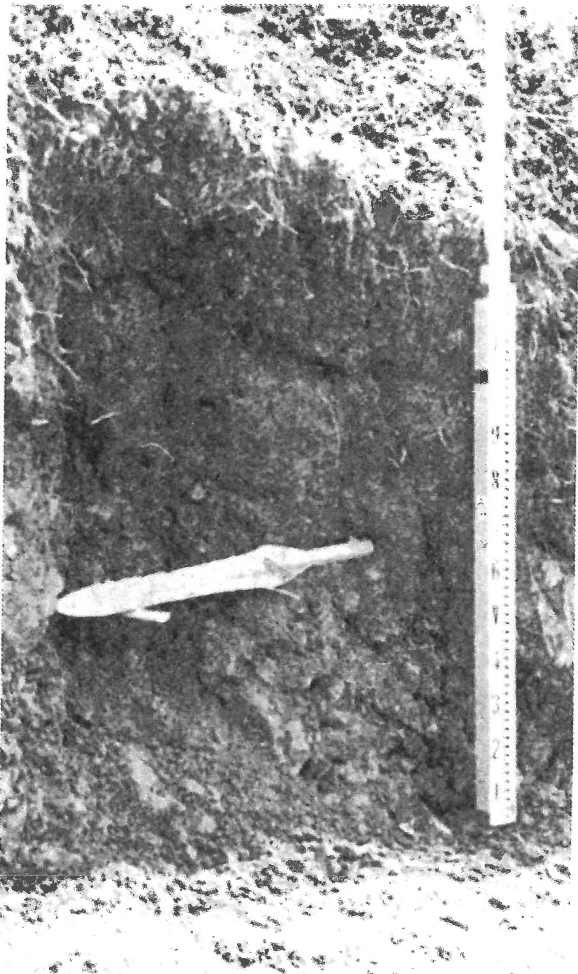
1. 福岡県西方



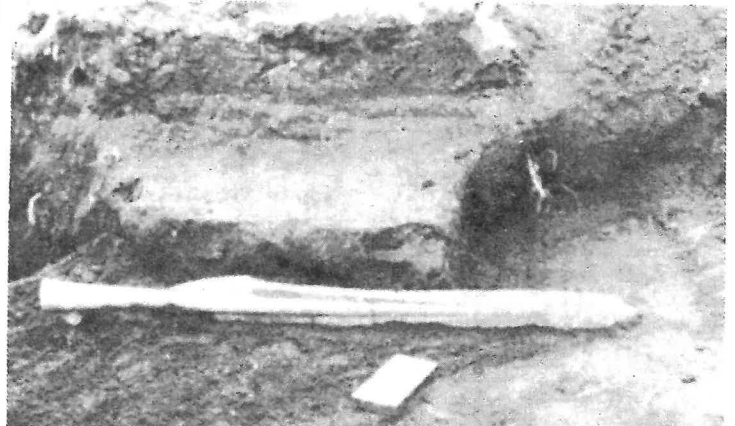
2. 福岡県辻 (復元)



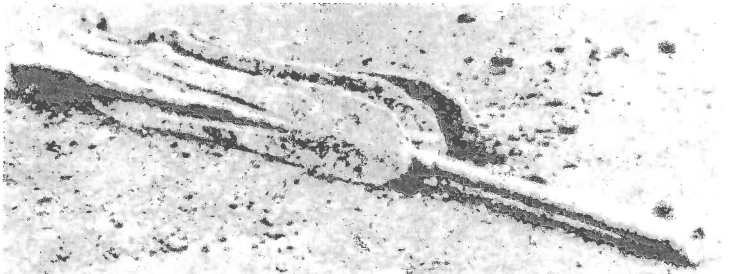
3. 熊本県轟 (復元)



5. 高知県遅倉 (復元)



4. 熊本県上西原 (復元)



6. 高知県西ノ川口 (復元)

図16 埋納銅矛の出土状態

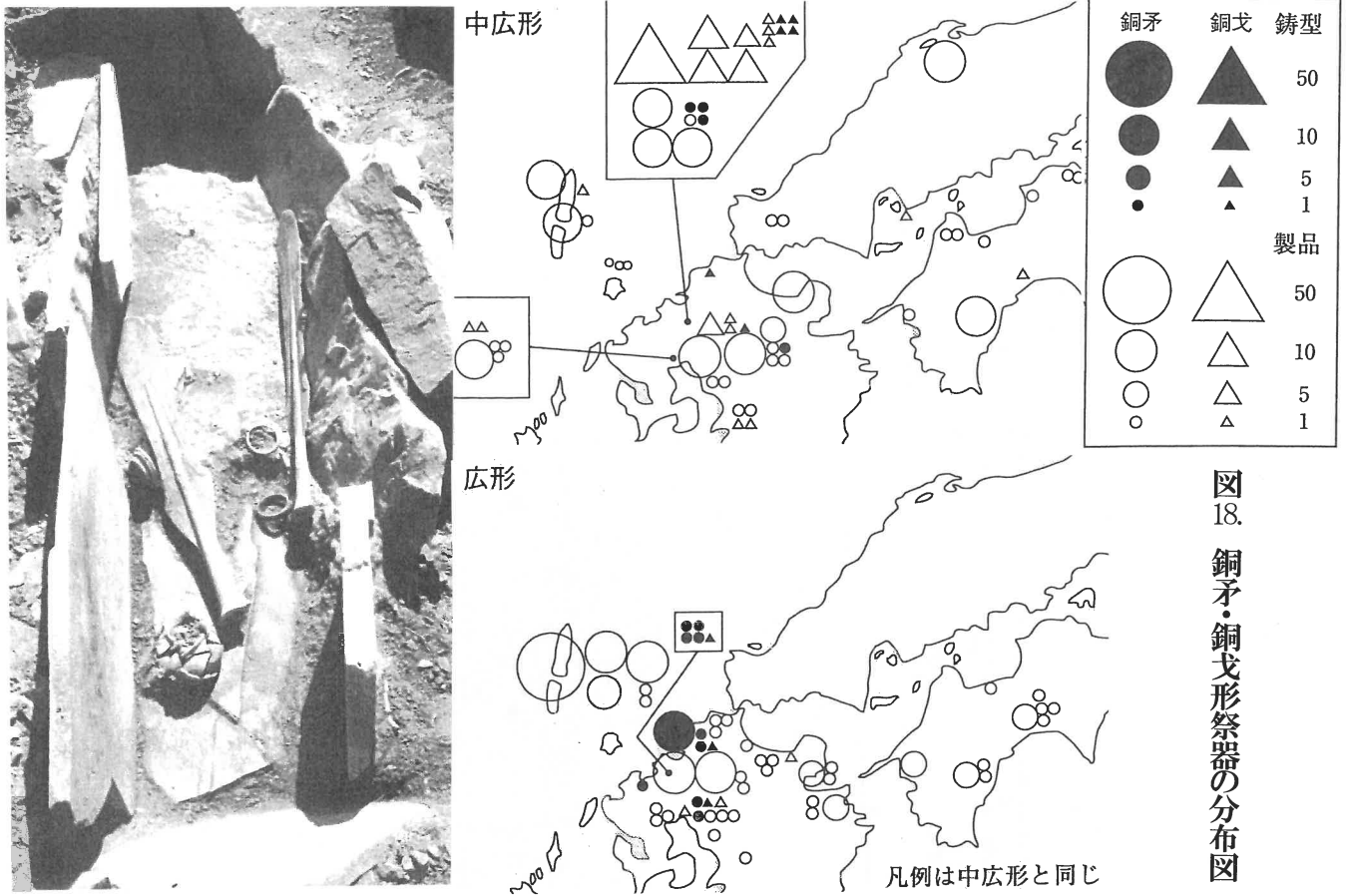


図18. 銅矛・銅戈形祭器の分布図

図17 対馬市塔ノ首3号石棺

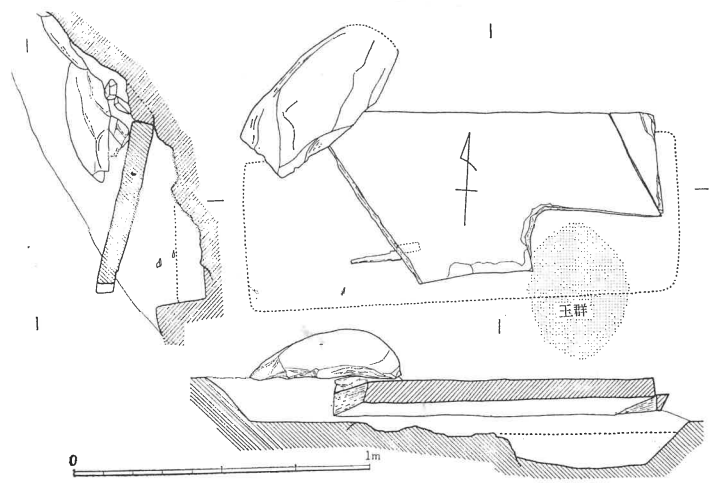


図19 対馬市下ガヤノキ E 地点

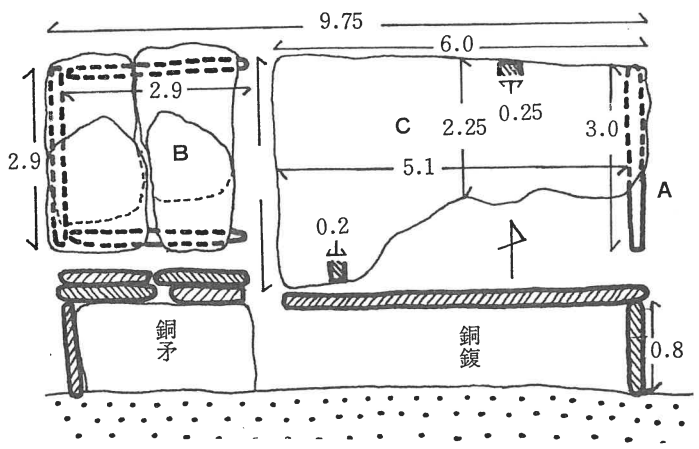
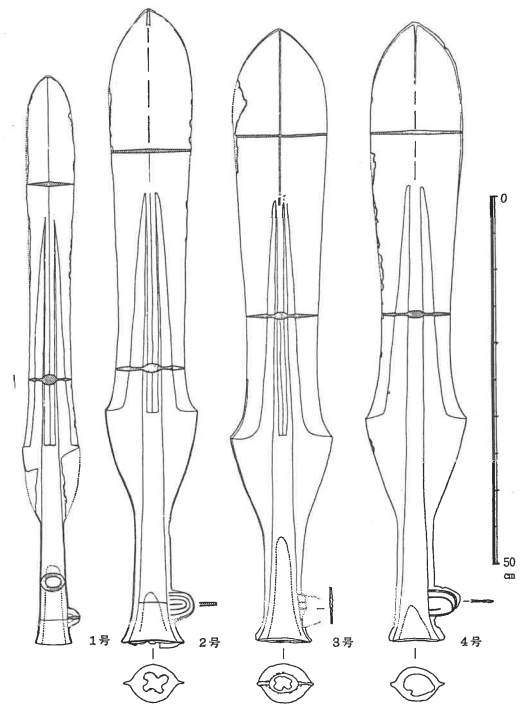


図20 対馬市クビル遺跡の遺構(左)と銅矛・銅鍔(右)

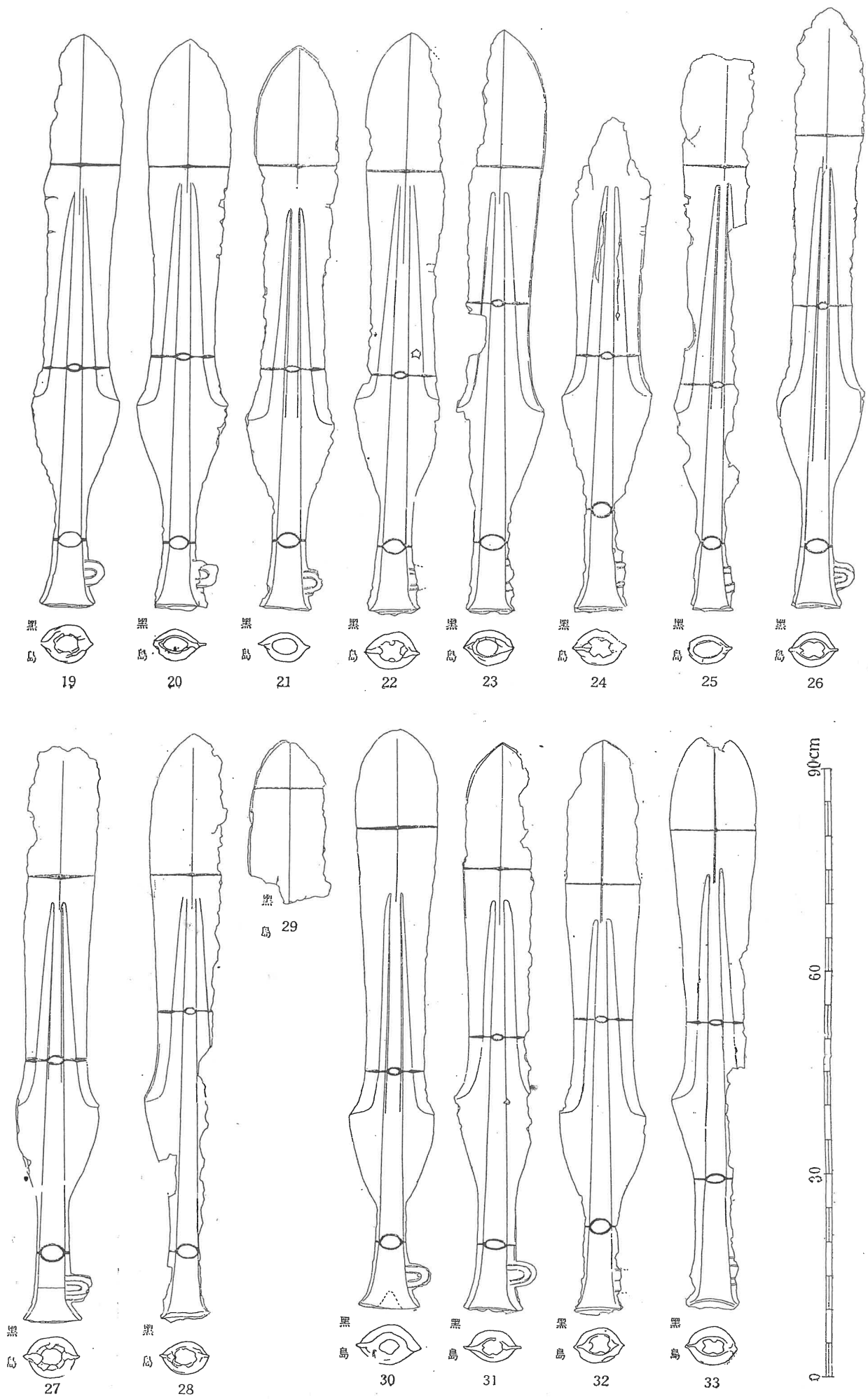
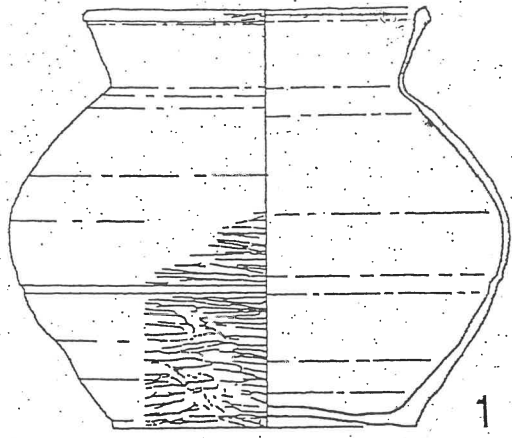


图 21 对馬市黒島出土広形銅矛



島根県鹿島町沖海揚がり

山持

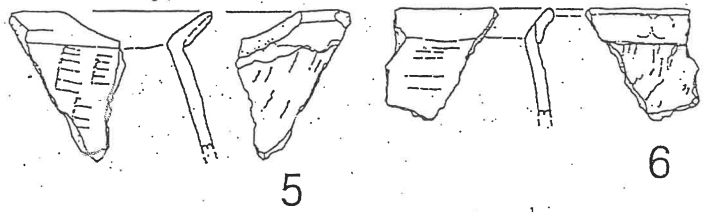
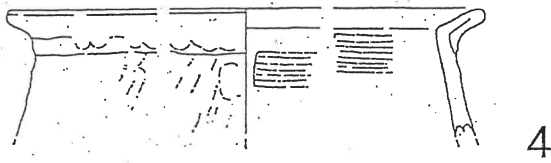
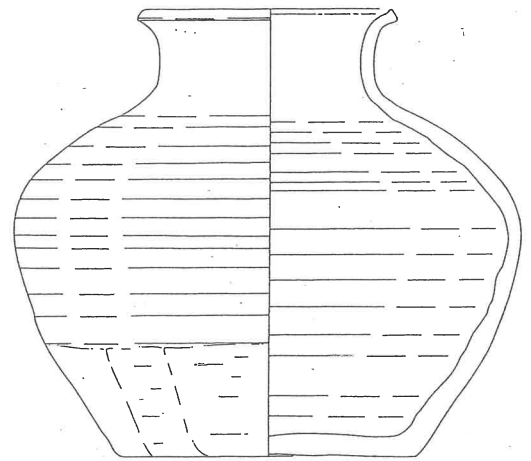
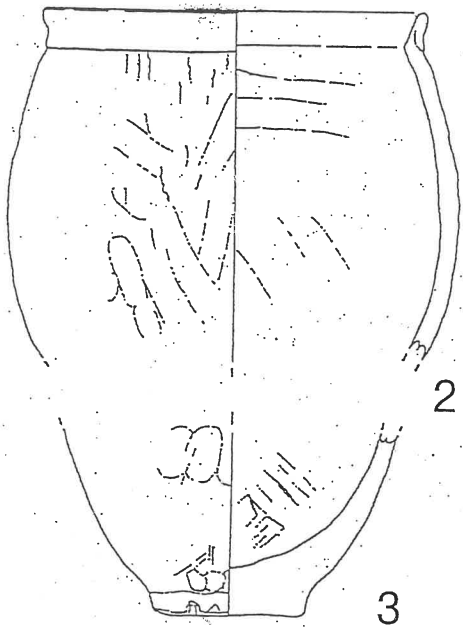
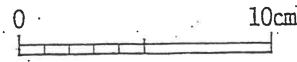
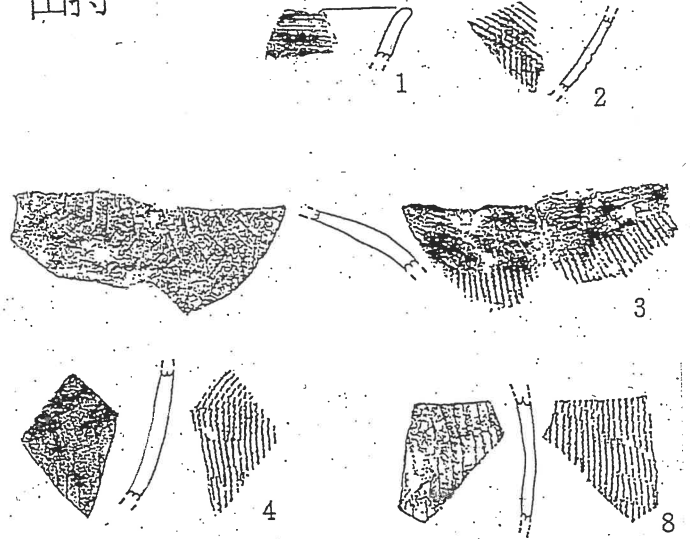


図 22 山陰地域の楽浪土器と薄型三角形口縁甕



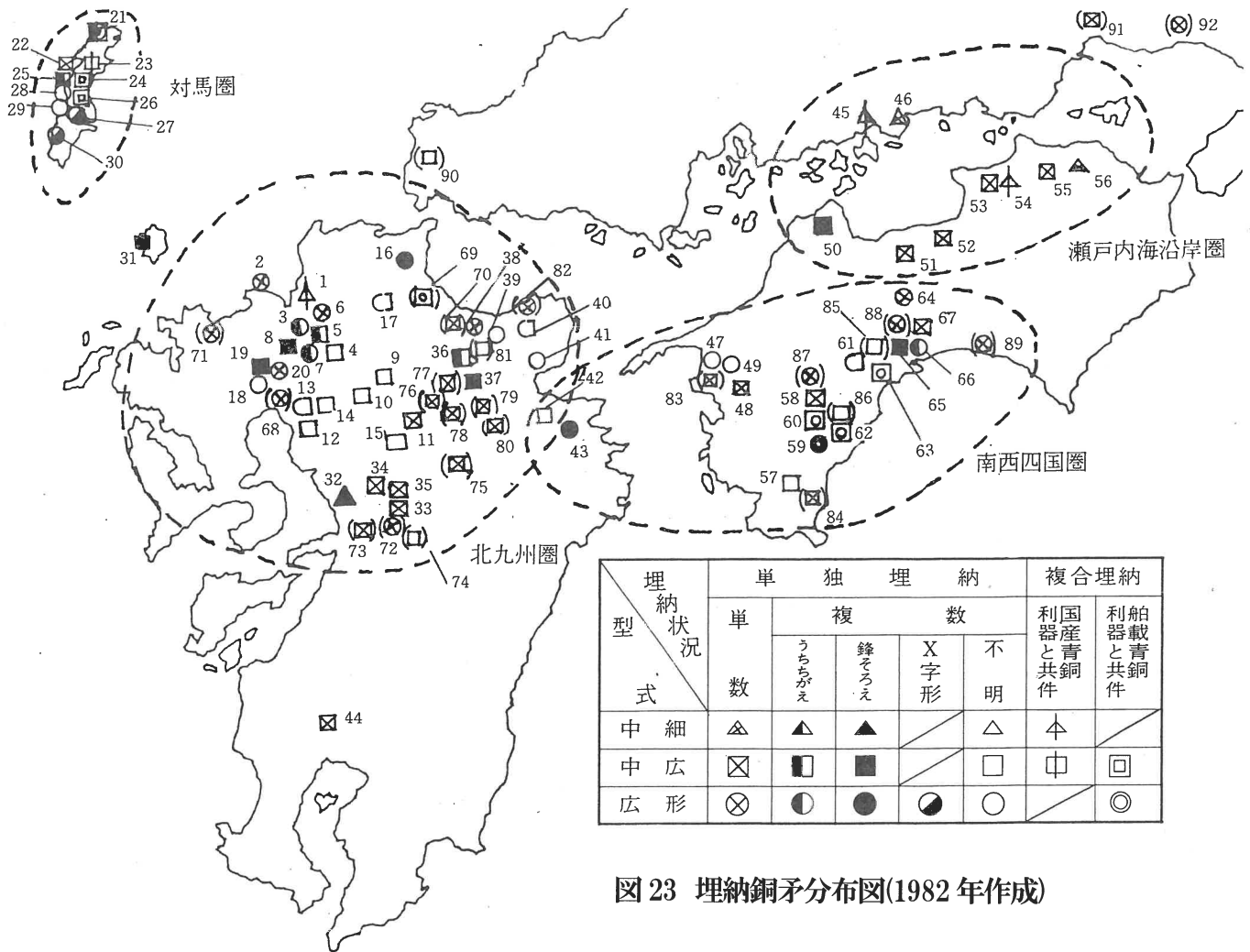


図 23 埋納銅矛分布図(1982年作成)

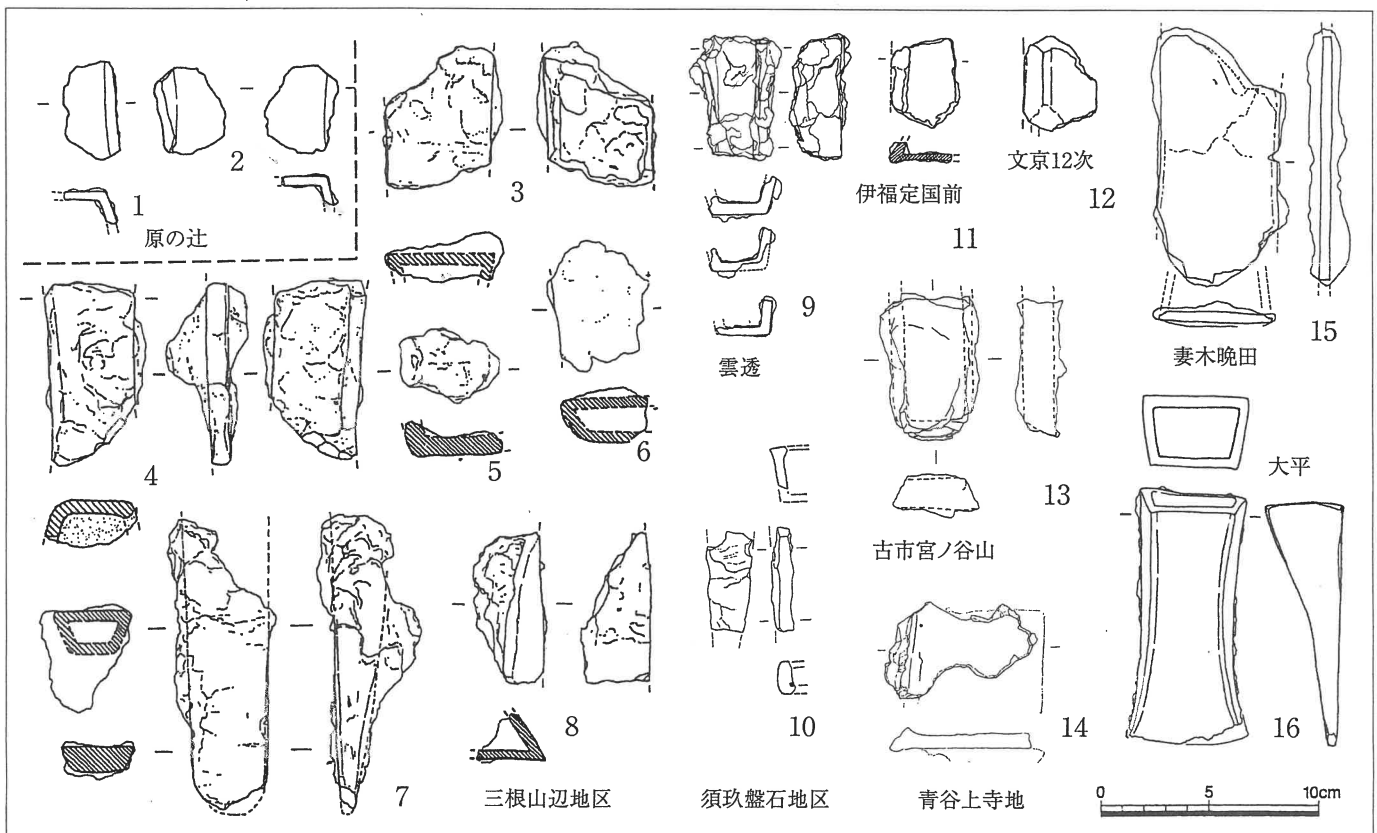


図 24 日本列島の弥生時代鑄造梯形鉄斧

# 沖ノ島祭祀の成立前史

武末 純一 福岡大学教授

**要旨：**沖ノ島では、日本列島規模でのまとまり(倭政権)による対外交渉のための祭祀が、古墳時代前期に始まる。その前史について、宗像地域の弥生前期初頭前後の環溝集落や墳墓群、田熊石畑遺跡の青銅器副葬墓群から、のちの胸肩(宗像)氏につながる人々(首長層)や地域のまとまり(国)の形成を探り、(伝)沖ノ島出土銅矛から沖ノ島での地域的な海上交通祭祀(沖ノ島に対する地域的な信仰)が既に存在したことを推定し、再調査した沖ノ島社務所前出土の外来系土器などや武器形青銅祭器から、当時の対外交渉のメカニズム中で宗像地域の人々が重要な役割を果たし、海村も存在したであろうこと、弥生時代後半期には独自に東の地域との結びつきを強めたことを推定した。

**キーワード：**田熊石畑遺跡、青銅武器埋納祭祀、弥生時代日朝交渉、特定有力集団、海村交易網

## 1. はじめに

本稿では、宗像地域<sup>1)</sup>の弥生時代～古墳時代初頭までの状況を、集落・墓地や遺物などの考古学的資料から検討する。特に宗像地域における朝鮮半島との関わりや、青銅武器を副葬する集団墓が発掘された田熊石畑遺跡の状況、(伝)沖ノ島出土の銅矛はその後の沖ノ島での国家的な祭祀の端緒となるのかなど、沖ノ島祭祀の土壌がどのように醸成されたのかを検討する。

ただし、時間と紙幅およびこれまでの調査の進展状況の関係から、弥生時代中期後半から後期にかけての宗像本土部の様相はそれほど明らかにできず、沖ノ島の社務所前遺跡出土土器の再調査によって得られた新知見と、北部九州の海村の様相によって、当時の宗像地域の海人集団の在り方を推測するにとどまった。

なお、筆者は弥生時代を早期、前期、中期、後期の4時期に区分するが、その社会像と歴史像を構築するためには早期から中期前半(山ノ寺式期～須玖Ⅰ式期)までの前半期と、中期後半から後期(須玖Ⅱ式期～西新式期)の後半期に大別するのが良いと考えているため、本稿では前半期古段階(山ノ寺式期～板付ⅡB式期)と前半期新段階(板付ⅡB式期～須玖Ⅰ式期)の新段階に細分して述べ、次に後半期の様相に触れることとする。

また、朝鮮半島では無文土器時代と原三国時代<sup>2)</sup>が弥生時代にほぼ相当し、両地域の土器編年の併行関係は第1図に示す通りだが、弥生時代前半期と後半期の境界は、無文土器時代と原三国時代の境界に一致すると考えている。

## 2. 田熊石畑遺跡の青銅器副葬墓群

### (1) 議論の前提

宗像地域の具体的な考古学資料の検討に入る前に、集落や墳墓を取り扱う際の方法を述べておく。

私は集落構造論の立場をとる(武末純一2002a)。集落構造論では、あらゆる遺物や遺構を総動員して、1時期の諸施設の配置と関係を定め、そこに潜む構造を取り出す。そして、そうした配置や関係の時期ごとの変化から、集落構造の変動を読み取る。集落の中の諸施設の配置や規模は、決してデタラメではなく計画的で基本設計があり、そこには各々の集落が負う時代性や地域性、当時の社会構造が刻まれている。遺物もまた集落でのありかたを考えることで、その意義が明らかになる。

一つの拠点集落や一つの村の範囲確定には、空白部の確定が必要である(武末2004b・2009b)。第2～4図の四角の枠を発掘調査区、その中の小円を同時期の

竪穴住居としよう。第2図で、私たちはA・B二群をそれだけでまとまりとは認識せず、A・Bのまわりの空白部によってA・Bそれぞれをまとまりと認識する。第3図では周りの空白部が未確定だから、この調査区の中だけでまとまりをなすとはいえない。他者を支え際立たせるためのこうした空白部を、私は「空白」と呼び、未確定な状態の空白部を「空白?」と呼ぶ。「空白?」から「空白」への転化は発掘の大きな成果である。

また、空白部にはそれ自体が意味を持つ場合もあり、第4図のように住居が入りこめない空白部は、広場という特別な意味をもつ。広場は何も無いからこそ、住居群全体にかかわる重要な行事が実施され、会議が開催され、来客を接待できるのである。こうした空白部を、「空白!」と呼ぶ。

したがって集落に関しても、住居群と墓地だけで一つの集落とはならない。むしろ、それらがいくつか集まって一つのまとまり(集落)をなし、別のまとまり(集落)との間には、一つのまとまりの中での各群間の空白とは比べものにもならない大きな空白がみられるのが普通である。また墓地の中の各群の抽出も、こうした空白の検討が優先されるべきである。

## (2) 弥生時代前半期古段階の環溝集落と墳墓群

### a) 環溝集落

田熊石畑遺跡の様相を検討する前に、弥生時代前半期古段階の宗像地域の様相を概観する。この時期では前期初頭頃の資料が多く、すでに一定の整理されている(原俊一・白木英敏・秋成雅博2000、宗像市教育委員会1999)。

それらによれば、この時期には宗像地域でいくつかの環溝集落<sup>3)</sup>がみられる(第5図)が、福津市今川遺跡(津屋崎町教育委員会1981)の包含層と3号住居跡の時期である板付Ⅰ式期新段階に東郷登り立遺跡(宗像市教育委員会2001)で、板付遺跡とほぼ同規模の円形環溝(SD01)が最初に掘削される(第5図-1)。

東郷登り立ではその後、板付ⅡA式期にかけて、板付遺跡と同様な弦状溝(SD02)が掘られる。ただし、この弦状溝が板付遺跡のような貯蔵施設と竪穴住居を区分する機能を持っていたか否かは、内部の遺構が削平されて不明である。この東郷登り立SD02の時期に

は、今川遺跡と宗像市大井三倉遺跡(第5図-3)で環溝集落が形成される。この時期までの環溝集落は内部構造がほとんど不明だが、福岡県粕屋町江辻遺跡の松菊里型住居跡群を囲む弥生早期の弧状溝(新宅信久1994)や、北九州市備後守屋舗遺跡の松菊里型住居跡群を囲う板付ⅡA式期の円形環溝(北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室2008)からみて、内部にはやはり竪穴住居跡が存在したと見られる。

そして、板付ⅡB式期の光岡長尾遺跡(第5図-2)では貯蔵穴のみを囲う円形環溝が現れる。この円形環溝は標高30mの丘陵最高所にあり、平面は東西42m、南北46mで正円に近く、内部では袋状竪穴のみが52基確認された。

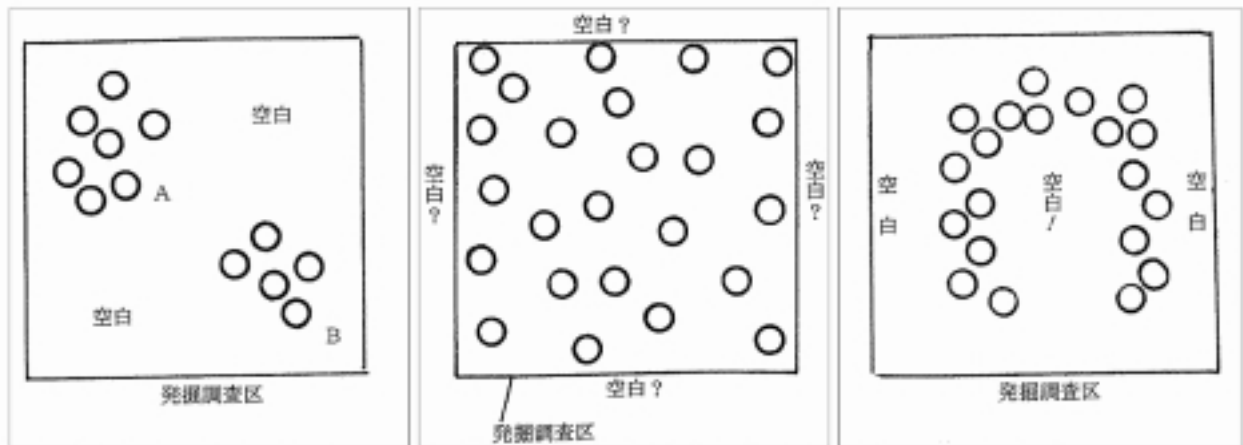
### b) 墳墓群

この時期の墳墓資料は宗像市田久松ヶ浦遺跡と久原遺跡Ⅱ区の例がまとまっている(宗像市教育委員会1999)。副葬された土器の様相からみて田久松ヶ浦は早期末～板付Ⅰ式古段階、久原Ⅱ区は板付Ⅰ式新段階～板付ⅡA式期が主要な時期で、田久松ヶ浦のほうが先行する。

田久松ヶ浦(第7図)ではこの時期の墳墓が15基あり、遺跡内での墳墓の分布相からは、大きくA～Cの3群<sup>4)</sup>に分かれる。A群は斜面上部のSK203、SK206、SK207、SK208、SK209、SK210、SK211、SK215の8基で、A群の下方にあたるB群はSK201、ST204、SK216、SK217、SK218の5基からなり、B群よりもさらに北東側下方にあるC群はSK226、SK230の2基である。C群はこの中で劣位の集団であるが、A群とB群では数の上ではA群が多いものの、副葬品はA群・B群ともに有柄式磨製石剣・磨製石鏃・副葬小壺の三種を持つ最上位の墳墓を含み、その次に位置する磨製石鏃・副葬小壺の二種を持つ墳墓や、さらにその下位の副葬小壺のみを持つ墳墓も両群に存在する。したがって、立地的にはA群がやや優位だが、ほとんど差はなく、これに対してC群は副葬小壺のみが副葬品なしで、明らかにA群・B群の下位にあるため、階層分解がうかがわれる。また、こうした一つの墓で有柄式磨製石剣・磨製石鏃・副葬小壺の三者を持つ例は北部九州でも一般的ではなく、田久松ヶ浦全体での有柄式磨製石剣・磨製石鏃の保有量は福岡市雑餉隈遺跡15次調査地点例

縄紋土器		弥生土器										古式土器		
晩期		早期		前期			中期			後期				
広田式	黒川式	山ノ寺式	夜臼式	板付Ⅰ式	板付Ⅱ式			城ノ越式	須玖Ⅰ式	須玖Ⅱ式	高三階式	下大隈式	西新式	宮の前式
					a	b	c							
(茨帯文)	漢沙里式	可楽里式	欣岩里式	休岩里式	松菊里式		水石里式		勒島式	古 中 新			古式新羅加耶土器 古式百濟土器	
早期	前期	中期		後期			前期		後期		三国土器			
無文土器										三韓土器				

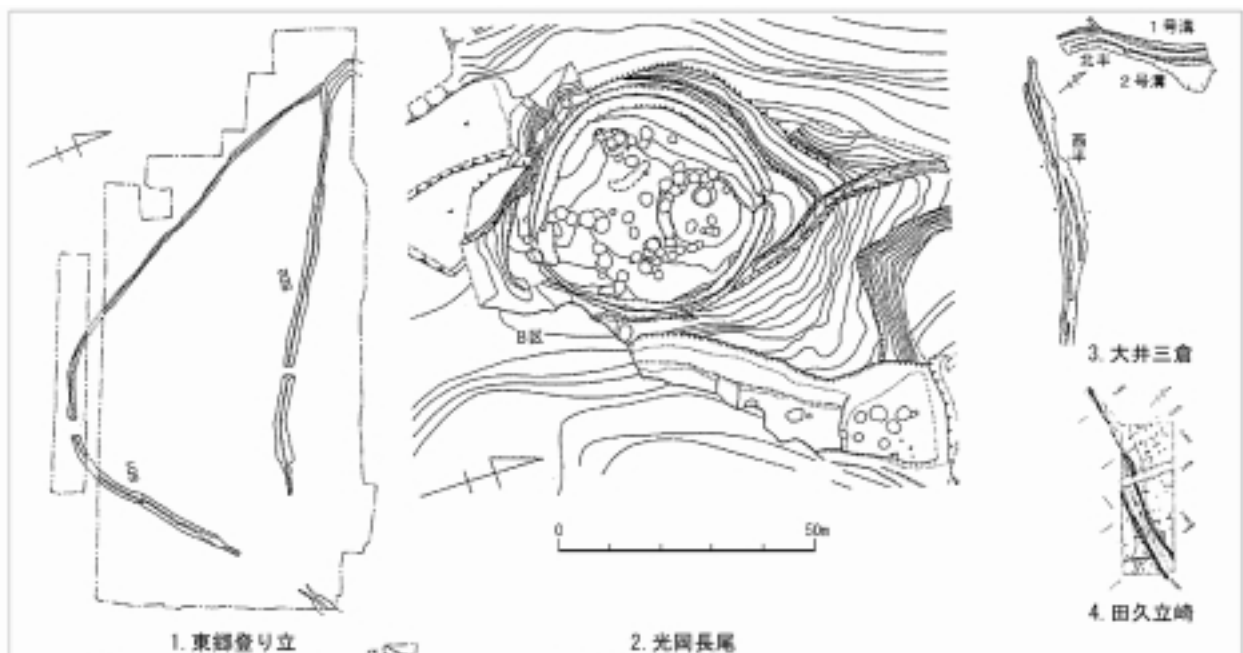
第1図 北部九州(上)と朝鮮半島南部(下)の土器編年の併行関係(武末作成)



第2図 A群およびB群のまとまりと空白(武末作成)

第3図 まとまりが見られない状態と、発掘調査区外の空白?(武末作成)

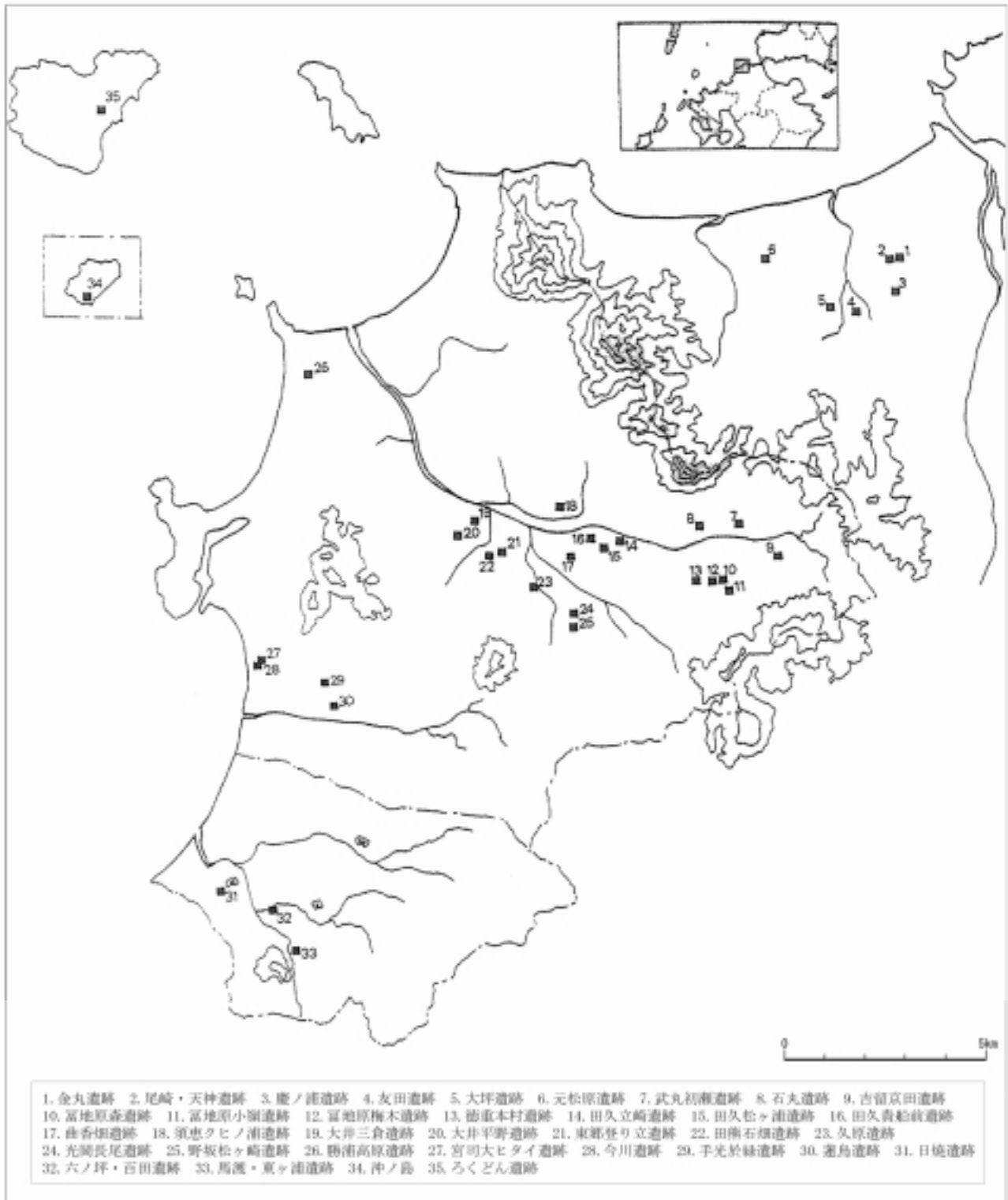
第4図 空白!の一例(武末作成)



第5図 宗像地域の初期環溝(川口陽子(2010)より作成)



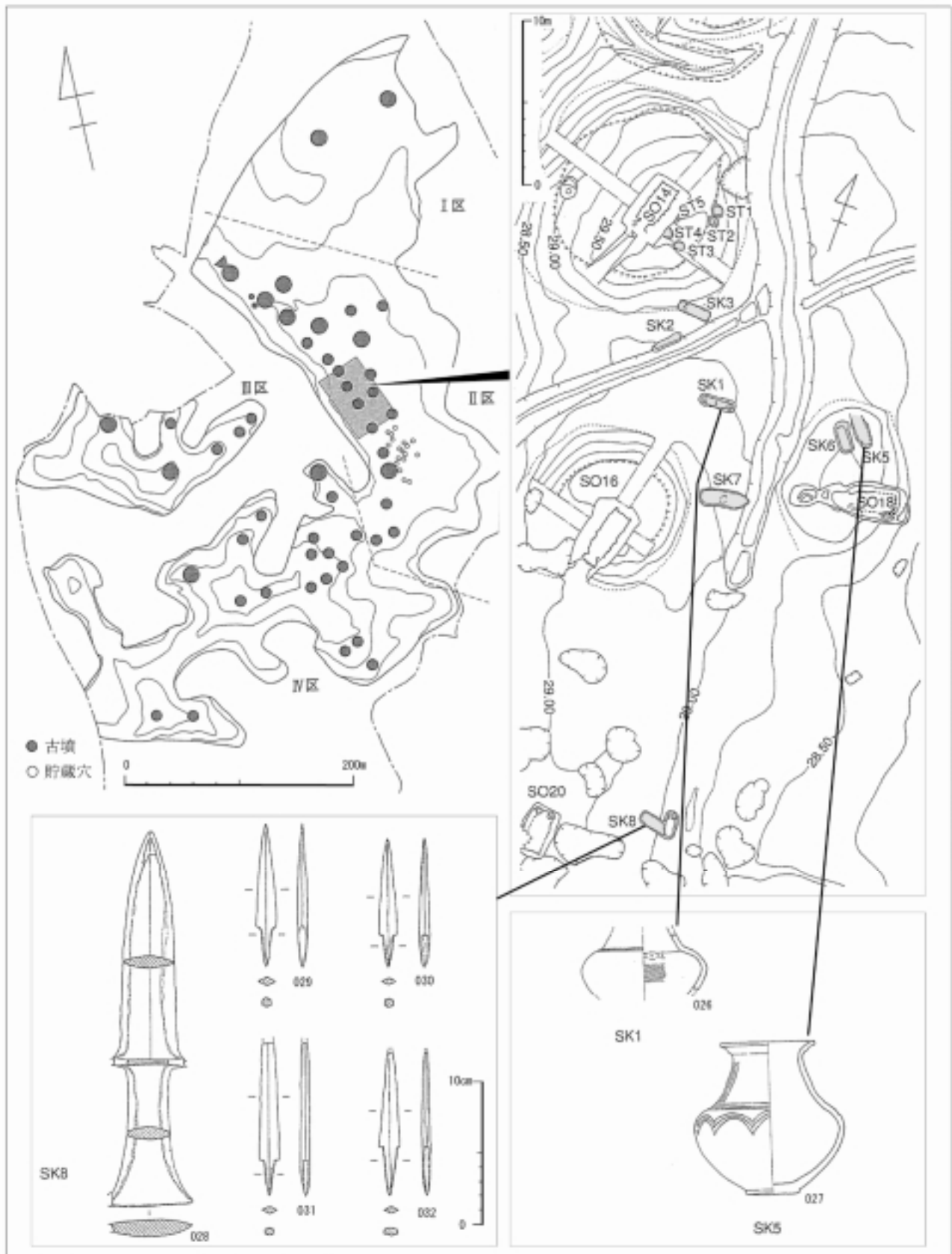
① . 沖ノ島祭祀の成立前史



第6図 弥生時代前期遺跡分布図(川口陽子原図)



① . 沖ノ島祭祀の成立前史



第8図 宗像市久原遺跡II区の墳墓群と遺物  
 (『田久松ヶ浦 - 福岡県宗像市田久所在遺跡の発掘調査報告 - 』宗像市教育委員会 (1999)より作成)

(福岡市市教育委員会ほか2005)のような有力集団墓の保有量に匹敵する。したがって、田久松ヶ浦遺跡に葬られた人々も有力集団であったといつてよい。

いっぽう久原遺跡Ⅱ区の墳墓群(第8図)は、小児用の甕棺5基と成人用土壙墓・木棺墓7基からなる。成人墓主体の田久松ヶ浦遺跡とは異なって小児墓を40%ほど含む点は、一見すると一般成員の墓地の様相である。しかし5基の小児用甕棺と6基の成人用土壙墓・木棺墓(SK1~3、5~7)が大きく見て一つのまとまりをなすのに対して、これらから約20mの距離を置いて大きく離れ、発掘区の最も南側に1基だけ存在するSK8は、この墳墓群で唯一、有柄式磨製石剣1点と磨製石鏃4点を保有する。したがって、SK8の被葬者はこの墓地に葬られた他の人々よりも優位に立ち、ここでも階層分解が認められる。

ただし、久原Ⅱ区の墳墓群は、全体として見た場合は、やはり一般構成員の様相であり、田久松ヶ浦の有力集団よりも階層的に下位にある。問題は、集落では東郷登り立が中心となるのに対して、墳墓の様相からは東郷登り立とは別の集落である田久松ヶ浦が、いままのところ階層的に最も優位にあることをどう理解するかである。時期的には田久松ヶ浦がわずかながら東郷登り立よりも先行するので、田久松ヶ浦から東郷登り立への中心地の移動が想定できる。田久松ヶ浦の墓群と同一の集落である田久立崎遺跡では同時期の環溝が確認されており(宗像市教育委員会2007)、環溝を持つ集落と持たない集落との間に格差があると考えられるから、東郷登り立でも環溝と同時期で副葬品を持つ墳墓群が確認された暁には、この想定が立証されよう。

こうした様相からすれば、この時期に宗像地域の社会ですでに一定の階層分化が起こっていたこととなる。注目されるのは、田久松ヶ浦や久原遺跡Ⅱ区の副葬品に有柄式磨製石剣・磨製石鏃・副葬小壺という朝鮮半島南部の中期無文土器文化直系の遺物がみられるだけでなく、田久松ヶ浦の墳墓にも、朝鮮半島南部の中期無文土器文化の石槨墓と直結する様相がみられる点である。今川遺跡で出土した遼寧式銅剣再加工の銅鏃・銅鏃や天河石製の小半月玉、太身の碧玉管玉など、集落でも朝鮮半島南部の中期無文土器文化と直結する遺物がみられる(津屋崎町教育委員会1981)ことは、こ

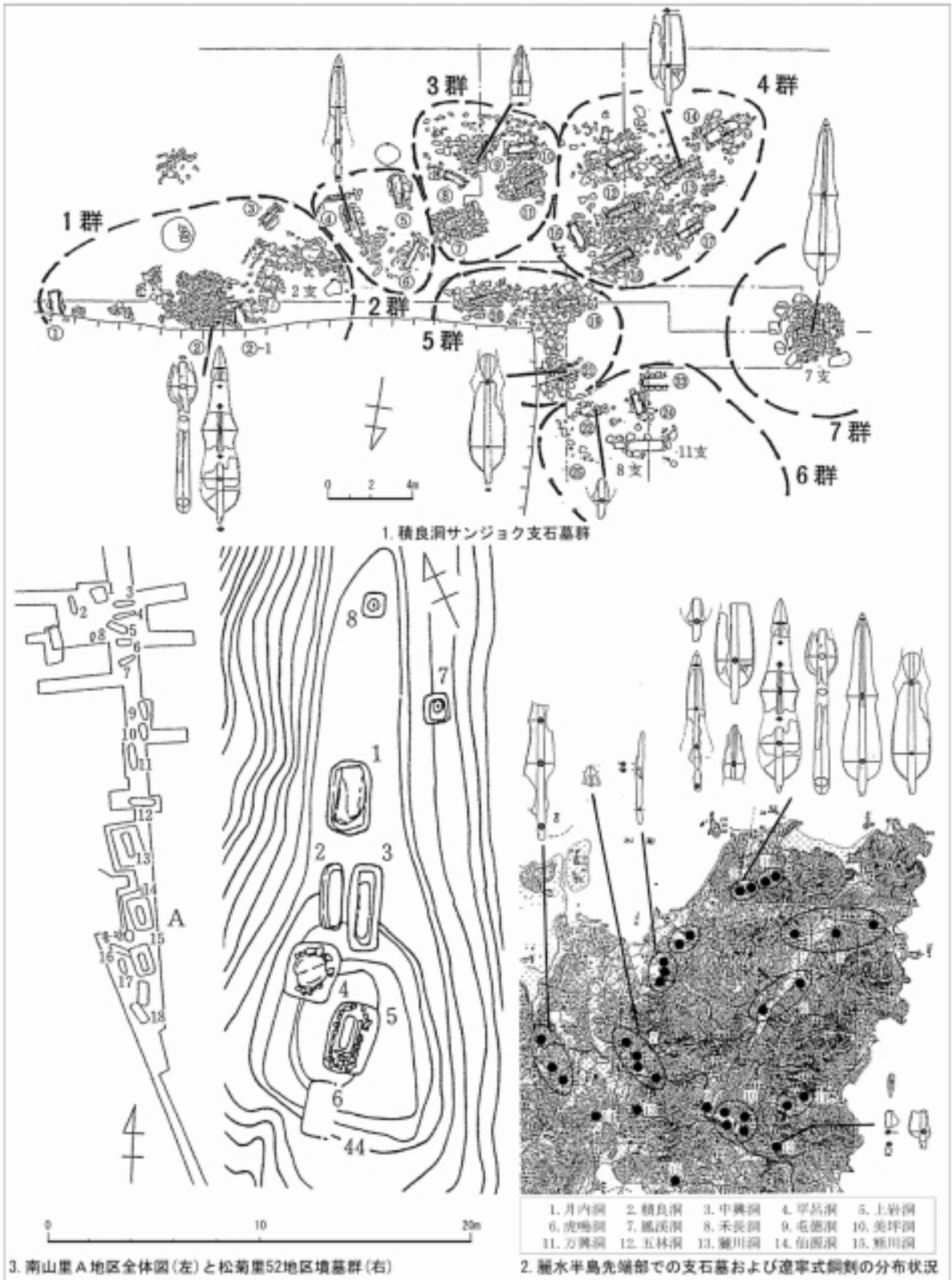
の時期の宗像地域に朝鮮半島南部中期無文土器文化の大波が来たことを物語る。

もちろんこの波は、弥生時代の幕を開けた早期初頭の中期前半(休岩里式)の無文土器文化よりも遅く、中期後半(松菊里式)の無文土器文化に属する第二波である。しかし、たとえ第二波であって、宗像地域への到達が直接的でなく間接的だったとしても、体系的に受容されたことが重要である。なぜなら、この時期に朝鮮半島南部ではすでに一部の地域で大きな階層分解がみられ、国形成への道を本格的に歩み始めているからである。

### c) 無文土器時代中期の朝鮮半島南部社会

朝鮮半島南部の場合、まず、全羅南道の麗水半島では、麗水市積良洞サンジヨク遺跡(全南大学校博物館・麗川市1993)で、支石墓の上石14基(うち4基で主体部が確認され、残りは移動されたもの)と上石のない石槨墓・石棺墓26基が発掘された。注目されるのは青銅器の保有相である。ここは全体で7群に分かれ(第9図-1)、遼寧式銅剣・銅矛を保有する墓は、1~7の各群に1基ずつ存在する(7号支石墓と、2・4・9・13・21・22号墓)。いずれも遼寧式銅剣は1点で、2号墓だけがほかに遼寧式銅矛1点をあわせ持つ(全南大学校博物館・麗川市1993)。朝鮮半島の遼寧式銅剣は、その系譜をひいて後出する細形銅剣と同様に、日常生活遺構からは出土せず、多くは墳墓から出土して、ときには埋納遺構から出ることや、平壤市貞栢洞1号墓からは細形銅剣・銅戈に伴って「夫租叢君」銀印が出た(岡崎敬1968)から、首長層のための聖なる器物と考えられる。したがって、遼寧式銅剣を副葬する墳墓群は首長層の墓を含む。そして、積良洞サンジヨク遺跡の1~7の各墓群が保有する遼寧式銅剣は、いずれも1本だから、遺跡内部での墓群相互の関係は対等であったと見られる。しかし、麗水半島全体でみた場合(第9図-2)には、遼寧式銅剣は積良洞サンジヨク遺跡に集中し、鳳溪洞、五林洞、禾長洞、平呂洞等の遺跡では1~2本の遼寧式銅剣しか持たず、さらにその下には遼寧式銅剣を持たない多くの墳墓遺跡という三層構造が形成されている。したがって、麗水半島では無文土器時代中期にすでに積良洞サンジヨク遺跡の有力集団が中心となって国の形成が始まったことが分

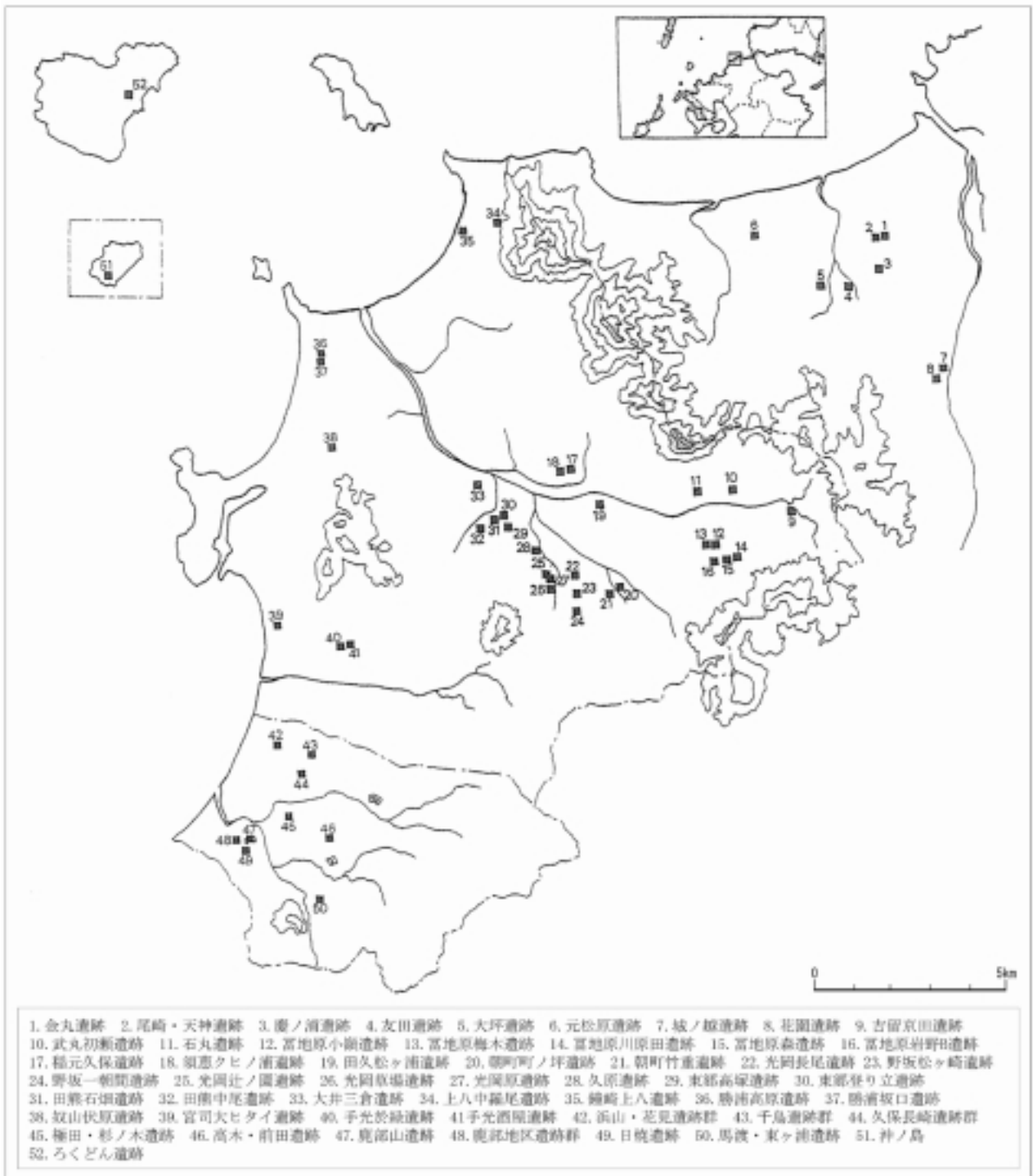
① . 沖ノ島祭祀の成立前史



第9図 朝鮮の墳墓にみる階層構造

(武末作成)





第10図 弥生時代中期 遺跡分布図

(川口陽子原図)

かる(武末純一2002b)。

いっぽう、忠清南道松菊里遺跡(第9図-3)はこれよりもさらに展開した様相を示す。1974年に発見された遼寧式銅剣墓(1号墓)が位置する52地区は、その後の調査で明らかになった木柵で囲まれた囲郭集落(最小でも30ha、最大で61ha)のすぐ外側の突出する丘陵にある。1975年と1993年の調査で石棺墓3基(4・5・6号墓)、石蓋土壙墓2基(2・3号墓)、甕棺墓2基(8・9号墓)が発見され、全部で8基の墳墓で構成された首長層の墓域であることが分かった(金吉植1998)。

ここで注目されるのが、松菊里遺跡から直線距離で2.5kmほど離れた丘陵状にある南山里遺跡である(尹武炳1987)。ここでは1971年に石棺墓2基、土壙墓(石蓋を含む)2基、甕棺墓3基がA・B・C地区に分かれながらも密集した状態で発掘された。甕棺に使用された土器からみると松菊里遺跡52地区と南山里遺跡の墳墓は同時期にもかかわらず、南山里遺跡の副葬品に青銅器はない。墓と墓の間隔も松菊里遺跡のほうがゆったりと配置され、石棺墓や土壙墓のつくりも松菊里遺跡はすべて二段掘りなのに対して、南山里遺跡は24基中8基が二段掘りで、あとはすべて一段掘りであること、一段掘りおよび二段掘りの下段部分の大きさを比べても松菊里遺跡のほうが大きいから、すでに指摘されているように(金吉植1998)南山里遺跡は松菊里遺跡の一般成員の墓である。南山里遺跡のほうが小児墓・乳幼児墓の比率が高いことも、これを裏付ける<sup>6)</sup>。松菊里遺跡52地区に葬られた人々は、積良洞サンジョク地区の7群中の1群程度で、有力集団の中の一団がさらに析出された特定有力集団であり、麗水半島よりも階層分解が進んでいたことが分かる。

このような様相からみて、朝鮮半島南部の無文土器時代中期後半の波が体系的に及んだ宗像地域でも、弥生時代前期にすでに一定の階層分解があっても何ら不思議ではない。朝鮮半島南部の無文土器時代中期ほどではないが、田久松ヶ浦や久原Ⅱ区の墳墓群相互あるいは墳墓群の内部に見られた一定程度の階層分解<sup>7)</sup>が、次の段階の田熊石畑遺跡での青銅器副葬首長層墓群を準備したといえる。

### (3) 田熊石畑遺跡の様相

田熊石畑遺跡は釣川中流域左岸の支流間に形成された独立台地(東西150m、南北300m、標高12m)上にあり、発掘調査区内の弥生時代の遺構には前期後半の環溝1条と中期前半の墳墓9基、中期を通じて営まれた貯蔵穴(円形土坑を含む)170基や円形竪穴住居6棟、溝状遺構がある(第11図-1)。

本稿で取り扱う墳墓群(第11図-2)は、方形ないし長方形をなすとみられる墓域の北東部分が発掘されたことになる。全体の大きさは確定できていないが、調査概報ではもとはあぜ道であった南側道路の鍵形屈曲に意味を求めるならば、この付近を南限と見て南北軸約15mの区画墓を想定できる。吉武高木遺跡などの例を勘案すると、全体では30基以上の木棺墓・土壙墓等が存在する可能性がある(宗像市教育委員会2009:p.35)という。確認された9基のうち発掘した6基は、すべて割竹形木棺墓である。いずれも青銅器を保有しており、特に、1号墓は5点、2号墓は4点、4号墓は3点の青銅器を集中保有する。しかもこれらの集中墓はすべて銅剣だけでなく銅戈をもち、さらに2・4号墓は銅矛も保有していること、いっぽう青銅器が1点のみ出た3・6・7号墓はいずれも銅剣であることからみて、銅剣が最下位、銅戈がその上位にあり、銅矛が最上位に位置するという、当時の人々の青銅武器に対する取り扱いの体系が存在したことも分かる。

また、遺構検出のみの3基のうち、5号墓は粘土の痕跡が明瞭な組合式木棺だが、他の2基は不明である。注目されるのは遺構検出のみのこの3基(5・8・9)について金属探知機を用いて青銅器の有無を調査したところ、いずれも反応があって青銅器を保有した可能性が高いことである。発掘した6基もすべて青銅武器を保有していたから、この墓群ではすべての墓が青銅器を保有していることになる。

重要なのは先述した空白部による集落のまとまりからすれば、田熊石畑遺跡だけで単独の集落となるのではなく、東郷登り立遺跡や東郷高塚遺跡・田熊中尾遺跡などととも東郷遺跡群という形で括られる範囲が一つの集落=村となる点である。しかも、この地域ではこれまで、これほど大量の青銅器を保有した集落はないため、ここがこの時期における盟主集落であった

と見られ、国の拠点集落の可能性が提起されるが、この点は北部九州全体の様相の中での位置づけが必要となる。

#### (4) 北部九州における国の成立

北部九州の弥生時代前期末から中期前半で重要なのは、小地域の拠点集落を傘下に従えて単位平野や盆地の盟主となる拠点集落が、この時期に一齐に出現する点である。これは、単位地域ごとの政治的なまとまり、つまり中国の史書にいう国が、この時期に一齐に形成され始めたことも意味する。

国の内部の村と村のあいだには上下関係ができ、村の中も有力な人々(首長層)と一般の人々(民衆)に分裂して、階層分化が進む。したがって単位地域の中での階層分化は、国の形成度に連動して、逆に国形成の目安になる。その手がかりはこの時期に出現する韓半島系の青銅器(多鈕細文鏡と細形の剣・矛・戈)の様相である。これらの青銅器は、朝鮮半島ではもっぱら一部人々の墳墓に供えられた。すでに述べたように、平壤市貞栢洞1号墓で「夫租叢君」銀印に細形の銅剣・銅矛が共伴するとともに、これらの青銅器は日常生活遺構では出ず、日ごろは丁重に管理されて、首長層の墓に副葬されるべき聖なる器物であった。この取扱いは北部九州でもそっくり再現されたから、これらが副葬された北部九州の墓は首長層墓である。

福岡市の早良平野(第11図-3)では、前期末~中期前半の朝鮮半島系青銅器は圧倒的に吉武遺跡(福岡市1995)に集中し(多鈕細文鏡1、細形の銅矛3、銅戈4、銅剣14)、そのほかの拠点集落(東入部、飯倉、有田、野方など)では、原則として剣または戈が1~2本である(下條1989)。したがって吉武遺跡は他の集落の上に立って早良平野をまとめた盟主的な村で、その下に、その他の拠点集落 周辺小集落という序列ができる。集落の規模でも、吉武遺跡の日常生活領域が10万 $m^2$ を超えるのに対して、東入部遺跡は2万 $m^2$ である。

北部九州では前期末~中期前半に唐津平野(末廬国)の佐賀県唐津市宇木汲田遺跡、福岡平野(奴国)の福岡市板付遺跡、壱岐島(一支国)の壱岐市原の辻遺跡、あるいは佐賀平野東部の佐賀県吉野ヶ里遺跡と、まるで

細胞の核のように、各単位地域に一つずつ韓半島系青銅器を集中してもつ村があり、墳丘墓や区画墓とも結びつく。

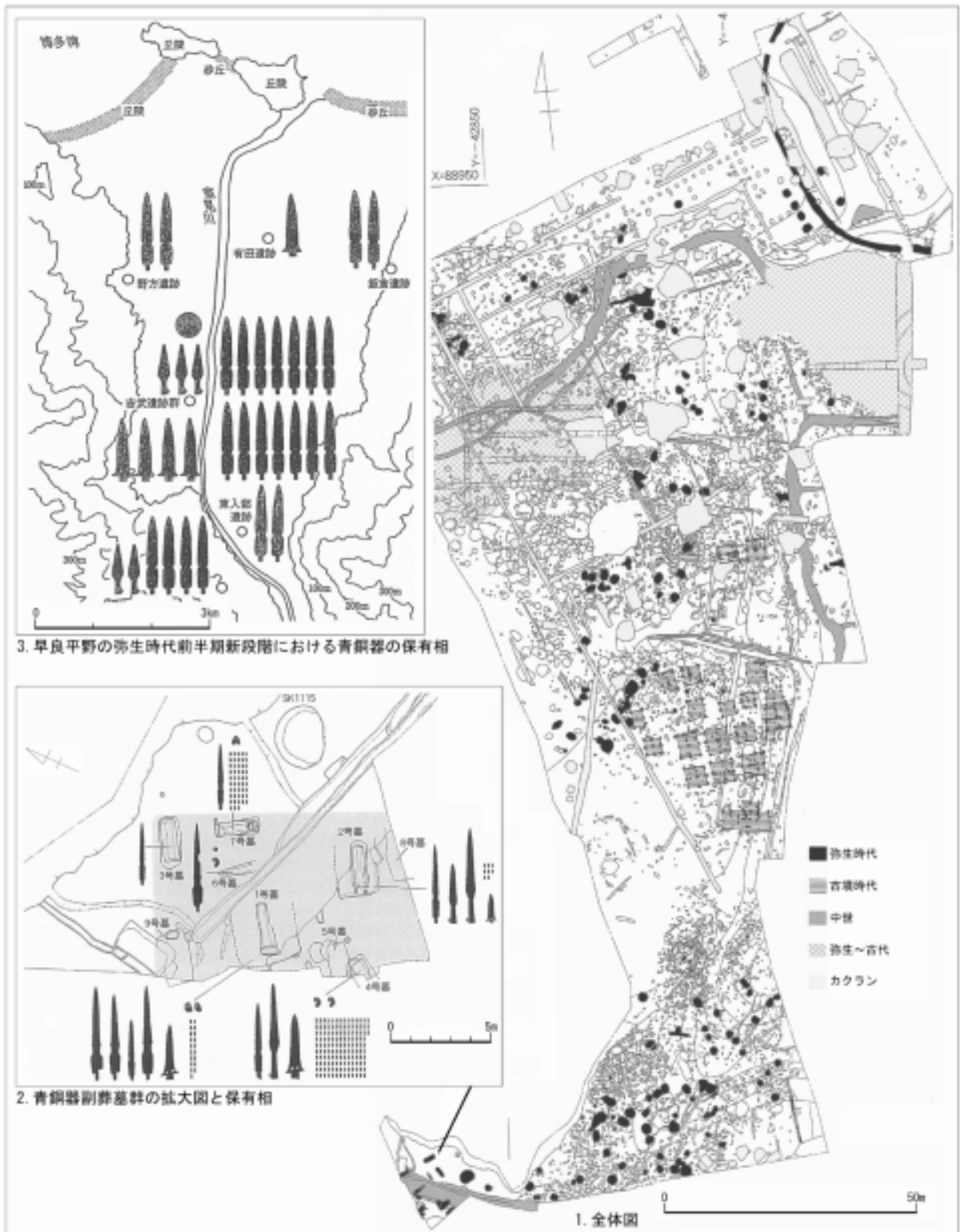
有名な吉野ヶ里遺跡では前期前半に丘陵の南部3万 $m^2$ を環溝が囲む。前期末には丘陵の各所に数棟の住居と貯蔵穴からなる小規模な単位集団が広がり、中期前半には、丘陵の南側20万 $m^2$ を囲んで、散在していた居住区がこの中に集まる(七田忠昭2005)。原の辻遺跡でも中期前半に2条の環溝が台地の裾を楕円形にめぐり、その中は約24万 $m^2$ である(長崎県教育委員会2005)。こうした巨大化も国形成の一環である。この時期の環溝はまだ全体を囲う円形が基本で、地形に沿って曲走する場合もある。このように、国の中心集落は、この時期に巨大化した。

こうした国の中心集落の大きさや朝鮮半島系青銅器の保有相は大同小異だから、相互に実力の差がなかったとみられる。『漢書』地理志が伝える百余国体制(多くの国々が林立する状況)はこの時期までさか上る。

国の中の階層差は拠点集落内部の大型建物にもあらわれる。吉武遺跡では高木地区に、中期初頭にできて何度も建て替えられ、中期後半の廃絶時には床面積115 $m^2$ の超大型墓前建物が建つ。いっぽう、その傘下の東入部遺跡の大型建物は床面積50 $m^2$ ほどで、質量ともに吉武遺跡に及ばない。柚比遺跡本村地区でも中期前半代に細形銅剣7点を集中的に持つ墓群の前には、時期は中期後半以降で何度も建て替えられ、最大床面積が167 $m^2$ にもなる超大型墓前建物がある。

こうした北部九州の全体的な様相を参考にすれば、大型建物はまだ不明だが、宗像地域でも田熊石畑遺跡に弥生前半期新段階の青銅器が集中し、周辺の拠点集落では久原遺跡や朝町竹重遺跡などで少数の青銅器を保有することが注目される。また、東郷遺跡群内でも東郷高塚地区や田熊中尾地区で細形青銅武器が少数知られ、東郷遺跡群内部での階層分解をうかがわせる。東郷高塚例や朝町竹重例は田熊石畑例より先行し、中期前半の集中副葬の下地をつくったと考えられるが、久原例などは同時期とみられるから、早良平野と同様な構造ができる。この地域にも早良平野よりやや遅れてではあるが、国が形成されはじめたのである。ただしこの時期の北部九州の首長層墓の青銅武器は、多く

① . 沖ノ島祭祀の成立前史



第11図 田熊石畑遺跡遺構配置図(1/1000)と早良平野の様相  
 (1・2:『概報 田熊石畑遺跡 - 福岡県宗像市田熊所在遺跡の発掘調査概要 - 』宗像市教育委員会(2009)より作成、3:『古代史復元』下條信行(1989)を改変)

が細形で大部分が甕棺から出土し、1棺1点が原則で青銅器副葬墓相互の墓地内部での格差はあまりなく、青銅器をもたない墓も含まれる場合が多いのに対して、次のような相違点もみられる。

- 1 細形よりも長大化した中細形銅剣が含まれる。
- 2 甕棺でなく木棺で、しかも割竹形が多い。
- 3 先述のようにすべて青銅器を保有し、集中副葬例(1・2・4号)も多い。

1)は時期が中期前半で、北部九州のこの時期でも新しいため、多くは国産品とみられる。2)はこの地域が大型成人甕棺墓地帯から外れるためだが、実は吉武高木地区でも割竹形木棺への副葬例が4基ある。江辻遺跡第5地点では弥生早期～前期初に割竹形木棺例が知られており、これらの系譜関係等は今後の検討にゆだねたい。3)がもっとも重要で、集中副葬例が1基しかない吉武高木地区や、全くない同時期の柚比本村地区よりも発展した様相を示し、次の中期後半の王墓との間を埋める段階が、これで明確に設定できる。そして宗像地域にも国の首長層があらわれたことを明確に示しているといえよう。田熊石畑青銅器副葬墓群では、これまでのところ、すべての墓で青銅器を保有しているから、有力集団からさらに展開した特定有力集団の様相を示すと考えたい。

そうした首長層の大きな任務の一つに、対外交渉の統轄があったが、それに関連する資料として、一つには(伝)沖ノ島出土細形銅矛がある。

### 3.(伝)沖ノ島出土の細形銅矛

#### (1) 細形銅矛の特徴

沖ノ島で採集されたと伝える銅矛(第12図-1)は、第3次調査の報告書で、阿久井長則・佐田茂によって報告された(阿久井長則・佐田茂1979:p.51。以下、報文)。その記述によれば、この銅矛は昭和43年当時、山形県鶴岡市の致道博物館に寄託・陳列されており、山形県飽海郡平田町飛鳥在住の長谷部広治氏が第二次世界大戦中に兵隊として沖ノ島に駐屯し、軍用道路をつくった際に出土したものを持ち帰ったという。報文では「多数の鉄製品といっしょに採集した」という聞き取りの結果を記すとともに、「今回の調査では、指摘

をうけた地点を中心に丹念に見てまわったが、遺構らしきものはもちろん、その存在の可能性すら確認できなかった」という調査結果も記す。この銅矛が出た地点は、「旧兵舎跡と旧社務所のほぼ中間あたりとのこと」であるという。

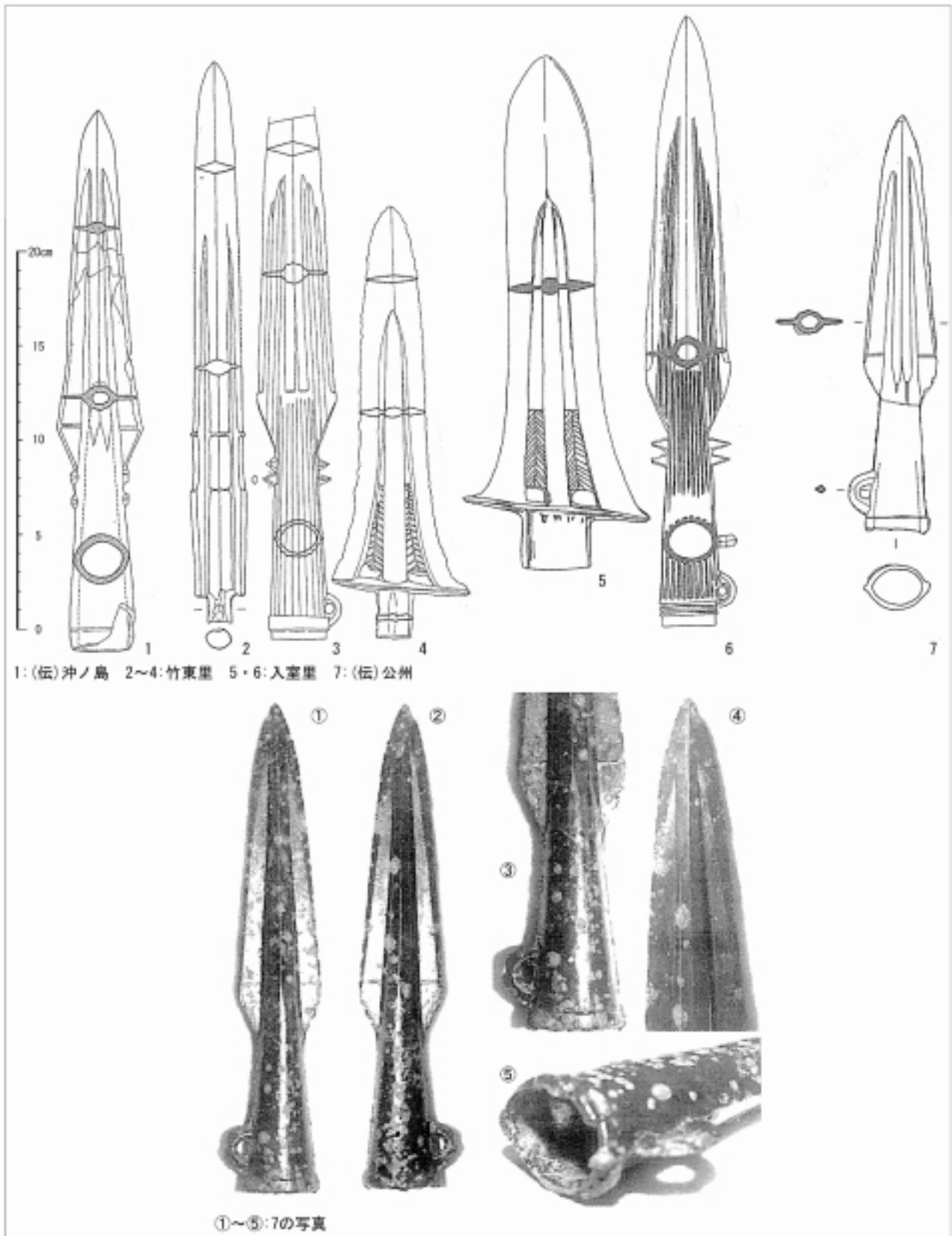
この銅矛は鋒部付近で二つに折れており、直接は接合しないが、復元で全長は28.7cm、関幅4.5cmといい、全体の形状からも細形銅矛である。袋口付近は一部破損しているため、環耳の存在は不明である。この細形銅矛の図面は、ほかに宗像市史でも公表されている(宗像市史編纂委員会1997:p.646 第81図-5)が、報文の図面とは異なって裏面が図示され、袋口部付近に節帯の表現はない。写真が提示されず判断に苦しむ<sup>9)</sup>が、後述の理由から節帯を持つと推定されるため、ここでは報文の図面によって記述する。

この細形銅矛の大きな特徴は、袋部の付け根、つまり袋部と矛身部との境界付近に左右各2個の棘(突起)を持つ点にある。4個ともすべて棘の先端を欠失するため、報文では環とするが、図示した韓国の慶尚北道月城郡入室里遺跡(梅原末治・藤田亮策・小泉顕夫1925)および(伝)慶尚北道月城郡竹東里遺跡(国立慶州博物館1987)の細形銅矛には、いずれも(伝)沖ノ島出土細形銅矛と同じ位置に左右2個ずつ棘を持つ。袋口部付近に入室里例(第12図-6)は3条節帯、竹東里例(第12図-3)は1条節帯を持ち、形は異なるが、いずれも節帯を持つことには変わりはなく、したがって(伝)沖ノ島出土細形銅矛もまた節帯を持つと判断される。

入室里例と竹東里例はともに有文の細形銅戈(第12図-4・5)を伴う。朝鮮半島で細形銅剣に細形銅戈や細形銅矛が加わる段階(筆者の3期古段階<sup>10)</sup>)には後期前半の円形粘土帯甕を指標とする水石里式土器が伴い、細形銅戈は無文で、細形銅矛は短小である。次の3期新段階になると後期後半の三角形粘土帯土器甕を指標とする靉島式土器が伴い、細形銅戈は有文で関に対する内の大きさが小さくなり、細形銅矛は長鋒化する。入室里と竹東里の細形銅戈も、全体的に見て、3期新段階に属する。北部九州では弥生時代前期末～中期初頭の細形銅戈は無文が大半で、中期前半(須玖I式期)になると有文銅戈一色となる点や、無文土器と弥生土器の併行関係から考えても、入室里例と竹東里



① . 沖ノ島祭祀の成立前史



第12図 (伝)沖ノ島出土銅矛と関連資料

( 1 : 『宗像沖ノ島 本文』阿久井長則・佐田茂(1979) 2 ~ 4 : 『菊隠李養擲蒐集文化財』国立慶州博物館(1987) 5・6 : 『南朝鮮に於ける漢代の遺跡』梅原末治・藤田亮策・小泉顕夫(1925) 7 : 武末作成・撮影)

例は須玖Ⅰ式期に併行する。

ところで、同じ一条節帯で(伝)沖ノ島例との比較が可能な竹東里例(3)は、節帯の幅が上面で6.5~7.5mm、下部では10mmほどである。いっぽう(伝)沖ノ島例は、袋端部までを節帯とすると、上面は10mmほどで、やや広くなる。しかし、竹東里例の節帯は袋端部からすぐには始まらず、3.5~4mmほどの間隔をおく。こうした目で見ると、(伝)沖ノ島例も報文の図面では袋端部付近がずばまっており、左側縁で見ると節帯は袋端部から3mmほど離れて始まりそうである。そうすると節帯の上面での幅は7mmほどになり、竹東里例とほぼ同じ数値となる。

また、入室里例と竹東里例がともに、身と袋部に縦方向の多条突線を持つのに対して、(伝)沖ノ島例にはそうした多条突線はなく、その代り関の部分に左右一条ずつ、幅1~1.5mmで横方向の隆線(突線)を入れる点特徴的である。この突線も市史の図面にはないが、信頼性が高いのは報文のほうだから、やはり存在したと見られる。

韓国の細形銅矛でこうした突線を持つ例には、崇実大学校博物館が所蔵する(伝)公州出土の細形銅矛(第12図-7)がある(金廷鶴編1972)。この細形銅矛は全長22.1cm、関幅3.9cmで、(伝)沖ノ島例よりも一回り小さく、細身である。環耳も節帯にはかからず、(伝)沖ノ島例よりも先行すると見られる。突線は関部から3mmほど上方にあるのに対して、(伝)沖ノ島例はほぼ関部にある点も時期的な差異ではないかと見られる。朝鮮半島では、環耳を持つ銅矛は目釘穴だけの銅矛よりも新しく、量も少ないが、(伝)公州例は節帯の上面幅が5mmほどで、東亜大学校が所蔵する(伝)永川例(沈奉謹・鄭聖喜1982)と近い時期が考えられ、筆者の3期古段階後半(水石里式期の最末期)に相当すると見られる。なお、この銅矛は袋口端部の片方に若干の反転部分がみられ、幅木部分の湯道(武末純一2001)は、中子2条溝であったと見られる。

これらの点を勘案すると、(伝)沖ノ島例は(伝)公州例よりも1時期遅れ、入室里例や竹東里例とほぼ同時期で、須玖Ⅰ式期が中心年代と見られる。

問題は(伝)沖ノ島例が「副葬品なのか、それとも祭祀埋納品なのか」である。すでに述べたように、北部

九州ではこれらの細形青銅武器類は、日常の生活遺構からは出ず、首長層の墳墓の副葬するための聖なる器物であった。首長層は早良平野の様相からも分かるように、拠点集落で成長したことが明らかだが、沖ノ島にはそうした拠点集落は存在しないし、弥生時代の確実な墳墓も確認されていない。社務所前遺跡では縄文土器・弥生土器・土師器等の破片が発掘されたり採集されたりしたが、住居跡などの遺構はない。したがって、(伝)沖ノ島出土細形銅矛は、日常生活遺構への廃棄品ではもちろんないし、墳墓の副葬品とも考え難いから、祭祀埋納品の可能性が高いこととなる。

朝鮮系細形青銅武器は、北部九州ではこれまで墳墓への副葬例しか知られていないが、朝鮮半島では近年になっていくつもの確実な埋納例が知られ、比較検討が可能になっている。

## (2) 韓国・架浦洞遺跡の埋納青銅器

朝鮮半島の確実な青銅武器埋納例は、全羅北道完州郡上林里遺跡で知られた。これは丘の南斜面に朝鮮製と見られる中国式銅剣が26本、鋒を東に向けて束ねられたような状態で整然と水平で東西方向に置かれていた(全榮來1976)。

その後、金鍾徹氏は慶尚北道礼田洞や草田面(これまで(伝)尚州あるいは(伝)茂朱とされてきた)の遼寧式銅剣、慶尚南道白雲里の細形銅剣・細形銅矛・銅鉞を埋納例にあげた(金鍾徹1987)。

礼田洞の遼寧式銅剣2点はヨンチョン部落裏山の傾斜面にある幅10m、長さ20mの広さに積み重なった自然の石積から発見された。いっぽう、(伝)尚州あるいは(伝)茂朱と伝える湖巖美術館所蔵の遼寧式銅剣2点(金元龍1974)は崇実大学校博物館(1987年当時は崇実大学校博物館)の遼寧式銅剣と共伴したとされる。金鍾徹氏が記述した安春培氏の教示によると、その正確な出土地は慶尚北道星州郡草田面で、山麓の自然の石積から出土したという(金鍾徹1987:p.392)。白雲里例は、智異山山麓の礫塊の中に積み重なっており、セマウル運動での道路作業中に発見された。周囲には支石墓などの先史時代の遺跡が分布する。原報告者の沈奉謹氏は、「本来、礫中に板石で作った石棺があったのが後に破壊された可能性があった。なぜかといえば、

散らばった板石片が石棺材として充分であると予想されたためである。しかし断言はしがたい(沈奉謹1981訳文:p.139)とする。したがって本稿では白雲里例は保留し、礼田洞例と草田面例を埋納例として扱う。細形銅剣に先立つ遼寧式銅剣の時期から青銅武器の埋納祭祀が実修されていたことがわかる。しかもこれらの埋納祭祀の地点は、人里離れた山の斜面であるから、対象とした範囲は集落内で完結するのではなく、集落あるいは村を越えた範囲、埋納地点から一望できる範囲を対象とした小地域や国の祭祀であったと見られる。

いずれにせよ、朝鮮半島では弥生時代前期末以前にすでに、一つの村を越えた範囲を対象とする青銅武器の埋納祭祀が存在した<sup>11)</sup>。これも遼寧式銅剣段階にすでに首長層がかなり成長していたことを裏付ける資料となる。

細形の銅剣・銅矛・銅戈がそろそろ時期、すなわち武末編年の3期の確実な埋納例としては、1998年に出土した慶尚南道馬山市架浦洞遺跡<sup>12)</sup>があり、その内容を報告する中で李相吉氏は3期以降に属する青銅器例を見直し、いくつかの墳墓副葬例などを埋納例にあらためた(李相吉2000、慶南大学校博物館2006)。

同じころ、後藤直氏も朝鮮半島の青銅器埋納例を扱っている(後藤直2000)。その後、細形銅剣の集落内埋納例も、慶尚南道陝川郡盈倉里遺跡で知られた(金賢植2000、(社)慶南考古学研究所2002a)。また最近では宮里修氏が1期でも古い段階に属する遼寧式銅矛の住居内での埋納例など、最新の資料を含めて朝鮮半島の青銅器埋納例を網羅的に集成している(宮里修2010)。

こうした朝鮮半島の青銅器埋納例の中で沖ノ島例ともっとも対比できる例は、架浦洞遺跡の埋納青銅器である。

架浦洞遺跡の埋納青銅器は、慶南大学校の敷地を体育公園に造成するための工事で人夫達によって発見され、細形銅剣1点、細形銅矛1点、細形銅戈1点、銅鉞1点からなる(第13図下)が、銅鉞は行方不明である。

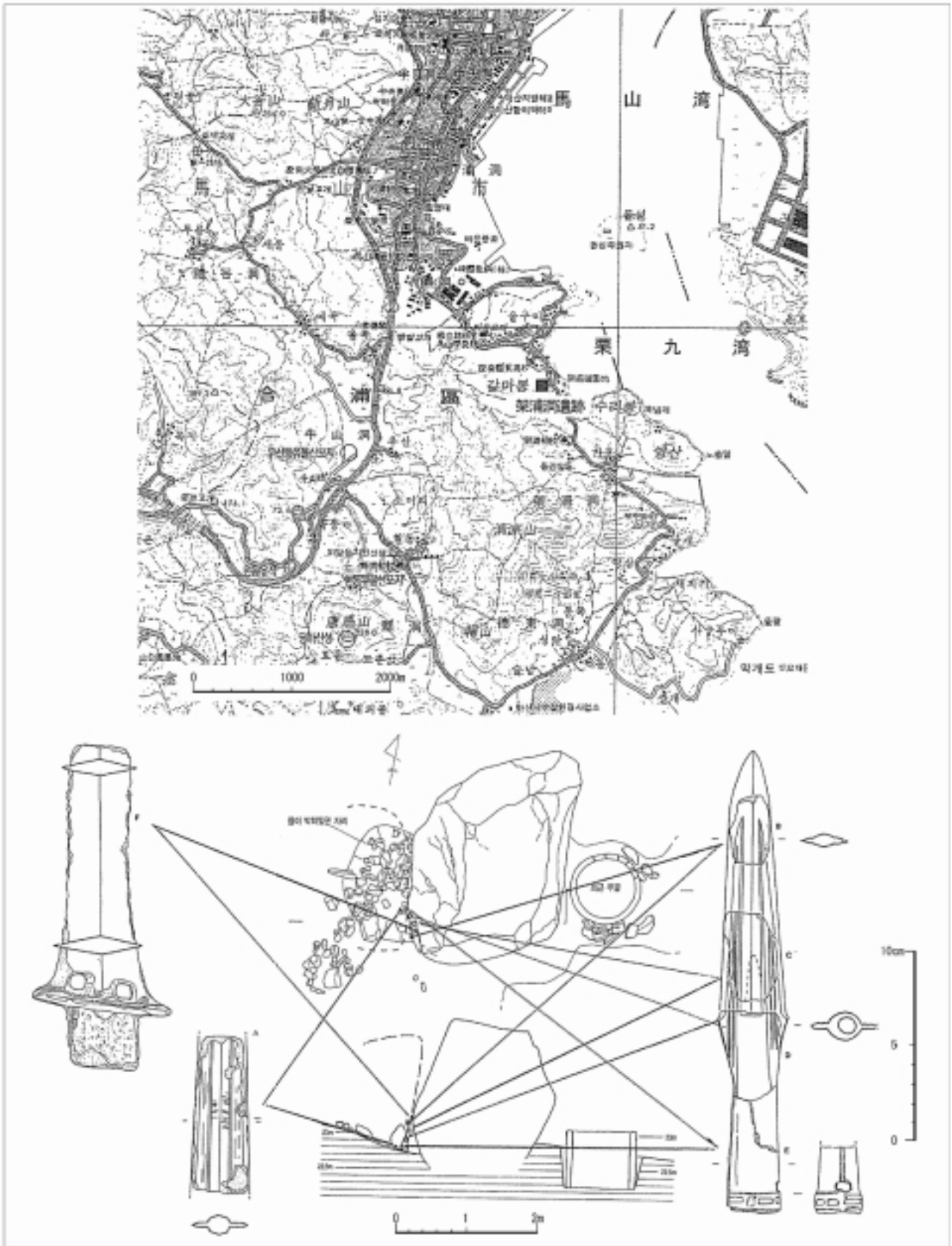
遺跡は、馬山湾の入り口である栗九湾の西側にあるカルマ(鷗)嶺(海拔200m)東側の急斜面、海拔23メートルの地点に位置する(第13図上)。この斜面は25度ほどの急傾斜をなし、あちこちに頂上から崩落した岩塊が位置する。報告書(慶南大学校博物館2006)では青銅

器出土地点について、「人夫達の伝言によれば、高さ2m厚さ2mの岩2個が触れ合い、これらの岩の下の部分は山から流れ落ちた土に覆われていたという。まず西側の岩を取り除き、2個の岩の間に挟まった土を除去する中で、残っていた東側の岩の西側の面下段で細形銅戈と細形銅矛鋒部片が露出した。西側の岩はすでに除去されていたが、東側の岩とその周辺は原状がそのまま維持されていたから、こうした状態で遺構確認を実施することとなった。初めはこの岩が支石墓の上石の可能性を考慮して、支石墓を調査するのと同じの方法で調査を進行した。

まず、岩の周辺に十字に畔を残して、周辺の腐植土を除去して地山面を確認しながら遺構を探していった。地山は岩盤が風化したもので、黄色のマサ土の上に黒紫色風化土が丘陵の傾斜方向に沿って堆積していた。上層の土はこの谷に沿って流れた水と有機物によって黒く変色していた。

最初に除去された西側の岩がさしこまれていた場所は、不定形の竪穴のように見えたが、この竪穴は人為的に埋められたものではなかった。岩の下部は地山にそのまま食い込んでいた。その下には何の施設や遺構も確認されなかった。すなわち、自然的に上から崩れ落ちてきた岩が地山層とその上部の腐植土層に一定の深さで食い込んでいる状態で、不定形の竪穴のように見られる穴は、岩の周辺の土が、木の根などによって腐植しながら形成されたものと判断された。よって、この岩は支石墓の上石ではないのはもちろん、人為的に動かされたり配置されたりしたものではなく、自然状態そのままの姿であった。

西側の岩が取り去られた穴に詰まった土を除去すると同時に、現存する東側の岩の西側下部、二つの岩が触れ合いながら生じた隙間を露出させた結果、追加で銅剣片1点と銅矛片3点が出土した。遺物が出土した地点はすべて二つの岩の隙間で、遺物はそれぞれの位置やレベルを異にしていた。すなわち、銅剣片は西側の岩が食い込んでいた床面と同じ深さから、そして3点の銅矛片は岩の隙間に形成された空間に充填した土の中からそれぞれ10~15cm程度のレベル差を置いて出土したものである。こうした点からみて、青銅器はもともとその場所にあった岩の隙間にさし込まれたもの



第13図 架浦洞遺跡の位置(上)と埋納青銅器の出土状態(下)

(『馬山架浦洞青銅器埋納遺跡』慶南大学校博物館(2006)より作成)

で、とくに銅矛の場合、当時すでに切断された4片を順番に差し入れることで、そのレベルがそれぞれ異なったものと判断された。合わせて、西側の岩があった縁で、鍬の刃と見られる打製土掘り具1点が収集され、周囲の所々で無文土器片と木炭片も出土した。現存する岩の東側の低所には、最近まで使用された井戸があり、その周囲には三国時代土器片と磁器片、銅銭をはじめとする現代の遺物と木炭片が散らばっていた。

調査結果、この岩は人為的な施設物ではない自然岩塊と判断され、そのほかに特別な遺構の痕跡は確認されなかった。結局これらの青銅器は副葬されたものではなく、山斜面の岩の隙間にさし入れたもので、これは何らかの特別な目的のために青銅器を埋納したものと判断された。」と記述されている。

銅矛は、節帯の6個の長方形凹文が特色で、似たような凹文は、双頭管状銅器が伴ったという慶尚南道泗川市馬島洞出土銅矛(沈奉謹・鄭聖喜1982)にあるが、武末の4期に属する馬島洞例は正方形凹文で凹文と凹文の間隔もせまく、架浦洞例が先行すると見られる。

銅戈は「無血溝銅戈」で樋がなく、丸い穿が特色である。梨花女子大学校博物館所蔵の同様な銅戈を検討した李健茂氏は、内が大きく厚いことなどから、忠清南道素素里や合松里、全羅南道草浦里遺跡出土品などと同時期と考えた(李健茂2000)。武末の編年では3期古段階である。銅矛との同時性を考慮すると、架浦洞遺跡に青銅器が埋納された時期自体は3期新段階(弥生時代中期前半併行)が中心年代で、(伝)沖ノ島例ともほぼ同じ年代と考える。

架浦洞遺跡での青銅器埋納の目的は、馬山湾に臨む急斜面上にあることや、付近に集落跡がないことを勘案すれば、海上交通の安全を祈願した祭祀の蓋然性が高かったと見られる。大きな岩と関わりを持って埋納された点も重要である。こう考えれば、(伝)沖ノ島出土細形銅矛も、周囲に巨岩があり、絶海の孤島で捧げられたから、架浦洞例と同様に、航海安全祭祀に用いられたと見られる。すなわち、地域的な対外交渉祭祀の沖ノ島での実修と、沖ノ島に対する地域的な信仰の存在を示すといえる。

### (3) 弥生時代前半期新段階の朝鮮半島と北部九州の交渉

それでは、(伝)沖ノ島出土細形銅矛の所属する時期であり、田熊石畑遺跡の青銅器副葬墓群のでもある弥生時代前半期新段階、特に須玖I式期の北部九州と朝鮮半島南部の交流の様相はどうだったのか。

前期末から中期前半の大きな特色に、朝鮮半島南部の後期無文土器人の集住がある。ほとんどが北部九州で、限られた村のしかも一角を占めるだけだが、弥生土器のつくりとはまったく異なる後期無文土器とその系譜の土器が多量に出る。最近では中部九州や、山口県域まで広がった(片岡2008)。

この後期無文土器は口縁部に粘土紐を貼りつける甕が指標で、前半の断面円形の甕(水石里式)と、後半の三角形の甕(勒島式)に細分される。福岡市諸岡遺跡では1974年の調査で、弥生時代前期末の土坑18基のうち12基から、合計で50個体をこえる水石里式の無文土器が出た(福岡市1975)。これらは搬入品または忠実再現品である。この地区の弥生土器は30点ほどで、無文土器の器種がそろい、しかも煮炊き用の甕が多数を占め、焼土がでた土坑もあるから、ここは渡来無文土器人が主体となる集団の居住区とみてよい。ただし、弥生土器の要素が入って変容した擬無文土器はなく、単一の時期で石器もほとんど無いから、一時的な居住とみられる。この時期の拠点集落である板付遺跡の周縁にあり、弥生人と近接し交流しながらも同化はしない、あるいは長く定住する際の初期で終わったといえる。こうしたありかたを諸岡型と呼べば、このタイプにはほかに、福岡県小郡市三国丘陵の遺跡群(横隈鍋倉遺跡、三国の鼻遺跡、横隈山遺跡など)がある(片岡1999)。

いっぽう佐賀県土生遺跡(片岡1999)では前期末～中期前半の弥生土器とともに、少量の水石里式無文土器と多くの擬無文土器が出た。主要な器種がそろって甕が多く、前期末～中期初頭の古段階と、中期初頭～前半の新段階に分かれる。古段階の擬無文土器は無文土器の特徴がよく残るが、新段階では弥生土器の要素がかなり入り、無文土器の要素はわずかになっていく。これは、無文土器人がこの地に長く居住し、地域社会に深く入り込みながら同化する過程を示す。こうした様相を土生型と呼ぶと、ほかに原の辻遺跡(長崎県2005)、佐賀市鍋島本村南遺跡(佐賀市1991)、熊本市

護藤遺跡群(熊本市史1996)などがある。諸岡型が長期定住した場合でもある。

原の辻遺跡の擬無文土器は、水石里式系のほかに勒島式系も多く、無文土器もかなりある。出土地点は台地北西側の縁辺部で、環溝の外にあたり、環溝内の中心部ではない。付近には中期前半に造営の船着場(長崎県2007)もあるため、これら朝鮮系無文土器の時期である前期末～中期には無文土器人が継続的に渡来・居住して、集落の中心部には入らずに周縁から中心を制御するように、港の建設を指導し国の交易に参画したとみられる。

またこの時期からは、朝鮮半島南部でも釜山市萊城遺跡(釜山直轄市立博物館1990)や慶尚南道泗川市勒島遺跡(武末純一2008a)、金海市龜山洞遺跡(慶南考古学研究所2010a)などで、中期を主体とする弥生土器や擬弥生土器がまとまって出土し、倭人の移動を示す。

萊城遺跡の弥生系土器は、中期初頭～前半の搬入ないし忠実再現品で、発掘面積が狭いためか同時期の土器の九割を占めてしかも甕が主体だから、これらを使って炊事をする倭人集団の短期居住区であろう。

いっぽう勒島遺跡は島全体から大量の弥生系土器が出土し、弥生人集団の移住とその変容過程や当時の日韓交流を考える上で重要な位置を占める。これまで中期初頭から前半の土器が主体とされたが、近年の発掘では中期後半の土器も多い。弥生系土器自体の上限は弥生前期末、下限は後期前半で(武末 2008a)、弥生中期前半併行期までを勒島Ⅰ期、中期後半～後期前半併行期を勒島Ⅱ期とする。ここの弥生系土器は全体の一割未満だが、擬弥生土器もあり、弥生人集団の長期移住を示す。擬弥生土器には、一部に無文土器の要素がみられるa類からほとんど無文土器化したb類まであるが、ほかに無文土器の中に弥生土器の要素を一部取り込んだ土器(これを仮に擬無文土器と呼んでおく)もある。この擬無文土器は無文土器人からの対応という面が強い。これらの事象は、弥生人と無文土器人の密接な交流を物語る。

これら弥生系土器の故地は当然、北部九州系、それも遠賀川以西地域系の土器が多いが、勒島Ⅰ期には周防・長門地域に特徴的な内折口縁壺があり、ほかにも西瀬戸内地域、遠賀川以東地域や筑後・肥後地域の系

統の土器がある。したがって、北部九州の玄界灘沿岸地域だけでなく、遠賀川以東地域や西瀬戸内地域、肥後地域を含めて、勒島との交流がすすめられた。さらに金海龜山洞遺跡では城ノ越～須玖Ⅰ式の弥生系土器が主体の集落があり、勒島を含むいくつかの交流拠点(結節点)が、朝鮮の南海岸部にあった(武末純一2010)。

また勒島遺跡では、朝鮮在来の漁具のほかに、北部九州系の漁具(潜水漁用の鯨骨製および鹿角製のアワビおこし(第14図)、外海用の西北九州型結合式釣針)が一定量みられる。勒島Ⅰ期とⅡ期への振分けが不十分だが、北部九州のアワビおこしがすべて鯨骨製なのに対して、勒島では鹿角製が多数を占めて材質転換が起こる。しかも、北部九州でしかみられない基部側縁に突起をもつ形態が鹿角で再現・模倣されるから、勒島に渡来した弥生人の中には九州北部の漁民(倭の水人)が相当数含まれ、文化変容をもたらすほど永く居住した(武末純一2008c)。

龜山洞遺跡は南北に長く伸びる慶雲山南側の崩積斜面にある。無文土器時代後期の中心地と見られる金海会峴里遺跡一帯よりも西北側の周辺部に当たる。

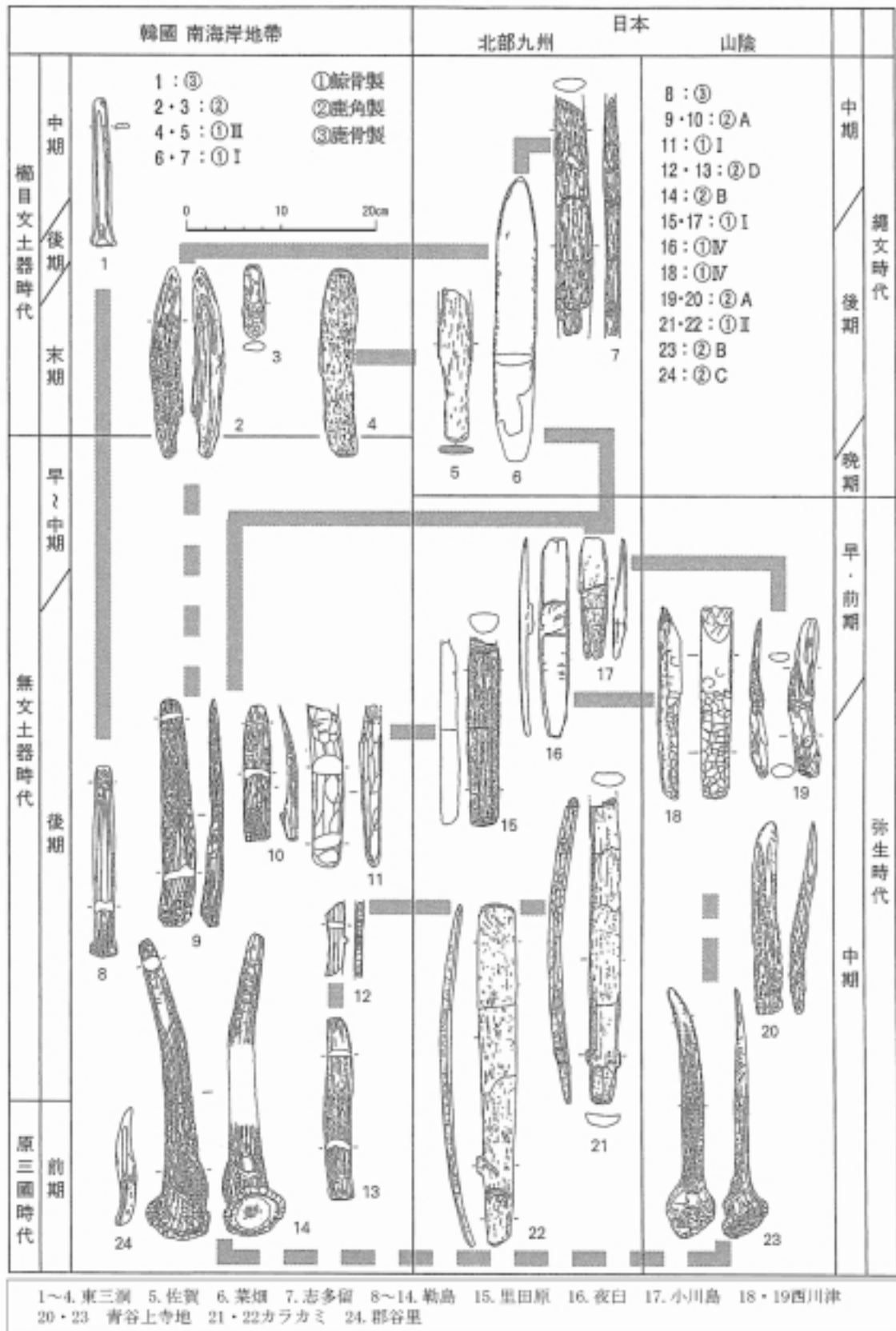
発掘区はA1・A2・B・C区域に分かれ、無文土器時代の遺構には住居跡、竪穴、高床建物、墳墓がある。無文土器時代後期の遺構はA2区域3号住居跡以外はすべてA1区域に集中し、残りは無文土器時代中期に属する。A1・A2区域の無文土器時代遺構のうち弥生系土器出土遺構はA1区域だけから出土した(第15図)。これらの弥生土器は北部九州系に限られる。重要なのは弥生系土器が出た遺構では、後期無文土器よりも弥生系土器が多くて、大体7割前後を占める。

遺構は西側の力群と東側のナ群に分かれ、力群が弥生時代前期末から中期初頭、ナ群は中期初頭から前半が主体だから、力群からナ群への移動が考えられる<sup>13)</sup>。そして、力群・ナ群ともに弥生系土器を複数出す遺構がまとまり、そのまわりを弥生系土器が1点または全く出ない遺構が取り囲む。これらの弥生系土器には後期無文土器が伴い、おおむね勒島式土器の時期の様相を示すとともに、弥生土器の要素を一部もつ擬無文土器もある。また逆に勒島式土器の要素を一部持つ擬弥生土器も見られる。

こうした特色からみて、渡来した弥生人集団やその



① . 沖ノ島祭祀の成立前史



第14図 日韓アビおこしの展開図試案 (『九州と東アジアの考古学 - 九州大学考古学研究室50周年記念論文集 - 』武末純一(2008)を改変)

子孫達は、この村の中の一部に集住しながらも、無文土器人と一緒に住み、力群からナ群へ重心を移したと見られる。また、(最初は弥生土器が多くて、時期が新しくなるにつれて擬弥生土器が多くなる)というパターンではなく、新しい時期にむしろ弥生土器が多くなることは、弥生人の渡来が一回限りのものではなく、何度となく渡来が繰り返されたことを物語る。

A1区域では、無文土器時代後期に属する双合范鑄造鉄斧の破片や略完形品、あるいは地金の可能性が提起された破片などが出ている。弥生時代の前期末から中期前半にかけて、こうした双合范鑄造鉄斧の破片が北部九州で出土するのはよく知られた事実である<sup>14)</sup>。弥生人が渡来した目的が、鉄器やその原料、あるいは製作技術の獲得にあったことが分かる。

このように弥生中期前半には、北部九州沿岸部の「倭の水人」が当時の対外交流に大きな役割を果たしており、その範囲は靉島遺跡の弥生系土器からみて、西瀬戸内から中部九州にまで及ぶ。それらの人々の中には、宗像地域沿岸部の「水人」たちも当然含まれると見られるが、残念ながら、宗像地域沿岸部の遺跡でそうした痕跡はまだなく、今後の課題である。ただ、田熊石畑遺跡の谷部トレンチで出土した三角形粘土帯土器は無文土器時代後期後半の靉島式期に属すると見られ、田熊石畑の首長層もそうした交流に関与したことをうかがわせる。

また、すでに指摘されているように、宗像の沿岸地帯から山陰地域の沿岸部にかけては、弥生時代前期に中頃から中期初頭にかけて土笛がみられ、一つの文化圏をなす。このほか、弥生時代前半期の山陰地域では前期後半～中期前半にかけて、島根県西川津遺跡で見られるように、西北九州型結合式釣針と鯨骨製のアワビおこし(第14図-18)が北部九州から流入する。そしてアワビおこしは、鳥取県青谷上寺地遺跡に顕著なように、鹿角製に材質転換(第14図-20・23)して、盛んに使われる(武末純一2008c)。こうした事象は、当時の朝鮮半島南部から北部九州・山陰地域の日本海沿岸部にかけて、それぞれの地域の水人が独自性を保ちながら、海上活動に従事して交易したことを示す。とくに北部九州の水人は、その媒介項を果たしたと見られる。

ところで、この時期の中国東北部から日本列島の交易については、近年、新たな説が提起された。鄭仁盛氏は、靉島A地区で出た直立口縁で焼成後に孔を穿つ滑石混入土器や底部に横方向の縄目叩きが観察される鉢、B地区ナ-136号住居で出た内屈して口縁部が肥厚する滑石混入土器、あるいは靉尚北道星川礼山里3号墓の短頸壺をとりあげ、以上の出土品は楽浪土器よりも燕下都あるいは高麗寨遺跡、牧羊城遺跡との類似性が高いとする(鄭仁盛2008)。そして三韓瓦質土器<sup>15)</sup>の技術的起源を戦国系灰陶に求めて、「洛東江流域圏の人々が最初に中国系灰陶に直面する時期は、洛東江流域圏が遼東半島と韓半島西北地方はもちろん、日本列島と沖縄までを連結する国際交流網に編入される紀元前3世紀末まで遡る可能性がある。」とした。

また、日本出土品では、原の辻遺跡不條地区1号旧河道で出た胴部下半に横方向の縄目タタキを持つ壺(第16図-28)や、沖縄県で出ている滑石混入の内屈肥厚口縁壺などを根拠として挙げる。しかし、これら日本の出土品はいずれも時期が確定せず、いまのところ確かな弥生中期初頭～前半期の瓦質土器はない。

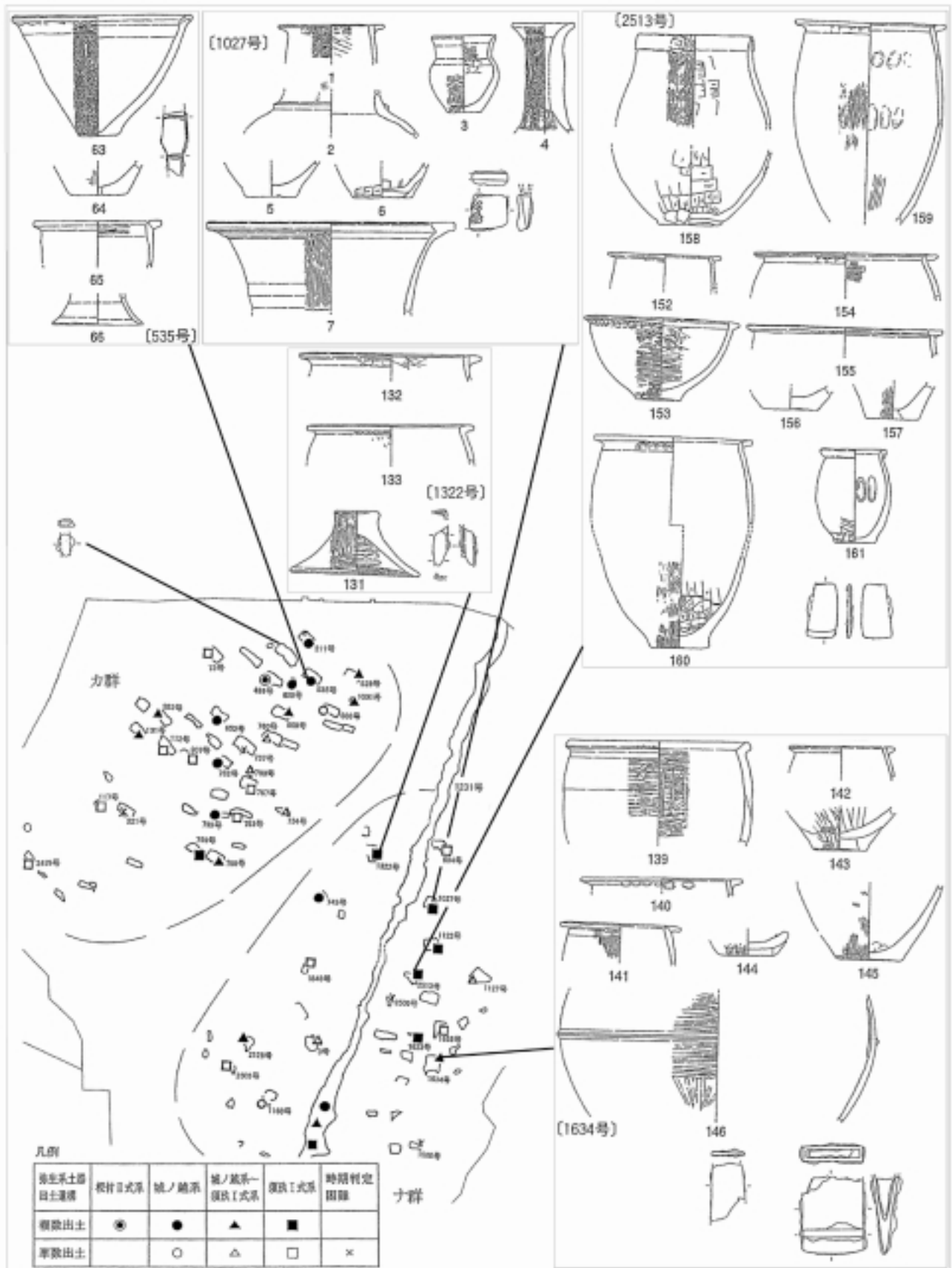
いっぽう、この鄭仁盛氏の説を後押しする資料には、原の辻遺跡大原地区の城ノ越式に属する2号甕棺墓および3号甕棺墓出土トンボ玉(第16図-9～11・18)や、平成10年度不條地区の城ノ越式から須玖Ⅰ式に属するE16号土坑(長崎県教育委員会1999)出土の三翼銅鏃(第16図-7)がある。これらは、上限が中国の戦国時代までさかのぼりうる資料である。

以上の動向を宗像地域の資料と照らしたときに注目されるのが、宗像市沖ノ島の社務所前から出土した弥生時代前半期の土器である。沖ノ島旧社務所前出土弥生土器は、すでに第3次調査の報告書で概要が報告されている(橘昌信・黒野肇1979)。しかし、今回再調査したところ、いくつかの新知見が得られた(第17図)。

まず、上限は弥生前期だが、今回の調査で有軸羽状文と肩部に施文する破片8(第17図-1)が認められた。この破片の描線は板付Ⅰ式に比べて細く稠密だが、研磨後に施文する点からみて、板付ⅡA式までさかのぼると考える。

次に注目されるのは、後期無文土器がいくつか含まれている点である。報告書では三角粘土帯甕が2点(第

① 沖ノ島祭祀の成立前史



第15図 亀山洞の弥生系土器出土遺構配置図

(武末作成)

17図 - 5・6) 報告されており、宗像大社神宝館には現在それらを含めて4点が展示されている(第17図 - 3・5・6・8)。このほかに、収藏品中に水石里式~勒島式の甕の口縁部片が3点(第17図 - 2・4・7)、胴部と底部の破片が数点あり、ほかにもやや大型で粗いハケメ仕上げの直立口縁甕が1点ある(第17図 - 9)。報告書に図示された前述の甕2点など、下限が弥生後半期に下る例を除くと、水石里式としてもよい甕は1点(4)で、勒島式(2・3・7)が多い点が重要である。それは、原の辻遺跡を除くと勒島式はむしろ山陰地域に多く分布するためである。

なかでも、断面が扁平な楕円形の粘土帯を貼りつけた勒島式の甕(3)には格子目タタキがみられる。この個体は胴部だけでなく粘土帯の上にも格子目タタキが施され、口唇上面には刻み目を持ち、内面は粗い横研磨仕上げである。これらの土器は共伴資料がなく、時期がいま一つ不安定だが、器形などからみて第17図2・3・7は弥生時代中期初頭から前半が中心年代であろう。第17図4は前期末までさか上る可能性がある。なお、先述の弥生時代中期初頭~前半の弥生土器(第14図1~5)が伴った不條地区E区16号土坑(長崎県教育委員会1999)から出た勒島式の無文土器組み合わせ牛角把手付壺(第16図6)の把手付近にみられる痕跡について斜格子目タタキとしたが(武末2011)、把手を接合する際の刺突痕跡の可能性が高くなったため、第17図3の時期を限定する資料からは外して、今後の検討課題としたい。

また、福岡県宗像市大島のろくどん遺跡では、胴部下半に横方向の縄目タタキを持つ瓦質土器壺の破片(図化できるものは6点である)が出ている。これは通常の楽浪土器ではない。ここでは一個体として復元してみた(第17図 - 16)。口縁部の形態(16 a)からみて、中国の戦国時代ではなく前漢代まで下りはするが、紀元前2世紀が中心年代と見られ、こうした土器が今後どんな弥生土器と共伴するのかが、一つの焦点となる。

ともあれ、こうした沖ノ島・大島の出土土器からすると、沖ノ島は弥生人の単なる避難所ではなく、朝鮮半島から北部九州を経て日本海沿岸部へと連なる海上交易路上の重要な結節点(寄港地)の一つであったことになる。

#### 4. 弥生時代後半期の宗像地域と沖ノ島

##### (1) 弥生時代後半期の宗像地域

弥生時代後半期の北部九州では、首長層の副葬品の主体が朝鮮系から前漢鏡や後漢鏡、ガラス璧、素環頭大刀などの中国系に変わり、王墓が出現する。

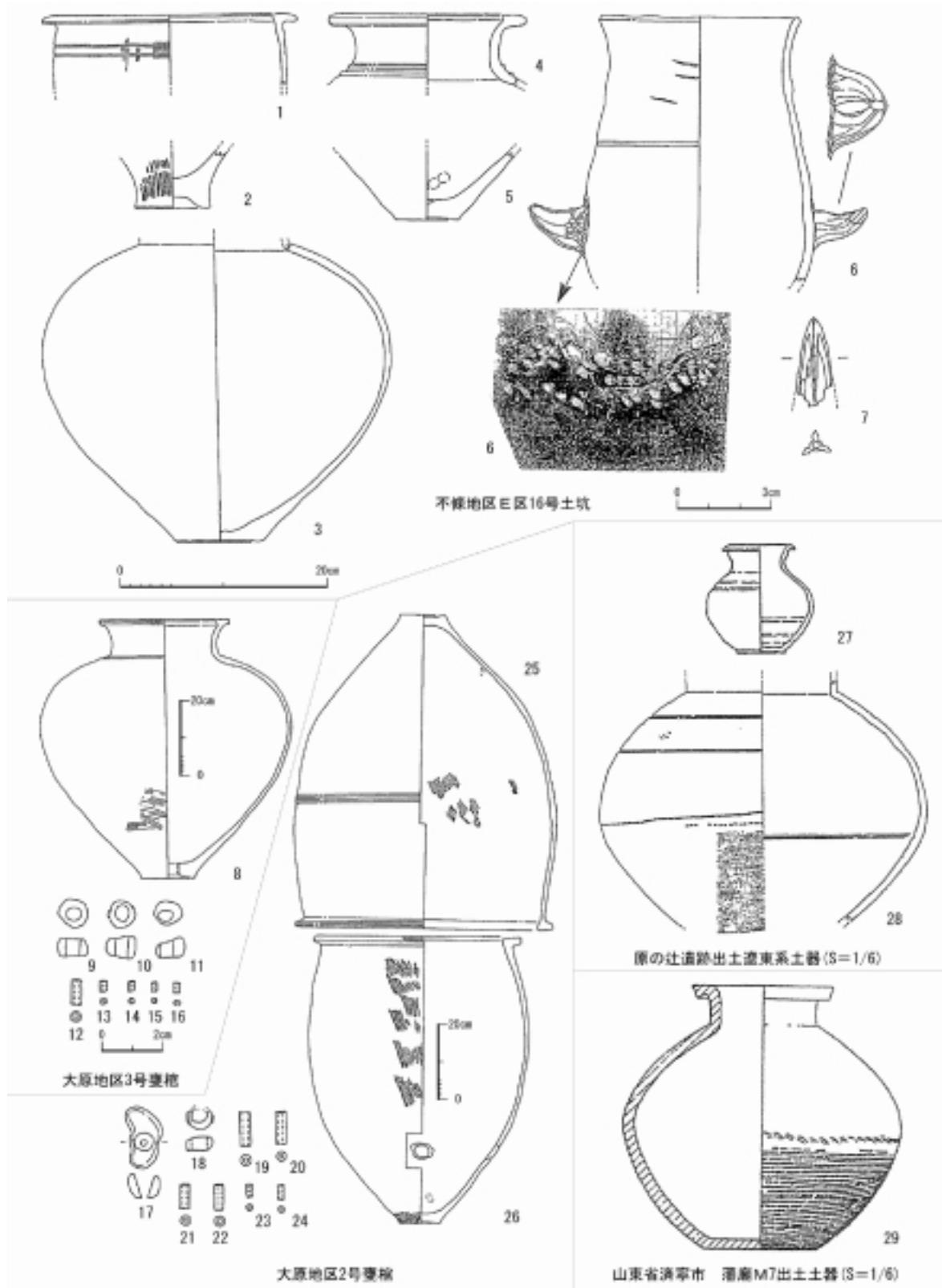
漢王朝からA・D 57年に金印を下賜された奴国王(「金印奴国王」とする)の墓は未発見だが、金印奴国王より半世紀以上も前の中期後半(紀元前1世紀後半)の奴国と伊都国の王墓が知られる。福岡県春日市須玖岡本D地点(通称)の甕棺墓と福岡県前原市三雲南小路の2基の甕棺墓(福岡県1985)がそれで、これらは30面前後の中国の前漢鏡や天のシンボルである璧(ガラス製)をはじめ多くの副葬品を独占する。王墓までは至らないが、集団墓から特定個人墓を析出する動きは、弥生後半期の各地域の特色である。

この時期には集落がさらに巨大化するとともに、内部構造に大きな変化が起きて、円形環溝の中に一部人々のための、直線的で地形に左右されない方形区画(環溝)が出現する。

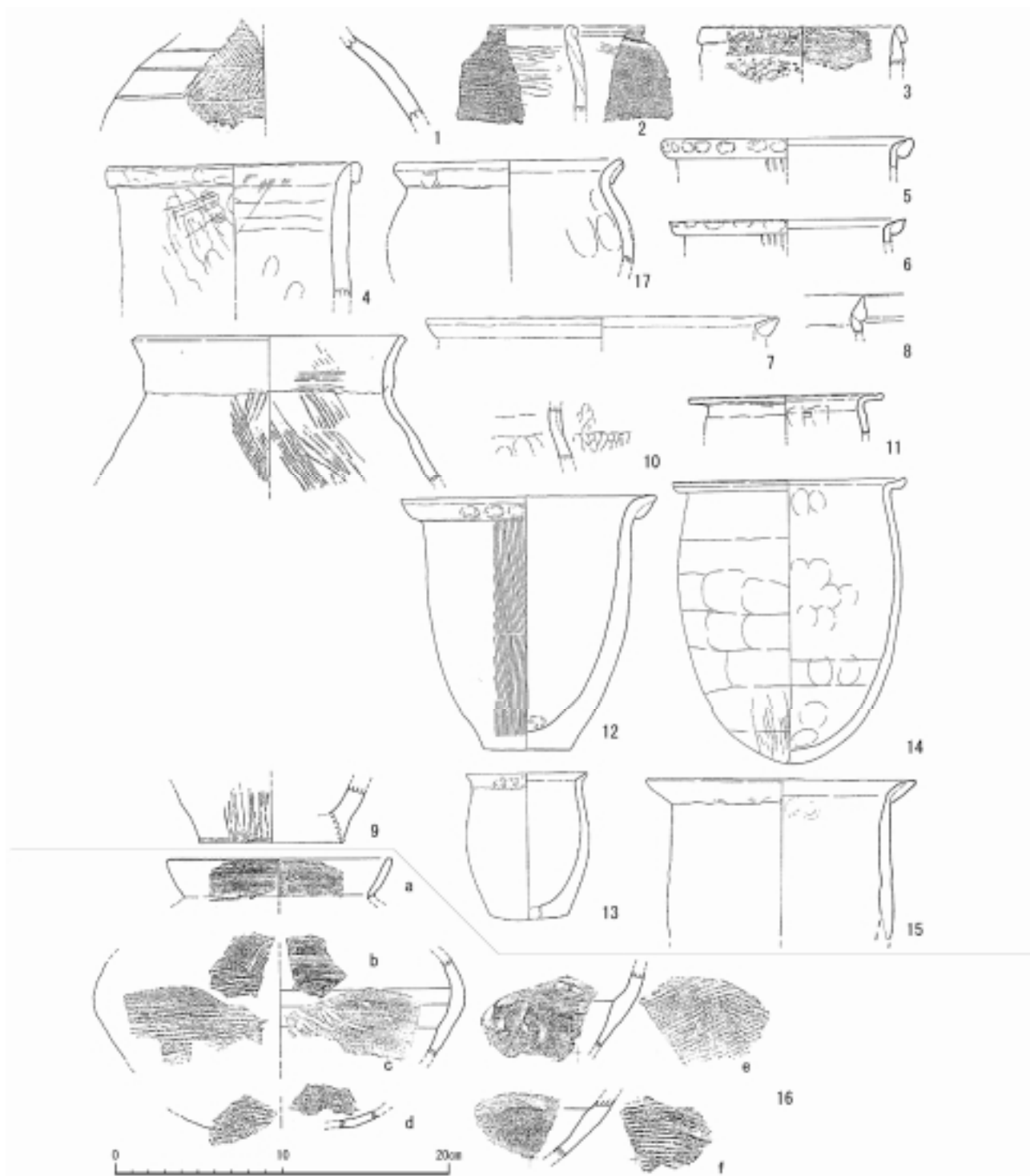
三雲・井原遺跡では、中期後半になるとそれまで散在した居住地が中心部に集中して、60万<sup>2</sup>ほどの大規模な集落となる。特に集落域と、その南部の墓群とのあいだには、南東部の寺口地区から八龍地区にかけて20~100mの間隔で平行する横断面逆台形、幅約3~4mの2条の大溝が走り、さらにサキゾノからイフ地区にかけても同一方向だが別の1条の大溝があって、おそらく台地両側の河川とともに、集落域の区画をなしたとみられる。西側の状況が不明だが、三雲南小路王墓と集落域の間にも区画が存在した可能性が高い。そして、王墓の北200mの集落域である下西地区には、中期後半に堀削された1辺約45mの方形環溝が存在する(前原市2006)。これは、この時期の拠点環壕集落に、首長層のための区画が明確な形で出現したことを意味する。私は、これをA類型(円形の中の方形)と呼び、その全体像は吉野ヶ里遺跡で明らかになった。

方形環溝は集落のさまざまな重要施設を取り込む。中期初頭の一ノ口遺跡では全員のための物見櫓だったが、吉野ヶ里では南内郭と北内郭が独占する。また吉野ヶ里の倉庫区画は、巨視的にみれば南内郭に近接し、

① . 沖ノ島祭祀の成立前史



第16図 原の辻遺跡の弥生時代前半期対外関係資料( 1 ~ 28 )と関連資料( 29 )  
 ( 1 ~ 7 : 『原の辻遺跡』長崎県教育委員会( 1999 )および武末手拓、  
 8 ~ 26 : 『原の辻遺跡 - 石田大原地区緊急調査報告書 - 』長崎県教育委員会( 2007 )  
 27 ~ 29 : 『第59回埋蔵文化財研究集会 日本出土の朝鮮半島系土器の再検討 - 弥生時代を中心に - 』  
 古澤義久( 2010 ) )



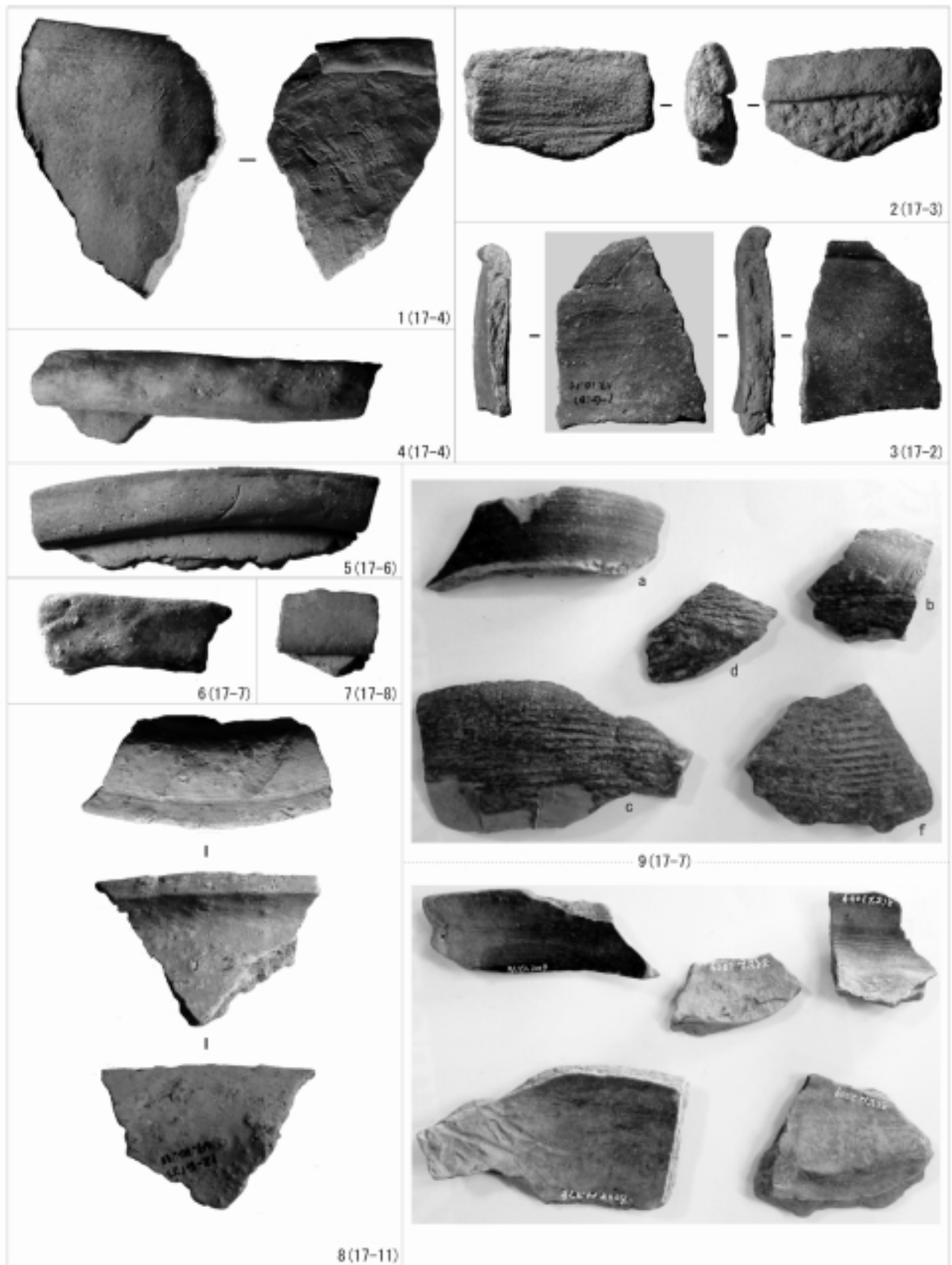
1~11. 社務所前遺跡 12. 芦ヶ浦第1洞穴 13. チゴノハナ3号墓 14. 韓国慶山市新笠里31号木管墓  
14. 韓国四川市鳳溪里2号窯 16. ろくどん遺跡 17. 田熊石畑遺跡

第17図 沖ノ島社務所出土弥生前期土器および朝鮮系土器と関連資料

- (1~4・7~11:川口陽子・藤島志考・井上英・田中悠太作成、  
12・13:『対馬-浅茅湾とその周辺の考古学調査-』長崎県教育委員会(1974)、  
14:『慶山新笠里遺跡I』財団法人嶺南文化財研究院(2010)、  
15:『四川鳳溪里三国時代集落』社団法人慶南考古学研究所(2002)、  
16:武末作成・撮影、  
17:『概報 田熊石畑遺跡-福岡県宗像市田熊所在遺跡の発掘調査概要-』宗像市教育委員会(2009))



① . 沖ノ島祭祀の成立前史



第17図(写真) 沖ノ島社務所前遺跡( 1 ~ 8 )とろくどん遺跡の朝鮮系土器( 9 ) ( 武末撮影 )

前段階の全員ののための倉庫群の形をとりつつも、実質的な管理権は南内郭の人々が握る。平塚川添遺跡では、中央区の円形環溝に大型の高床倉庫群や広場、集落全体をまとめる大型建物が取り込まれる。

方形環溝はその後、福岡市野方中原遺跡(福岡市1992)のように、中に掘立柱建物を抱えたまま円形環溝の外に飛び出し(円形の外の方形：B類型)すぐに佐賀県千塔山遺跡(基山町1978)のように円形環溝が消滅して方形区画のみとなる(円形のない方形：C類型)。こうしたC類型の方形環溝は古墳時代首長層居宅へとつながるから、筆者は居住が確かめられるC類型を弥生首長層居宅と呼ぶ。

こうした北部九州社会全体の動向と照らし合わせたとき、残念ながら宗像地域の弥生時代後半期には、特定個人墓へと向かう動きはある(宗像市史編纂委員会1997)ものの、完形中国鏡を出した墳墓はなく、集落の調査ではまだ方形環溝も発見されておらず、今後の調査に待つところが大きい。

ただ、沖ノ島社務所前遺跡出土土器の再調査の成果によって、この時期の宗像の水人を推定する端緒が得られたから、後半期の青銅器の様相も検討して、ラフなスケッチを試みたい。

## (2) 沖ノ島で出土した弥生後半期の朝鮮半島系土器

沖ノ島で出土した弥生後半期の朝鮮半島系土器としては、すでに述べたように社務所前遺跡の三角形粘土帯土器2点が第3次調査の報告書に収録されている。この2点(第17図-5・6)は口縁端部が尖り、第17図-8も含めて上限は須玖Ⅰ式併行期までさか上りうるが、最近報告されたカラカミ遺跡第1地点2号住居跡から須玖Ⅱ式土器とともに出土した三角形粘土帯土器(九州大学2011:p 21 図17-88)と同様に口縁端が尖るから、原三国時代前期古段階まで残り、弥生中期後半期が下限と見られる。今回の再調査ではこのほかに、いずれも小破片だが、粘土帯を薄く長く貼りつけた薄型三角形粘土帯甕(第17図-10)や、三韓瓦質土器小形甕(第17図-11)も出ていたことが判明した。

薄型三角形粘土帯甕は、勸島遺跡では弥生後期初頭の土器と共伴した(李昌熙2004)から、上記の2点よりもさらに時期が新しくなって、原三国時代前期中段階

から新段階とみられる。日本での時期は、長崎県対馬市のチゴノハナ遺跡3号墓で出土した土器(第17図-13)が後期前半と見られ<sup>16)</sup>、これよりも後出する資料に対馬市芦ヶ浦第1洞穴の薄型三角形粘土帯甕(第17図-12)があって、高三瀦式期の新段階から下大隈古段階の複合口縁壺が伴うから、下限を下大隈式期古段階とみておきたい。これらの事例からみて、10の時期は弥生後期前半から中頃と考えられる。

こうした薄型三角形粘土帯甕は、たとえば慶尚南道泗川市鳳溪里遺跡(慶南考古学研究所(2002b))の窯跡群などでも出ており、前期中～新段階の瓦質土器が共伴したから、この時期まで朝鮮半島の南海岸部でつくられている。ここでは参考として2号窯の出土例を図示した(第17図-15)。

三韓瓦質土器小形甕(11)は灰色の色調で砂粒を多く含み、内外面ともヨコナデとナデで仕上げるが、外面にわずかに縦方向の叩き目かとみられる痕跡が残る。口径11.8cmで、口縁部はほぼ水平に広がり、口縁端上面は上方にわずかに丸く突出する。口縁から少し下がったところに段を持つ点もこの土器の特徴で、全体的にみて嶺南地域三韓土器の搬入品である。朝鮮半島南部での完形品例を第17図-14に示したが、11の時期は原三国時代前期中段階～新段階で、やはり弥生後期前半から中頃と考えられる。

島根県出雲市山持遺跡でも薄型三角形粘土帯甕がⅢ区SR03(自然河道)からまとまって出ており、「出土位置の判明する資料は河道でも最下層に近い位置から出土しており、後期中葉より古く位置づけられる可能性も考慮される」という(池淵2010)。ここでは三韓瓦質土器広口壺片のほかに、楽浪土器広口壺や長頸壺も出ている。同様な楽浪土器広口壺や長頸壺は長崎県壱岐市原の辻遺跡でも出ているから、壱岐・対馬から北部九州と日本海沿岸をつなぐ海上交易路は弥生後半期にも健在で、むしろより強化されたと見られる。

したがって、出土した朝鮮半島系土器からみて、弥生時代前半期新段階と同様に、沖ノ島は弥生時代後半期の中期後半から後期中ごろにも、壱岐・対馬から北部九州と日本海沿岸をつなぐ海上交易路上で重要な役割を果たしたと見られる。

残念ながら沖ノ島では、今回の社務所前出土土器の

再調査でも楽浪土器や原三国時代後期の三韓土器は確認できなかったが、これは発掘自体が極めて部分的な調査であったためとも考えられ、当時存在しなかったとはいえない。むしろ、原三国時代前期の三角形粘土帯・薄型三角形粘土帯甕や三韓瓦質土器小形甕が確認されたことを、積極的に評価するべきである。この点については、北部九州の海村の検討によって補完したい。

### (3) 北部九州における海村の展開

弥生時代に出現した農村は、縄文時代の一体化した海と山との中に割り込んで、海の生業や山の生業を主体とする村も生み出した。農村でも海や山の生業活動があるが、その比重は低い。すべての集落遺跡の中から海村・山村を抽出する目安は、石庖丁の数量である。

海村の典型例は福岡県糸島市御床松原遺跡で、ここは隣接する新町遺跡も含めて一つの村である(志摩町1983・1987・1988)。ここでは、弥生時代から古墳時代にかけて石錘が異常に多く、鉄製の釣針やアワビおこしもあり、網漁の比重が高くて、潜水漁法も行う。石庖丁の数量(12点)は、同時期の竪穴住居の数と同様でしかも農村遺跡である佐賀県鳥栖市安永田遺跡の石庖丁の数量(63点)のおよそ5分の1で、農作業の比率もその程度であった。したがって、御床松原遺跡のように、周囲の遺跡よりも漁撈具の比率が高い沿岸部の集落は、海村と見てよい。地理環境や『魏志』倭人伝の「南北市糶」の記述から見て海上活動の比率が高い対馬でも、これまで石庖丁はほとんどなく、島全体が海村で占められた。壱岐では原の辻遺跡とカラカミ遺跡が代表である。韓半島では、倭系遺物が顕著な靺鞨遺跡も、漁具が卓越して石庖丁は少なく、無文土器時代後期後半から原三国時代前期にかけての典型的な海村である。

これら海村の多くは弥生時代後半期(中期後半～後期)に对外交流が明確になるが、原の辻遺跡は前半期から顕著で、しかも一支国の中心集落である。

弥生時代後半期には、楽浪郡も含めた交易網の結節点に海村が組み込まれ強化される。対馬では浦々の多くの海村が、三韓との日常的な交易を主にしながら楽浪郡との交易にも加わった結果、さまざまな倭・三

韓・楽浪系の文物が墓に副葬される。壱岐から北部九州沿岸、山陰・山陽の海村は、福岡県糸島市御床松原遺跡、福岡市元岡遺跡や今宿五郎江遺跡(福岡市2007)など、原の辻遺跡を除けばいずれもその規模は国の拠点集落に遠く及ばないが、農村であり出ない特殊な遺物(楽浪系や三韓系の土器、中国銭貨(半両銭・五銖銭・貨泉など)が日常生活領域から出る。

弥生時代の中国銭貨は、近畿地域から韓半島の経路上にある海村の日常生活域から複数出る(原の辻15点、御床松原6点、元岡9点、今宿五郎江5点、鳥取県青谷上寺地4点、岡山県高塚遺跡25点、大阪府亀井遺跡4点、山口県沖ノ山遺跡116点以上など)場合と、内陸部にかけての墳墓の副葬品や日常生活域で少数出る場合がある。注目されるのは、同時代の中国製品で首長層の副葬用器物となった完形中国鏡が、海村では原の辻遺跡(長崎県2005)を除くと全く出ないこととは対照的に、完形中国鏡を多数保有した須玖遺跡や三雲遺跡、あるいはほかの巨大農村では中国銭貨がほとんど出ない(三雲遺跡0点、須玖遺跡1点、吉野ヶ里遺跡1点、平塚川添1点)ことである。この傾向は朝鮮半島の南部でも同様で、代表的な海村である靺鞨遺跡では、五銖銭・半両銭あわせて5点が出たが、完形中国鏡はない。

したがって、日韓の海村のつながりは農村とは別個の世界を形成し、その中で中国銭貨が流通・使用されたと見られる。つまり、海村は相互のネットワークを強固に作って独自の世界をつくり、国の中心集落からコントロールされるだけでなく、中国銭貨を用いた交易で国の中心集落をコントロールする面もあったのである。宗像地域にもこうした海村は当然存在したとみられるが、その様相解明は今後の課題である。

### (4) 宗像地域の武器形青銅祭器

弥生時代前半期新段階に出現した朝鮮系細形青銅武器(銅剣・銅矛・銅戈)は、武器としての機能を失いながら、中細形、中広形、広(平)形の順番で長大化する。北部九州では後半期になると銅剣は使われなくなり、とくに中広形や広形の銅矛・銅戈は、武器形祭器となって、多くが埋納祭祀に使われる。埋納祭祀は、近年では村の中で完結し首長層が一般成員から離脱する

際の祭祀にも用いられたことが判明しつつあるが、基本的には村を越えたまとまりを対象とする。すなわち、小地域や国あるいは国々の祭祀である。しかもこれらの武器形青銅祭器は、奴国の中心集落である福岡県春日市須玖遺跡を中心に集中的に生産され、製品は対馬を経て朝鮮半島南部にまで及んでいる。後期の青銅祭器の体系(第18図-6)では、銅矛が最上位にあり、その次に銅戈が位置する。とくに対馬での銅矛単一多数埋納は、奴国・伊都国を盟主とするツクシ政権の国々のマツリにこれらの銅矛が用いられたことを示す。

注目されるのは、弥生後半期の宗像地域ではそうした銅矛・銅戈の埋納例が皆無な点である。これはまだ発見されていないためとの解釈も可能だが、上八中羅尾の石棺墓から出た中細形銅剣(第18図-2・3)や鐘崎の石棺墓出土中細形銅剣(第18図-4)は樋が鋒部まで伸びず、中国・四国地域との関係性が強い銅剣であり、本来中広形・広形の銅矛・銅戈埋納は不在であった可能性が高い。出土地があまり信頼されていない(伝)勝浦の平形銅剣も見直しが必要である。

釣川川床出土の広形銅矛片(第18図-5)は、これまで広形銅戈説もあったが、実見したところ、流布している図とは異なって樋がすばまって鋒部に近い部分であった。これが戈ならば背もすばまるはずだが、背の幅は変わらないため広形銅矛でよい。遺存状態が悪いが背に鑄が残る点もこれを裏付け、広形銅矛A類である。袋部側の破面には中子の先端かとみられる中空部分もわずかに認められる。ただし、この広形銅矛片はたたき折られて曲がった破片である。銅矛形祭祀としての価値を失って捨てられたか、青銅器の原料としての流通品だったとみられ、埋納銅矛が今後宗像地域で出るとする推測の根拠とはならない。

このように見てくると、ツクシ政権の本流であった銅矛銅戈の埋納祭祀を、この地域はあまり受け入れておらず、むしろ中国・四国地域とつながっていた可能性も出てくる。

#### (5) 沖ノ島社務所前遺跡出土の中国・四国・近畿系土器

今回、社務所前出土土器を再調査した結果、報告ではほとんど図示されなかった外来系土器、すなわち西日本地域でも九州より東の地域である中国・四国・近

畿地域の弥生時代後半期～古墳時代初期の土器が含まれていることが分かった(第19図-1～16)。

まず注目されるのは凹線文土器甕(第19図-1～3)がそれである。1は報告書に図面が収録され、口縁端の文様は沈線文とされたが、凹線文である。2もやはり口縁端に凹線文を施す甕だが報告書には未収録で、口縁の傾斜や長さが1と異なるため別個体である。この2点の甕は、北部九州在来の甕の口縁端に凹線文を施した見られる3とは異なって口縁端を上下に顕著に拡張しており、搬入品の可能性が高いと見られる。1は吉備地域のⅣ様式期、2は西瀬戸内のⅤ様式期かと思われるが、この点は今後の検討課題としたい。

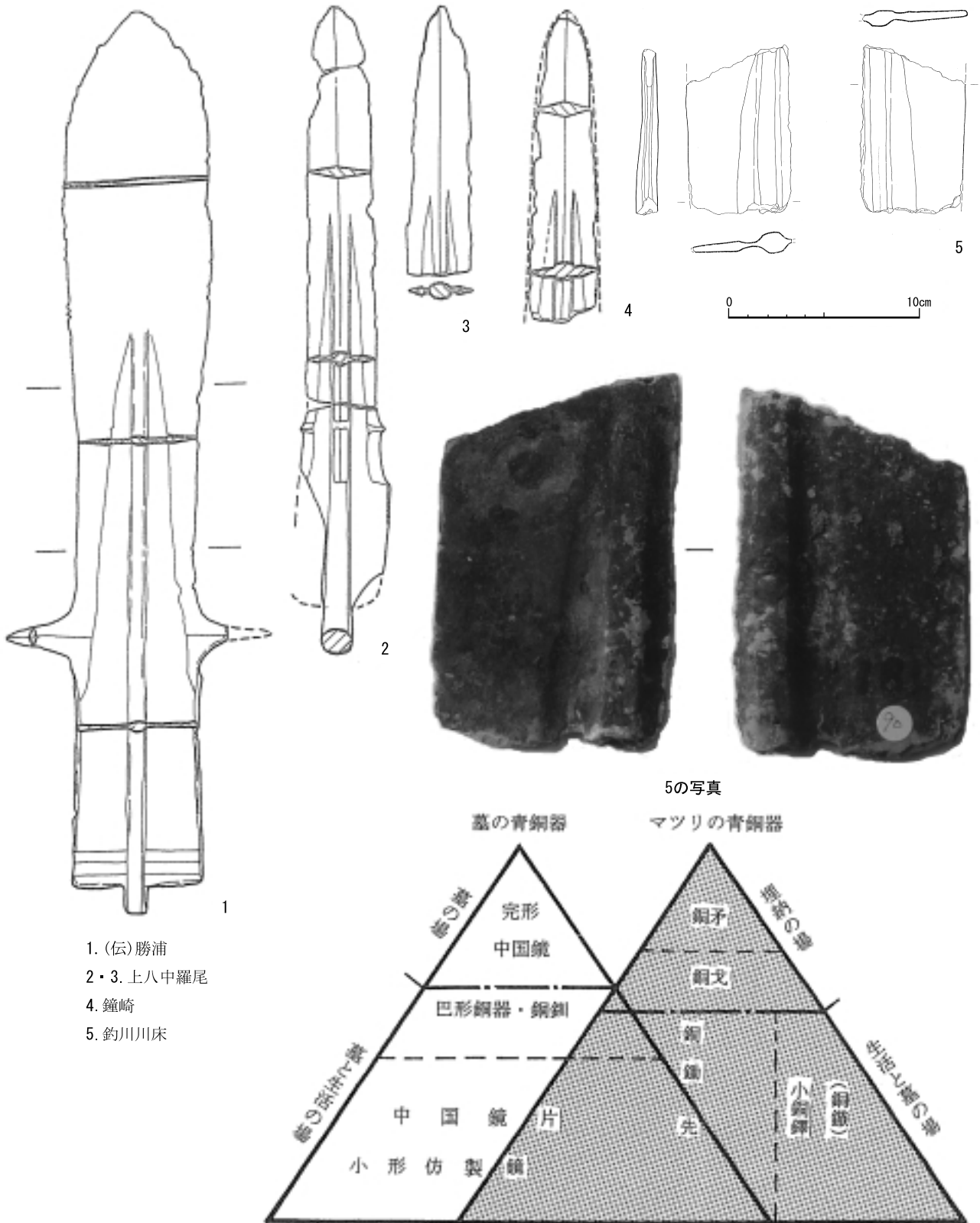
次は庄内式系・布留最古式系の土器で、甕・壺がある(4～15)。とくに庄内式系の甕(4～8)は、口縁端面が垂直になるもの(7)と口縁端面が内傾したもの(4～6・8)があり、後者には上方にはっきりと跳ね上げるもの(4・5)、わずかに跳ね上げるもの(6)、跳ね上げがないもの、口縁端面に一条の沈線が巡るもの(8)等があって、それぞれ別個体と考えられる。いずれも右上がりの細かい連続成形平行叩き目で、内面は頸部付け根まで削る。6は河内産の可能性もある。また、3・6～8には口縁部の中ほどに接合痕跡が残る。ほかに、二重口縁壺(10・11)、広口長頸壺(12)、小形壺(13)などがあり、布留最古式系の甕(19)や、口縁端が水平な典型布留式系甕(15)は少ないため、これらの壺も上限は庄内式系の甕の時期までさかのぼる可能性がある。このほか、14はⅤ様式系の甕の突出平底で、右上がりの粗い連続成形叩き目痕跡がわずかに残る。庄内式土器と同時期でも差し支えない。

庄内式系の甕については、今川遺跡で同様に右上がりの細かい連続成形叩き目で暗褐色胎土の河内産庄内式甕(第19図-19)が出ており、宗像地域はいち早く庄内式土器を受け入れたと見られる。

なお、16は鳥足文叩き目が施された5世紀の陶質土器である。本稿の時間的な範囲を外れるが、沖ノ島では初めての発見であり、宗像地域は古墳時代の中期から後期にかけて、九州では糸島地域とともに鳥足文叩き目の朝鮮半島系土器が集中する地域なため、収録しておく。

今回の再調査は、残念ながら時間的にも限られきわ

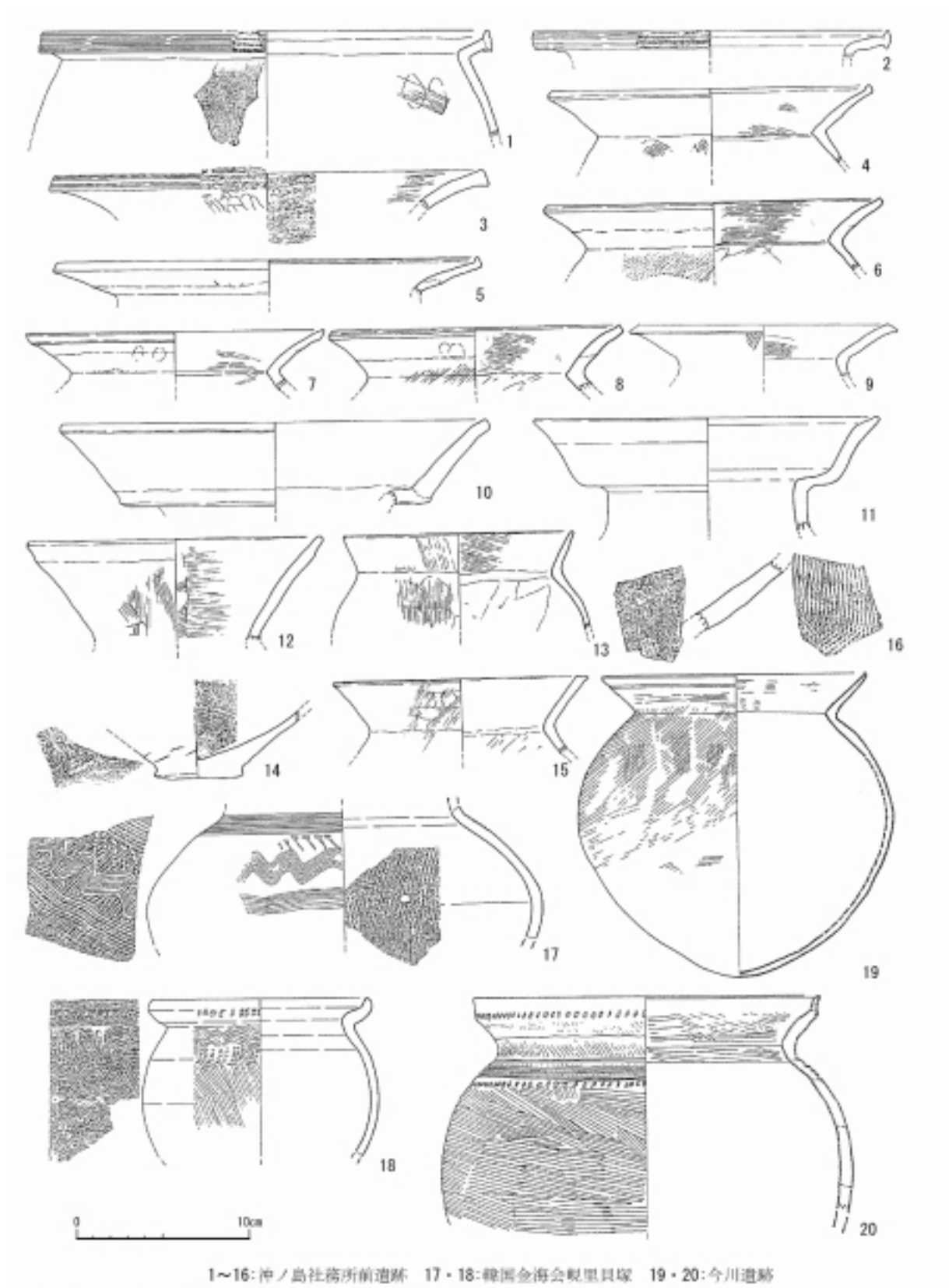
① . 沖ノ島祭祀の成立前史



6. 弥生時代後期の二つの青銅器体系概念図

第18図 宗像地域の弥生後半期の青銅器と北部九州における弥生後半期の青銅器体系 (1~4:『宗像市史 通史編』宗像市史編纂委員会(1997)、5:武末作成・撮影、6:『古文化談叢』武末純一(1990))

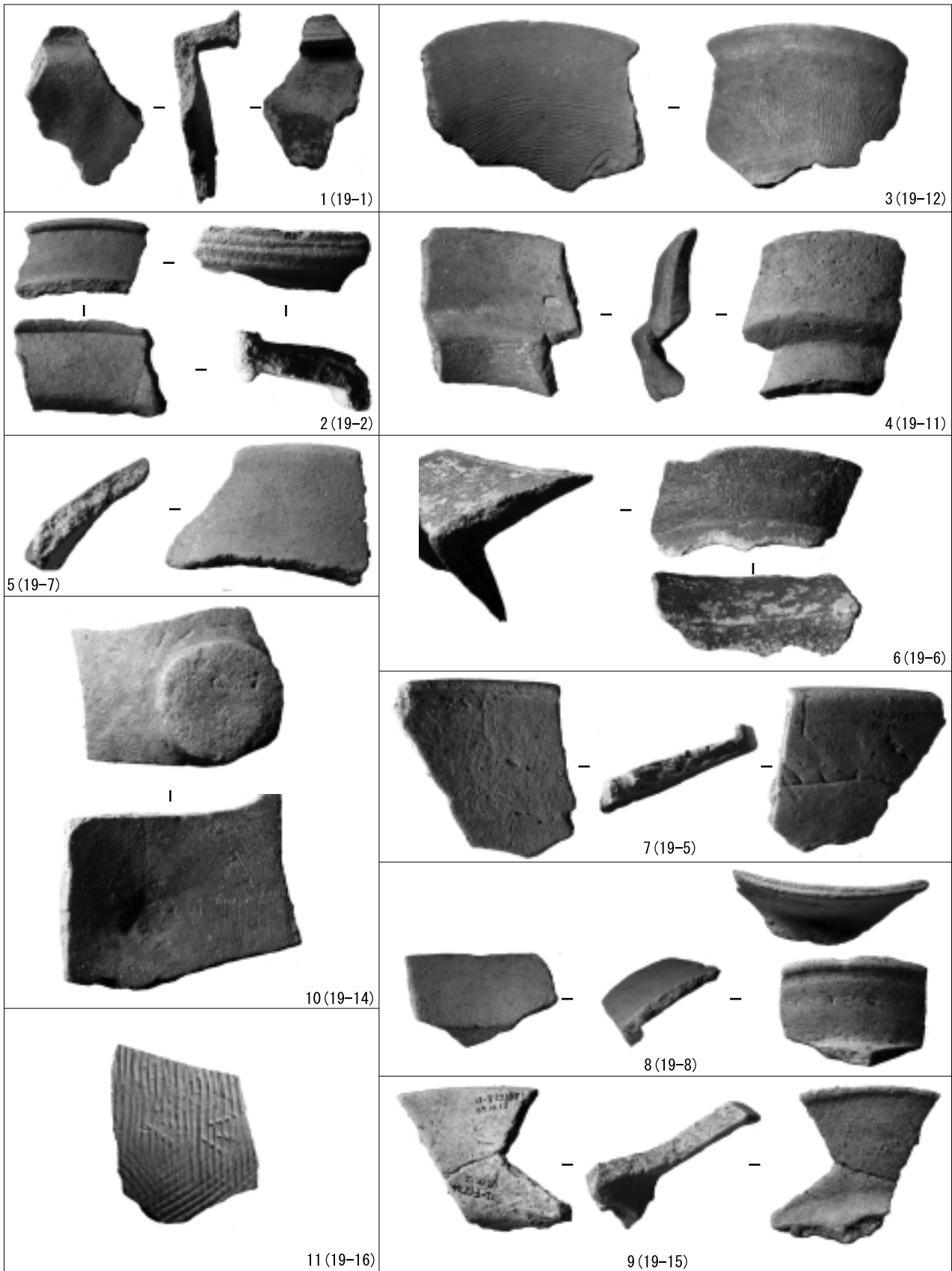




1~16: 沖ノ島社務所前遺跡 17・18: 韓国金海会峴里貝塚 19・20: 今川遺跡

第19図 沖ノ島社務所前出土中国・四国・近畿系土器および関連資料  
 (1~16: 川口陽子・藤島志考・井上葵・田中悠太作成、17・18: 『金海会峴里貝塚』財団法人三江文化財  
 研究院(2009)、19・20: 『今川遺跡』津屋崎町教育委員会(1981))

① . 沖ノ島祭祀の成立前史



第19図(写真) 沖ノ島社務所前遺跡の中国・四国系土器(1・2)、近畿系土器(3~10)、陶質土器(11)(武末撮影)

めて不十分であったが、弥生時代の後半期に瀬戸内海地域や山陰地域まで及ぶ国際海上交流路のなかに宗像地域も組み込まれていたことをうかがわせるとともに、古墳時代の本格的な祭祀、国家的な祭祀の直接的な上限が、果たして庄内式期の時期までさかのぼるのかという重要な問題を提起しえた。

また最近、金海貝塚では後期後半の近江系土器甕1点(第19図-18)と、近江系甕の文様を持つ瓦質土器1点(第19図-17)が出土した(武末純一ほか2010)。18は近江北部から若狭地域にかけての製品の可能性が高い。17は近江系の文様を瓦質土器に転写できる人がいたことを示し、近畿地域まで交易路がつながっていたことを示す。宗像地域では今川遺跡で近江系の甕(第19図-20)が表採されており、この時期に宗像地域もそうした交易路の拡大と変化に、積極的な役割を果たしたことがわかる。

#### 4. おわりに

以上、宗像地域の弥生前半期古段階の環溝集落や墳墓の様相からは階層分化の兆しがみられ、弥生時代前半期新段階には田熊石畑遺跡の青銅器副葬墳墓群に見られるように、この地域でも国形成が本格的に始まり、首長層が成長し始めた。その裏には、朝鮮半島南部から北部九州そして山陰地域に及ぶ「倭の水人」の活動による交易網の存在があり、沖ノ島の社務所前遺跡から出たこの時期の勒島式土器からすると、宗像地域沿岸部の水人たちも重要な役割を果たしたとみられる。そして、(伝)沖ノ島出土銅矛からみて、この時期に沖ノ島が地域的な航海祭祀の場になっていたことが推測された。

弥生時代後半期には北部九州でも海村が明確になり、朝鮮半島南部から山陰地域にかけて、農村のつながりとは異なる海村世界ができ、楽浪郡の後ろ盾のもと、交易網はさらに強化される。沖ノ島社務所前遺跡で出たこの時期の原三国時代三角粘土帯土器や瓦質土器からみて、弥生時代前半期と同様に宗像地域は重要な役割を果たし、おそらく沿岸部には海村も存在したと見られる。そして、中広形・広形銅矛銅戈の埋納祭祀の不在や、沖ノ島社務所前遺跡で出た凹線文土器や庄内

式系土器、今川遺跡の庄内式土器や近江系土器などからみると、古墳時代初頭にかけて、近畿までつながる交易網の中で、ツクシ政権中枢部の動きとは同化せず、東の地域とのつながりをより強く求めた宗像地域の動向も浮上する。これこそが、古墳時代沖ノ島祭祀の前史であると捉えておきたい。

ただし、肝心の沿岸部の海村の様相は全く明らかではなく、弥生時代後半期の国の首長層や中心集落の様相も明らかではない。また、沖ノ島社務所前遺跡で出た土器の再調査もきわめて不十分なままであり、短時日での執筆であったため、今後に残された課題は山積みで、触れえなかった問題も一つや二つにとどまらない。今後はもっと時間をかけた調査と整理、執筆を希望して、稿を終えることとする。

成稿にあたっては、下記の方々をはじめ多くの方々にご教示ご協力いただいた。記して謝意を表する次第である。

小田富士雄	柳田康雄	柳本照男	田中良之
溝口孝司	金武重	鄭仁盛	李昌熙
安楽勉	古澤義久	河原和人	是田敦
堤宏	重住真貴子	白木英敏	南時夫
桃崎祐輔	川口陽子	藤島志考	井上葵
田中悠太			

(2011年3月9日稿了、6月15日補訂)

補注

- 1) 旧宗像郡域を宗像地域としておく。
- 2) 朝鮮半島の該期の時代名称と時代区分は近年、無文土器時代中期までを青銅器時代にして無文土器時代中期は青銅器時代後期と呼ぶとともに、無文土器時代後期以降を三韓時代とする、あるいは無文土器時代後期だけを初期鉄器時代と呼んで、瓦質土器出現以降は従来通り原三国時代とする説も有力である。しかし武末は、鍛造鉄器の普及と瓦質土器の出現こそ時代区分の大きな指標であると共に、北に高句麗と楽浪をはじめとする漢の郡県があり南に三韓がある時代の朝鮮半島全体の名称としてはやはり原三国時代が適当であると考えており、これまでの無文土器時代・原三国時代という名称に従っている。
- 3) 普通「環濠集落」とされるが、環濠では当初から防御の意味が入り込むため、武末は「環溝集落」の語を使っている。
- 4) 報告書では副葬品の組合せによって5群に分けられたが、ここでは1 - (1)で述べた墓と墓のあいだの空白の度合いによって3群に大別した。
- 5) 最近、積良洞サンジョク遺跡と遼寧式銅剣がこれまで出土していなかった月内洞遺跡の間が調査され、両者が同一の遺跡であることが判明するとともに、その中間の上村Ⅱ地区18号墓と上村Ⅲ地区92号墓・116号墓で遼寧式銅剣が各1点出土した(東北亜支石墓研究所2010)。しかし、積良洞サンジョク地区に比べれば、遼寧式銅剣の出土量は少なく、積良洞サンジョク地区が有力集団であることに変わりはない。むしろ、本遺跡の内部でも遼寧式銅剣を多数保有する集団、少数保有する集団、全く保有しない集団に階層分解していたことになる。
- 6) 甕棺墓や人を葬る部分が100cm以下の石棺墓・土壙墓を小児墓・乳幼児墓とすると、南山里遺跡は27基中12基で44%、松菊里遺跡は8基中2基で25%である。
- 7) もちろん宗像地域では、松菊里遺跡のような青銅器副葬墓はこの段階には見られず、階層分解の程度は低い。また南山里遺跡でも磨製石剣の副葬がみられるから、田久松ヶ浦や久原Ⅱ区の墳墓群での石剣副葬墓の優位性はあまり高くない。
- 8) 最近、早良平野奥部の岸田遺跡で中期初頭から前半の甕棺墓・木棺墓4基から細形の銅剣4点・銅矛2点が出土した。その評価については、正式報告書が刊行されてから検討したいが、吉武遺跡群への集中度には及ばない。
- 9) 残念ながらこの銅矛は資料調査ができなかった。
- 10) 朝鮮半島の青銅器に関する武末の1～3期編年の内容については、1期が遼寧式銅剣の時期、2期が細形銅剣のみの時期、3期は細形銅剣に細形銅戈・細形銅矛が加わる時期を考えている。4・5期は原三国時代に入る。詳しくは武末2004を参照していただきたい。
- 11) 朝鮮半島の中国式銅剣には、新式の遼寧式銅剣と共伴

- した例(孤山里)や3期古段階前半の青銅器との共伴例(全羅南道草浦里)があるから、遼寧式銅剣よりはやや新しいが、日本の弥生時代前期末以前になる。
- また李健茂は遼寧式銅剣が出た開城市海豊郡海坪里も石積みの埋納遺構と考えた(国立中央博物館・国立光州博物館1992 : p.127)。
- 12) 李相吉2000では加浦洞とされたが報告書(慶南大学校博物館2006)では架浦洞とされたため、架浦洞とする。
  - 13) これらの遺構のうち117・659・733・743・788・984・1091号が竪穴で、残りはすべて住居跡である。A1区域の竪穴は総27基で、確実な無文土器時代後期の竪穴には、そのほかに316・322・469号がある。住居跡は、報告書考察編(慶南考古学研究所2010b)の崔鍾圭の論文につけられた無文土器時代遺構分布図によれば、A1区域の住居跡89基のうち、751・1791・2128・2512号の4基が無文土器時代中期で、残りはすべて無文土器時代後期である。このうち2128号では弥生系土器が出ており、筆者は無文土器時代後期の可能性もあると考えている。ともあれA1区域の無文土器時代後期住居跡は85基前後で、弥生系土器が出土した住居跡38基の2倍以上だが、弥生系土器が出なかった住居跡は遺物がほとんど無い。

また、崔鍾圭は無文土器時代後期の住居跡を方形と長方形に分け、重複関係から長方形が先行して方形が後出することや、長方形は力群、方形はナ群に集中することから、弥生系土器からみると力群からナ群への移動が認められるとした筆者の考えと同一の結論を下している。

  - 14) ただし、朝鮮半島南部のこの時期の双合范鑄造鉄斧では、龜山洞例も含めて、袋口部に横隆線をめぐらす例はきわめて少なく、朝鮮半島北部との交易もうかがわせる。
  - 15) 武末は韓半島南部の原三国時代の土器を三韓土器と呼び、瓦質土器と赤焼土器(軟質土器、粘土帯甕も含める)で構成されると考える。
  - 16) チゴノハナ3号墓自体は古墳時代前期後半だが、出土土器から古墳時代の土器を除けば、粘土帯の貼り付けが薄い薄型三角形粘土帯甕と後期初頭の弥生土器甕が残る。

## 引用文献

- 阿久井長則・佐田茂(1979):「沖ノ島出土の細形銅矛」;  
『宗像沖ノ島 本文』 座右宝刊行会
- 甘木市教育委員会(2001):『平塚川添遺跡Ⅰ』(甘木市文化財調査報告書 第53集)
- 池淵俊一(2010):「山陰における朝鮮半島系土器の様相 弥生時代後期を中心に」;  
『第59回埋蔵文化財研究集会 日本出土の朝鮮半島系土器の再検討 弥生時代を中心に』
- 尹武炳(1987):「公州灘川面南山里先史遺跡」;  
『三佛金元龍教授停年退任紀念論叢 考古学篇』
- 梅原末治・藤田亮策・小泉顯夫(1925):『南朝鮮に於ける漢代の遺蹟』大正11年度古蹟調査報告 第2冊
- 岡崎敬(1968):『夫租叢君』銀印をめぐる諸問題」;  
『朝鮮学報』46
- 小郡市教育委員会(1994):『一ノ口遺跡Ⅰ地点』(小郡市文化財調査報告書 第86集)
- 小田富士雄(1982):「山口県沖ノ山発見:の漢代銅銭内蔵土器」;  
『古文化談叢』第9集
- 小田富士雄・韓炳三編(1991):『日韓交渉の考古学 弥生時代篇』 六興出版
- 春日市教育委員会(1994b):『奴国の首都 須玖岡本遺跡』 吉川弘文館
- 片岡宏二(1999):『弥生時代渡来人と土器・青銅器』 雄山閣
- 片岡宏二(2008):「弥生時代における渡来集団の問題」;  
『考古学ジャーナル』No. 568
- 川口陽子(2010):「福岡県宗像市域の弥生時代 田熊石畑遺跡の理解に向けて」;  
『還暦・還暦?・還暦!』 武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集
- 基山町遺跡発掘調査団(1978):『千塔山遺跡』
- 九州大学大学院人文科学研究科(2011):『考古学研究室』  
『杵岐カラカミ遺跡Ⅲ カラカミ遺跡第1地点の発掘調査(2005~2008年)』
- 金吉植(1998):「扶余松菊里無文土器時代墓」;  
『考古学誌』第9輯
- 金賢植(2000):「陝川盈倉里遺跡調査概報」;  
『考古学から見た弁・辰韓と倭』九州考古学会・嶺南考古学会第4回合同考古学大会
- 財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室(2008):『備後守屋舗南側土壘跡』(北九州市埋蔵文化財調査報告書 第405集)
- 金元龍(1974):「伝茂朱出土遼寧式銅剣について」;  
『震檀学報』38輯
- 金鍾徹(西谷正・訳)(1987):「慶尚北道清道郡礼田洞出土の遼寧式銅剣」;  
『東アジアの考古と歴史(上)』
- 金廷鶴編(1972):『韓国の考古学』 河出書房新社
- 熊本市史編纂委員会(1996):『新熊本市史 史料編第1巻 考古資料』
- 社団法人慶南考古学研究所(2002a):『陝川郡盈倉里無文土器時代集落』
- 社団法人慶南考古学研究所(2002b):『泗川鳳溪里三国時代集落』
- 財団法人慶南考古学研究所(2009):『金海龜山洞遺跡Ⅰ - 朝鮮墓群(1) -』
- 財団法人慶南考古学研究所(2010a):『金海龜山洞遺跡Ⅸ - 無文時代集落 -』
- 財団法人慶南考古学研究所(2010b):『金海龜山洞遺跡Ⅹ - 考察編 -』
- 慶南大学校博物館(2006):『馬山架浦洞青銅器埋納遺蹟』
- 国立慶州博物館(1987):『菊隱李養璿蒐集文化財』(通川文化社)
- 国立中央博物館・国立光州博物館(1992):『特別展 韓国の青銅器文化』
- 後藤直(2000):「日・韓の青銅器 副葬と埋納」;  
『韓国古代文化の変遷と交渉』 書景文化社
- 財団法人湖南文化財研究院・益山地方国土管理庁(2009):『完州葛洞遺蹟(Ⅱ)』(湖南文化財研究院学術調査報告第116冊)
- 佐賀市教育委員会(1991):『鍋島本村南遺跡 - 1・2区の調査 -』(佐賀市文化財調査報告書 第35集)
- 財団法人三江文化財研究院(2009):『金海会峴里貝塚Ⅰ』
- 七田忠昭(2005):『吉野ヶ里遺跡』(日本の遺跡2) 同成社
- 下條信行(1989):「弥生社会の形成」;  
『古代史復元』4 講談社
- 新宅信久(1994):「江辻遺跡の調査」;  
『九州考古学会・嶺南考古学会第1回合同学会 - 資料編 -』
- 全榮來(1976):「完州上林里出土中国式銅剣に関して」;  
『全北遺跡調査報告』第6集(後藤直・訳にて『古文化談叢』第9集1982年に所収)
- 全南大学校博物館・麗川市(1993):『麗川積良洞サンジョク支石墓』第6集
- 武末純一(1982):「埋納銅矛論」;  
『古文化談叢』第9集
- 武末純一(1990):「墓の青銅器、マツリの青銅器 弥生時代北九州例の形式化」;  
『古文化談叢』第22集
- 武末純一(1998a):「日本の環溝(濠)集落 - 北部九州の弥生早・前を中心に -」九州考古学会・嶺南考古学会第3回合同考古学大会;  
『環濠集落と農耕社会の形成』
- 武末純一(1998b):「弥生環溝集落と都市」;  
『古代史の論点③都市と工業と流通』 小学館
- 武末純一(2001):「日韓銅矛の製作技術 幅木部分の構造を中心に」;  
『山中英彦先生退職記念論文集 勾玉』
- 武末純一(2002a):『弥生の村』 山川出版社
- 武末純一(2002b):「遼寧式銅剣墓と国の形成 積良洞遺跡と松菊里遺跡を中心に」;  
『福岡大学人文論叢』第34巻第2号
- 武末純一(2004a):「弥生時代前半期の暦年代」;  
『福岡大学考古学論集 小田富士雄先生退職記念』
- 武末純一(2004b):「空白、空白?、空白! 考古学における空白論ノート」;  
『海峡の地域史 水島稔夫追悼集』
- 武末純一(2006):「豊前地域の弥生集落 山国川以北を中心に」;  
『行橋市史 資料編 原始・古代』

① . 沖ノ島祭祀の成立前史

武末純一(2007):「海を渡る弥生人」;『海と弥生人』鳥取県教育委員会第8回弥生文化シンポジウム)

武末純一(2008a):「韓国・勒島遺跡A地区の弥生系土器」;『七隈史学』第9号

武末純一(2008b):「三韓と倭の韓日交流」;『韓日文化交流 - その新たな歴史の窓を開いて』釜山博物館

武末純一(2008c):「韓国・勒島遺跡のアワビおこし」;『九州と東アジアの考古学 九州大学考古学研究室50周年記念論文集』

武末純一(2009a):「三韓と倭の交流 - 海村の視点から - 」;『国立歴史民俗博物館研究報告』第151集

武末純一(2009b):「考古学における空白論ノート(承前)」;『東アジアの古代文化』第137号 大和書房

武末純一(2010):「韓国・金海龜山洞遺跡A1地区の弥生系土器をめぐる諸問題」『古文化談叢』第65集

武末純一(2011):「原三国時代年代論の諸問題 北部九州の資料を中心に」『原三国時代年代論の諸問題』(財団法人世宗文化財研究院開院2周年記念招請講演会資料集)

武末純一・伊庭功・辻川哲郎・杉山拓己(2010):「金海會峴里貝塚出土近江系土器」;『考古学探究』第8号

橋昌信・黒野肇(1979):「社務所前遺跡」;『宗像沖ノ島本文』 座右堂刊行会

沈奉謹(1980):「慶南地方出土青銅遺物の新例」;『釜山史学』第4輯(藤口健二・訳にて『古文化談叢』第8集1981年に所収)

沈奉謹・鄭聖喜(1982):「東亜大学校博物館所蔵の青銅遺物新例」;『古文化』第20輯(藤口健二・訳にて『古文化談叢』第17集1987年に所収)

津屋崎町教育委員会(1981):『今川遺跡』(津屋崎町文化財調査報告書 第4集)

鄭仁盛(2008):「瓦質土器の「楽浪土器影響説」の検討」;『嶺南考古学会・九州考古学会第8回合同考古学大会 日・韓交流の考古学』

財団法人東北亜支石墓研究所(2010):『麗水GSカルテクス工場拡張予定敷地内文化遺跡発掘調査(4次)』調査指導委員会資料

長崎県教育委員会(1974):『対馬 浅茅湾とその周辺の考古学調査』(長崎県文化財調査報告書 第17集)

長崎県教育委員会(1999):『原の辻遺跡』(原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第16集)

長崎県教育委員会(2005):『原の辻遺跡総集編』(原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第30集)

長崎県教育委員会(2007):『原の辻遺跡 石田大原地区緊急調査報告書』(原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第35集)

原俊一・白木英敏・秋成雅博(2000):「宗像地域におけるや矢追時代前期の集落と墓制」;『日本考古学』第9号

福岡県教育委員会(1985):『三雲遺蹟 南小路地区編』(福岡県文化財調査報告書 第69集)

福岡市教育委員会(1975):『板付周辺遺跡調査報告書2』(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第31集)

福岡市教育委員会(1992):『国史跡野方遺跡環境整備報告

書』(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第313集)

福岡市教育委員会・岡三リビック株式会社埋蔵文化財調査室(2005):『雑餉隈遺跡5代4・15次調査報告』(宗像市埋蔵文化財調査報告書 第857集)

釜山直轄市立博物館(1990):『東萊福泉洞萊城遺蹟』(釜山直轄市立博物館遺蹟調査報告書 第5冊)

古澤義久(2010):「老岐における韓半島系土器の様相」『第59回埋蔵文化財研究集会 日本出土の朝鮮半島系土器の再検討 弥生時代を中心に』

前原市教育委員会(2002):『三雲・井原遺跡Ⅱ - 南小路地区編 - 』(前原市文化財調査報告書 第78集)

前原市教育委員会(2006):『三雲・井原遺跡Ⅴ - 屋敷・下西地区の調査』(前原市文化財調査報告書 第90集)

宮里修(2010):『韓半島青銅器の起源と展開』(ハンピツ文化財研究院文化財研究叢書4(社会評論))

宗像市教育委員会(1988):『久原遺跡 概報 古代宗像を探る』(宗像市文化財調査報告書 第19集)

宗像市教育委員会(1991):『名残Ⅳ 福岡県宗像市所在遺跡の発掘調査報告』(宗像市文化財調査報告書 第29集)

宗像市教育委員会(1995):『富地原森 福岡県宗像市富地原所在遺跡の発掘調査報告』(宗像市文化財調査報告書 第40集)

宗像市教育委員会(1999):『田久松ヶ浦 福岡県宗像市田久所在遺跡の発掘調査報告』(宗像市文化財調査報告書 第47集)

宗像市教育委員会(2001):『東郷登り立 福岡県宗像市東郷所在遺跡の発掘調査報告』(宗像市文化財調査報告書 第51集)

宗像市教育委員会(2007):『むなかたの文化財 平成17年度文化財保護事業』

宗像市教育委員会(2009):『概報 田熊石畑遺跡 福岡県宗像市田熊所在遺跡の発掘調査概要』(宗像市文化財調査報告書 第61集)

宗像市史編纂委員会(1997):『宗像市史 通史編』第一巻 自然・考古

山崎純男(2008):『最古の農村 板付遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」048 新泉社

李健茂(2000):『梨花女子大学校博物館所蔵異形銅戈について』;『鶴山金廷鶴頌寿記念論叢 韓国古代史と考古学』

李相吉(2000):『青銅器埋納の性格と意味 馬山加浦洞遺跡の報告を兼ねて』;『韓国考古学報』42

李昌熙(2004):『勒島遺跡出土外来系遺物報告 勒島Ⅲ期の設定とともに』;『勒島貝塚と墳墓群』(釜山大学校博物館研究叢書 第29輯)

財団法人嶺南文化財研究院(2010):『慶山新垈里遺跡Ⅰ』

補記

2011年6月4日に韓国の全州国立博物館で特別展「錦江流域の新たな力 2100年前の完州の人々」を見学し、その際に忠清南道公州市水村里遺跡出土細形銅矛と全羅北道



完州郡葛洞遺跡 8 号墓出土細形銅矛の関部に(伝)沖ノ島や(伝)公州の細形銅矛と同様な左右 1 条ずつの横突線を確認した。この 2 点の細形銅矛はいずれも袋部に環耳をもつため、(伝)沖ノ島の細形銅矛も環耳をもつ可能性が高くなった。

葛洞 8 号墓の報告書では横突線は図示されていないが、図版の細部写真には明瞭に表れている(湖南文化財研究院 2009 の図面 42、写真 57)。葛洞 8 号墓の小形甕は直口縁のため時期が細かく限定できないが、水村里の細形銅矛には最末期の円形粘土帯甕が共伴する。この円形粘土帯甕は、初期三角形粘土帯甕の時期までの存続が考えられるため、弥生時代中期初頭～前半が併行する中心時期である。こうした水村里例や葛洞 8 号墓例は(伝)沖ノ島の細形銅矛よりも先行するとみられるから、(伝)沖ノ島の細形銅矛は中期前半が中心年代となろう。